

魔法界と奇妙な世界の融合

穂月碧

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

マドレーヌ・ウエントワースは自分はごくごく普通の“人間”だと思っていた——祖母の友人と名乗る謎の少女からの手紙が届くまでは。

ある日突然明らかになる敵の企み。マドレーヌは仲間と共にピキュリアの危機を救おうと奔走する。

目次

第1話	手紙	1
第2話	旅行	9
第3話	誘（いざな）い	15
第4話	屋敷とピキュリア	20
第5話	ミイナの過去	28
第6話	能力探し	37
第7話	警告	40
第8話	迫り来る闇	57
第9話	忌まわしい怪物	68
第10話	束の間の平穏	81
第11話	意味	106
第12話	戦いの幕開け	123

第1話 手紙

普通の少女であるはずのマドレーヌとエリザベスが二つの異世界の仲間に加わることになったのは、決して偶然ではなかった。

「おはようー!」

マドレーヌが教室に入ると、一人の少女が声をかけてきた。

「おはよう、ベス!」

挨拶を返すと、少女——ベスがにっこり笑った。

「昨日の宿題終わった?」とベスが聞いてくる。

「一応終わったけれど、とても難しかったよ!」

「ちよつと見せて!」

「少しね!」

マドレーヌは笑いながら自分の席へ向かう。ベスは話しかけながらついてきた。

マドレーヌとベスは幼なじみだ。物心ついた時から、エリザベス・トツカ——あだ名はベス——と仲良しだった。眼鏡をかけた真面目なベスは、明るくさっぱりしている。マドレーヌにとって大切な友達だ。

13歳になった今も、その友情は変わっていない。運動が得意なベスは運動が苦手なマドレーヌに指導してくれ、マドレーヌもわりかし得意なことでベスを手伝おうと思っている。それが二人の友情なのだ。

この日もいつも通りの平和な一日だった。マドレーヌはその日の帰り際、ベスと一緒に帰った。これもいつものことだ。時々、クラスメイトのルーナやジニーが加わるが、その時はその時で楽しい。

2人は近所に住んでいるので、近くの路地で別れた。

「また明日ね、マドレーヌ!」

ベスが言う。

「また明日よろしくね!」

マドレーヌが手を振ると、ベスはうなずき、元気に駆けていった。

マドレーヌはそんな親友を見つめてにこっと笑い、残りの帰路を歩いた。

家に着くと同時に、冬を感じさせる冷気が吹き込んできた。体を冷たくするだけでなく、マドレーヌの心にも冷気が入る。マドレーヌは寒さに身震いした。

「ただ今帰りました！」

家に入ると、玄関口に着くか着かないかのうちに、扉が勢いよくノックされた。マドレーヌはドアの隙間から覗く。ベスだ。

「なに？」とマドレーヌ。ベスは興奮して腕を振り、中に通すようせがんだ。苦笑いし、ダイニングにいる母を呼ぶ。母は訝しげに目を細めてやってきたが、ベスを一目見ると声を上げた。

「まあ、エリザベス！久しぶりね！お母さまはお元気？」

母が言う。ベスにはにここと笑い、「お久しぶりです！元気です」と答えた。

「さあさあ、上がって」

「ありがとうございます！」

ベスは敷居を飛び越えるようにして玄関に上がってきた。母がマドレーヌとベスを後ろに従え、ダイニングに向かう。広々としたそこに着くと、ベスはさっそく本題に入った。

「今さつき帰宅したらね、お母さんが！」

ベスの声は興奮で震えている。無言で続きを促すと、彼女は目をきらきらさせた。手に持っている紙束を机の上に置く。マドレーヌはのぞきこんだ。

それは紙束ではなかった。分厚い封筒だ。

「ここを見て」

ベスが人差し指を封筒の裏に置いた。そこには濃くにじんだインクで「エマ・ブルームより」と書いてあった。

「誰か分かる？」とベス。マドレーヌはその宛名を見た。最初は誰なのだろうと真剣に考えこんだが、ふと気がついた。これはベス宛ての手紙だ。自分宛てじゃない。そう考えてみれば、彼女の指す宛名に思い当たりがなくても納得だ。マドレーヌは笑いながら、「この宛名の

人を知らないけれど、これはベス宛てのお手紙でしょ？それが、私が宛名を知らない理由だと思っただけだ」と言った。だが、ベスは大真面目に「ここ見て、マドレーヌ」と封筒を表に返して見せた。

マドレーヌは腰を浮かせて小さな文字を見る。すると…。

「え!？」

マドレーヌは思わず声を上げた。そこには「エリザベス・トツカとマドレーヌ・ウエントワースへ」と記してあったのだ!

「これが家に届いたの。だから、マドレーヌにも伝えなきゃって思っ
て!いきなり押しかけてごめん」

ベスが笑う。マドレーヌはうなずいたが、心の中には疑問が渦巻いていた。

マドレーヌはエマ・ブルームという人物を知らない。名前を聞いたこともない。思い当たらないのに自分宛てでもあるなんて奇妙だ。不安がぞくぞくと心に染み込む。

「お母さん。エマ・ブルームという人から手紙が来たんですが、その名前に心当たりはありますか？」

ベスも少し不安げだ。母に聞いている。

「エマという幼なじみがいなかったかしら? 姓は忘れてしまったけれど」と母が言う。ベスとマドレーヌは顔を見合わせ、少し明るい気持ちになった。雲の間から太陽の光が射し込んだように、二人の心にも陽射しが照りつけてくる。

「そういえば、エマという子がいた気がする!」

ベスが目を輝かせて身を乗り出した。マドレーヌは頭をひねつても思い当たりがなかったが、二人にそう言われると、いたような気がしてきた。

「そうね! エマっていう名前は多いから、いたかもしれない」とマドレーヌが言うと、ベスはうなずいて「そうだよね! 返事を出してみる?」と聞いた。そこで母が「内容を見たら?」ともっともなことを言った。二人は宛名を見るのに一生懸命で、肝心な中身を見ていなかった。ベスが母から手渡されたはさみで封筒の上を切り、厚い便箋を引っ張り出した。マドレーヌが封筒を手につと、まだでこぼこして

いる。逆さにすると、かたいものが手に触れた。

ベスが手紙を読んでいる間、マドレーヌは手に触れたものに見入り、信じられないような気持ちになっていた。興奮で胸がドクン、ドクンと鳴り、その音がベスにも聞こえるのではないかというほどだ。

それは、ブレスレットだった。銀色のきらきら輝くブレスレット。それは、生前に祖母が一時も離さず身につけていたものにそっくりだ。九歳の時に他界した祖母は優しく穏やかで、いつもブレスレットを見せてくれていた。ある日、気になったマドレーヌが「いつもおばあさんが付けているそのブレスレット、そんなに大事なの？」と子供なりに質問したことがある。その時のおばあさんの笑顔はしわしわで、優しげで、昔の思い出をたどるように「もちろん。これはね、マドレーヌ。おばあさんが親友にもらったブレスレットなのよ」と教えてくれた。祖母の声を思い出すと、目頭が熱くなる。

「ね、マドレーヌ、交換。一枚目はマドレーヌ宛みたいだよ。読んでないけどね！」

ベスがマドレーヌの持つブレスレットを取った。代わりに便箋を手渡される。マドレーヌは手紙を読み始めた。ベスの言った通り、一枚はマドレーヌ宛てだ！

「マドレーヌ・ウエントワースへ

私のことを覚えていますか？

私は、あなたの祖母がお亡くなりになったと聞いて悲しみました。私はおばあさまと親しかつたのです。あなたに疑われないよう、銀のブレスレットを同封します。それをあなたが身につけてくれるといいのですが。

小学校卒業後に引越しました。ウエールズのケインホルム島の古い孤児院の近くです。住所を下に記しておきます。手紙を待っています。近々会えると思います。その時に何もかも話します。

エマ・ブルームより」

なぜエマと名乗る少女は、マドレーヌの祖母と親しかつたのだろうか？ 友達の中に、祖母と親しい人などいなかった。祖母は病弱で、滅多

に家から出なかつたのだ。

エマ・ブルームの字は大人びたきれいな字で、とても同年代の字とは思えない。マドレーヌは顔を上げ、すがりつくようにベスを見た。視線を感じたのか、ベスがブレスレットから目を離し、こちらに向き直った。

「このブレスレットは？心当たりある？」とベス。

「亡くなった祖母のものに違いない」

マドレーヌがはつきり言うのと、ベスが手で口を覆い「えっ」と目を見開いて言った。母は電流が体に流れたとでもいうように飛び上がり、ベスからそれを受け取ってまじまじと見ている。

「これは私の母のもので間違いないわ。それにしても、この…エマ・ブルームという人物は奇妙ね。誰なのかしら？私の母の知り合いなんて…。ということは、あなたたちの幼なじみではないのかしらね？複雑怪奇極まりない」

母は額に手をあて、真剣に考えているようだ。

「ねえねえ、返事を出してみようよ！ほら、住所も書いてあるしね。どう？それで謎が解決したりして！」とベスが言う。

「知らない人ならば迂闊なことではできないわ。危ないでしょう」

母が人差し指をマドレーヌとベスに向ける。マドレーヌとベスは隣同士で顔を見合わせ、向かい側に座る母を見た。

「はい、分かりました。私、帰ってお母さんに聞いてみます。エマっていう人を知らないかって」

行動的なベスはすぐに立ち上がり、「じゃ、マドレーヌ、明日学校でね！マドレーヌのお母さん、お邪魔しました！」と帰っていった。マドレーヌは学校の宿題をやるため、残されたマドレーヌ宛ての便箋とブレスレットを手に取り、二階の自分の部屋に上がっていった。

不安と期待を連れて朝がやってきた。起きて着替えを済ませたマドレーヌは、ブレスレットを腕に通した。知らず知らずのうちに涙がこぼれる。これが本当に亡き祖母の形見の品であるならば、大切に大切にしておくことに決めていた。下に降り、両親と祖父に挨拶し、ダイニングテーブルについた。

ハムエッグとトーストを急いで口に入れ、いつもよりも二十分早く家を出た。そのため学校に着いたのは、いつもよりも二十分早い七時十分だった。予想通りもう登校してきていたベスは、両腕をひらひらと動かし、走ってマドレーヌの席に来た。

「ハロー！マドレーヌ」

「おはよう！」

二人はにこにここと笑いあった。間髪を入れずに、ベスが「マドレーヌ、私のお母さんは思い当たらないって。でも、気にならない？」と聞いた。彼女は悪巧みをしている顔だ。マドレーヌは思わず笑い、「ベスが言いたいのは、『手紙を出してみよう』っていうことでしょ？」と言った。ベスが「当たり前！」と手でもう片方の手を打ち、天才学者の真似をしてみせる。

「ね、出してみようよ！気になって仕方がないー！」とベス。マドレーヌはしばし考えた。母には危ないことをしないようにと言われている。それを守らなくてはならない。しかし、とても気になっている今、あつさりと諦められるか？

マドレーヌは厳しい顔をして「危ないからやめよう」と言おうと口を開きかけたが、ベスの期待を込めた目を見ると、その言葉が頭から消え、代わりに新しい言葉が浮かんできた。

「私も気になっているの！返事を出してみよう」

「やっぱリー！！マドレーヌって話を分かってる！今日帰ってから、一人一枚ずつエマ・ブルームに返事を書いて、明日持ち寄って封筒に入れよう！」

「じゃあ、私、家にある封筒を持ってくるね」

「ありがとう！」

そんなこんなで、マドレーヌは一日興奮して授業を受け、終礼が終わるとすぐに帰宅した。宿題を済ませ、明日の小テストの勉強をし、午後九時にやっと手紙を書き始めた。胸が高鳴る。なにしろ知らない相手への手紙なのだ。

「エマ・ブルームさま

お手紙をありがとうございます！私には残念ながら、あなたのことを

覚えていません。ですが友人のエリザベスと相談し、返事を出すことに決めました。

あなたはなぜ、私の祖母のことを知っているのですか？教えていただきたいのです。

ブレスレットをありがとうございます。大切に保管します。

あなたにお会いできるかはまだ分かりません。手紙で事情を説明していただけませんか？

マドレーヌ・ウイントワース

書き終えた手紙の内容を三回読み直し、それを二つ折りにして封筒に入れた。そして、ブレスレットに対するお返しのもりで、小さな水色のリボンのついた髪留めを同封した。その髪留めはマドレーヌにとって宝物だ。なぜなら、エマ・ブルームの親友である祖母がマドレーヌにくれた品なのだ。色違いで黄色の髪留めと二つセットで、ねだっていた幼いマドレーヌに買ってくれたのだ。それを手放す気になった理由はただ一つ。会ったことすらないエマ・ブルームにほのかな親しみがわたったのだ――。

思いのほか話は着々と進んだ。そのことに一番驚いているのは、当の本人であるマドレーヌとベスだ。

ベスは一週間後、学校でこっそりと封筒を見せてきて、その中からマドレーヌ宛ての便箋と小さな袋を渡してくれた。興奮状態のマドレーヌは昼休みにこっそり手紙を読んだ。一分だって読むのを待てない。

「マドレーヌ・ウイントワースへ

お返事をどうもありがとうございます。

私はあなたのおばあさま、ミイナの親友でした。彼女も私も幼いころ、一緒に生活していました。今はこれしか言えません。ですが必ず、私は近々あなたにお会いできます。私が保証します。もう少し待ってください。冬季休暇まで待つてくだされば、あとはこちらで手配します。

私のeメールアドレスを書いておきます。そうすれば、もう面倒な手紙のやり取りをする必要はありませんね！エリザベスのお母さま

にやり取りしていると感づかれてはいけませんから！

そして、あなたは小さな袋に気付いたでしょう。これは私とミイナのお揃いのお守りです。ミイナはここを出ていく時、これを置いて出ていきました。今度はあなたが持っている番です。

エマ・ブルームより」

袋の中身は金色の小さな板のようなもので、もうすつかり色あせている。そこには「私たちの友情を誓って…」と彫ってあった。幼い頃、祖母がこんなことをしていたのだと思うと、笑いがこみ上げてきた。

マドレーヌはその日の帰り際、携帯電話にエマ・ブルームのアドレスを登録した。全く知らない相手だが、なぜだか信用できるのだ。ベスも同じようにした。二人は、自分たちだけの秘密にすることを誓い、それぞれの家へと向かっていった。

マドレーヌはエマ・ブルームとメールのやり取りをした。それも頻繁にだ。彼女に何度「事情を説明してくれませんか？」と送っても、帰ってくる答えはただひとつ、「冬季休暇まで待つてください」だった。マドレーヌは落ち込んだが、エマ・ブルームとのやり取りはとてもし楽しい。彼女は自分の住んでいるところの様子を説明してくれる。平和な美しい屋敷で、何人も住んでいるそう。そして、近々会えると繰り返し言うてくるのだ。

祖母のことをよく知っているエマ・ブルームは、毎日連絡してきて「私は仲間と共に、あなたたちが来れるように手配しています。もう少し待つてください」のような内容を送ってくる。マドレーヌは彼女の言葉を信じていた。早く十一月からの冬季休暇にならないかと、ただひたすら待っていた。

ベスもマドレーヌと同じで、エマ・ブルームとよく連絡を取っているようだ。二人とも、なぜ見ず知らずの人間を信用できるのか、言葉では簡単に説明できない。十三歳といえどもまだ幼さが残っているからかも知れない。あるいは心から優しくしてもらえて舞い上がってしまっただけかも知れない。だが、二人の意見は一致していた。エマ・ブルームの言葉は現実味を帯びていて、信用できる。

第2話 旅行

冬季休暇まであと一ヶ月となった日のことだ。この日は休日。マドレーヌの家へベスがやってきて、二週間後に迫る試験の勉強をしていた。マドレーヌがベスに苦手な数学を教えてもらっている時、ドアがノックされた。

「失礼」

母の顔が扉の隙間からのぞいている。

「お菓子を持ってきたわ。もう三時になるから、少し休憩したら？」と母が言った。部屋に入ってきて、手に持った小さなお盆（パイとクッキーがのっている）をそれぞれの前に置いてくれた。

「ありがとうございます」

マドレーヌは母から紅茶のカップを受け取り、ベスにも渡しながら言った。

「ありがとうございます！」とベス。母はにつこりした。

と、ベスがこの時とばかりに口を開いた。

「マドレーヌのお母さん。冬季休暇って予定ありますか？」

ベスはマドレーヌに小さくうなずいた。

「えーつと…今のところは特にないけれど、学校の宿題も多いみたいよ。それに、家族旅行が入るかも…」と母が言う。

「そうですね！」

「どうしたの？エリザベス？」

「実は…」

ベスはマドレーヌにまたうなずいた。マドレーヌもうなずき返す。

「私たち、もう仲良くなってから十年も経ったんです！早いですね！だから、冬季休暇に旅行に行ってみたいんです！そう、前から話します」とベスが言った。母は驚き、「どこに？」と聞いてきた。

「ケインホルム島」

マドレーヌとベスの声が重なる。二人は顔を見合わせ、心の中でお互いを褒める。

「ケインホルム島…何でそんなところに？まさか、エマ・ブルームとや

り取りしているのではないでしょうね!？」

母が壁に寄りかかった。相当怒っている様子だ。ベスが慌てて「そんなことはありません!実は、学校で仲のいい友達の子ジニーとルーナが：ケインホルムに遊びに行くって聞いたんです」と言った。とつさに思いついたでまかせだろうか?しかし、母は嬉しそうに笑い、「新しいお友達をつくるのはいいことね。エリザベスのお母さまと相談しておくわ」と言ってくれた。マドレーヌは内心驚いたが、「ありがとう、お母さん。よろしくね」と言った。ベスもにこにここと笑い、「ありがとうございます!」と言った。母は出ていった。

ベスが帰ったあと、マドレーヌは母に呼ばれ、下の階におりていった。母はココアのマグをマドレーヌに渡し、自分の隣に座るよう促した。マドレーヌは母の隣に腰を下ろす。ピリピリした緊張がふたりを包み込む。

「エマ・ブルームと連絡を取っているの?」

母が沈黙を破った。マドレーヌは予想していた質問通りだと思った。しかし、嘘をつく余計に面倒になる。五秒間頭を巡らせ、マドレーヌは口を開いた。

「うん」

勇気を出してまっすぐ母を見る。母の顔がかすかに蒼くなった。

「何をしているの?危ないでしょう!すぐにやめなさい!」

マドレーヌは少しうつむいた。言いたいことを母は分かってくれるだろうか?

「私、おばあさんの知り合いだって知って、会ってみたくなかっただけなの」

マドレーヌが言った。すると、母は予想外の動きをした。ハンカチを取り出して涙を拭いたのだ。

「そうね、あなたの気持ちもわかるわ。でも、危ないことだけはしないで。約束して」

「もちろん」

そう答えながらも、マドレーヌは罪悪感に苛まれていた。物わかりのよい母に嘘をつき、eメールのやり取りまでしているのだから…。

「エマ・ブルームとやり取りしているから、ケインホルムに行きたくなったのね？ クラスメイトの話は本当？」

マドレーヌはベスの顔を思い浮かべ、「うーん、わからない。でも、私がケインホルム島に行きたい理由は、エマ・ブルームとのやり取りなの」と答えた。母はうなずき、マドレーヌにビスケツトをくれた。甘く香ばしいビスケツトを口に入れ、マドレーヌは自分の人生が大きく変わっていると実感したのだった。

さらに大きなチャンスがめぐってきた。なんと、母の妹のアンナおばさんがケインホルムに移り住んだというのだ。アンナおばさんと電話で話した母は上機嫌で、「マドレーヌ、あなた、ウェールズのケインホルム島に行きたいと言っていたわね。冬季休暇にどう？」と言ってきた。マドレーヌは思い通りの展開に驚き、ぼーつとしながらも「いいの!? ベスも誘っちゃだめ？」と尋ねた。エマ・ブルームの言った通りになりそうだ！

「実は、お母さんとエリザベスのお母さまとで相談して、行くことになったのよ」

やった！ マドレーヌは体が熱くなり、興奮で顔を赤らめた。思わず飛び上がる。

「わー！ 楽しみー！」

母は微笑んで「ホテルは島に一つしかないんですって。そこを予約したわ！ あなたからエリザベスに教えてあげてね」と言い、いたずらっぽく笑って「おばあさんの秘密を探りに行きたいんでしょ？」とも言った。マドレーヌは笑って首を縦に振る。マドレーヌは信じられないような気持ちで自分の部屋に行き、携帯を取り出してベスに電話した。はきはきと電話に出たベスに伝えると、「私のお母さんも言ってた！ やったー！！！」と電話越しに叫んでいる。そして小さな声で「彼女に会えるね」と言った。彼女というのはエマ・ブルームのことだ。電話を切った後、マドレーヌはエマ・ブルームにeメールを送った。ケインホルム島に行けることになった流れを説明したのだ。すぐに返事が来た。「本当に嬉しいです。冬季休暇まであと一ヶ月。もう少し待ってください」だそうだ。

そして、冬季休暇前日。待ちに待ったケインホルム島への旅は、明日から二週間だ。マドレーヌは学校の終業式が終わるとすぐに帰宅し、荷造りを始めた。これまでにはないほど興奮する。荷造りはすぐに終わったので、マドレーヌは残りの時間をエマ・ブルームとのやり取りをして過ごしていた。

「十一月五日、午前十時きっかりに、ウエールズのケインホルム島にある、戦時中の古い孤児院を訪ねてください。そこで私たちが待っています」というメールを最後に、エマ・ブルームからの連絡は途絶えた。マドレーヌはベスのお家にお邪魔し、二人でベスの部屋に閉じこもった。彼女に聞くと、ベスにも同じ内容が送られてきたそうだ。ベスは探検隊のリーダーぶって「いよいよ怪しくなってきた！この時刻に指定された場所に行けばいいんだね！」と言った。マドレーヌはうなずく。謎の解決まであと少しだ！

二人はどきどきしながら、しばらく考え事に没頭していた。が、マドレーヌが沈黙を破った。

「海に行きたい」

そう言って立ち上がる。

「いよいよ」

ベスがニヤツと笑い、マドレーヌの肩をポンとたたいた。

「私、マドレーヌのことならよく知ってるからね！」

「長年の付き合いだものね」

二人はお互いの心情を無言で汲み取った。そして、「行こうか」とどちらともなく言い、ベスの母に「ちよつと散歩してきます」と伝えてから、外に出た。

十分ほど歩くと、新鮮な潮風が舞い込んできた。マドレーヌは寒空の下で靴と靴下を脱いだ。靴の中に入れておいたサンダルに履き替える。

「さすがマドレーヌ、冴えてるね！私もだよ！」

ベスが声を上げて笑いながらトートバックの中に手を突っ込み、ビーチサンダルを引っ張り出して下に落とした。

「うわあーっ、砂だらけ！」

砂がモワモワとサンダルを覆ったので、ベスは肩をすくめて砂をきれいにはらった。

「行くこう」

マドレーヌはそうベスに言い、ゆっくりとした足取りで砂浜を踏みしめた。鼻から息を吸い込み、そつとかがみこんで波に触れる。氷のように冷たいと思っていたが、予想外の温かい水滴が指に触れた。鼓動が落ち着き、静かで心地よい波の音だけが聞こえる。

鳥が頭をもたげるように、波が持ち上がった。マドレーヌも立ち上がり、手を伸ばして腕を広げる。波は少し近づいてきて、両手に温かい水がかかる。一定のスピードで波打つ海に触れていると、心が洗われて素直な自分になれる。マドレーヌは心を静めたい時、いつもここに来るのだ。いつだって海は自分を受け入れてくれる。ベスはその考えを肯定し、心の内を理解してくれる無二の親友だ。大好きな海は友達のように迎えてくれる。

いつの間にか、ベスが隣に来ていた。二人は波に触れ、沈んでゆく夕日を見つめていた。

その夜、マドレーヌはなかなか眠れなかった。緊張と興奮で目が冴え、暗闇に目を凝らして起きていた。明日からの旅行では一体何が起こるのだろうと考え、胸の高鳴りを抑えられない夜だった。ようやくとうとうと始めたのは、午前一時過ぎ！五時間後にはアラームの音で目を覚まし、眠い目を擦りながら起き上がった。それと同時に、素晴らしいことが起こる予感がして、マドレーヌは胸を抑えた。いよいよ今日から旅行だ!!

朝食を急いで飲み込むと、ベスと彼女のお母さんがやってきて、玄関のベルを鳴らした。二人とも大きなカバンを持っている。ベスの顔は期待で輝き、一睡もしていないように見える。

「おはようーマドレーヌ〜!!」とベスが駆け寄ってきた。そして、耳元で「いよいよだね」とささやいた。マドレーヌは満面の笑みで「そうね」と答えた。

期待に満ちた旅の最初はつまらなかった。船での長旅はだんだん飽きてきてしまい、気がつくとも眠っていた。だが、ケインホルム島到

着のアナウンスが流れると、マドレーヌはバスと手を握り合つて興奮した。霧でよく見えないが、大きな島がそびえ立っている。崖のようにでこぼこした威厳のある島。ここに祖母の秘密が隠されているのかと思ひ、エマ・ブルームにも会えると思ふとわくわくする。いよいよだ。待つて待つて待ち続けたこの日が、やってきたのだ!!マドレーヌは幸福感でいっぱいだった。謎を解くきっかけになることは間違いないだろう!

船が港に到着した。マドレーヌは母、バス、バスのお母さんと連れ立つて、村に一つしかないホテルに向かった。そこは期待外れの汚いホテルで、どこもかしこもぼろぼろだ。しかし、そんな宿泊所も、マドレーヌの期待を失わせはしなかった。明日は十一月五日だ。明日になればきつと全て理解できるだろう。半日をホテルの部屋でぼーつとして過ごし、かび臭い肉と小さなトーストだけの夕食を食べたあと、部屋に戻つてきてベッドに横たわつたマドレーヌはそう考へていた。時差ぼけと長旅の疲れで、すぐに眠りに落ちた。

第3話 誘（いざな）い

その晩、マドレーヌは奇妙な物音で目を覚ました。コツコツと床をたたくような音だ。不気味に思い、起き上がってみると、ドレッツサーの台に大きなコートがかかっていた。やけに分厚いコートだ。しかも、動いている。腕を通す部分がはためいている！マドレーヌはスリッパをつっかけてそつと立ち上がり、もつとよく見ようと近づいた。恐る恐るドレッツサーの台の前で立ち止まると、その物体——大きな鳥——と目が合った。マドレーヌは思わず叫びそうになったが、なんとか堪え、口を覆ってよろよろと後ずさった。

鳥は鋭い目をマドレーヌに向け、注意深く見つめている。マドレーヌも見つめ返した。すると、鳥が静かにはばたき、飛んでいきそうになった。マドレーヌは思わず小さな声で「行かないで！」と頼んだ。相手は生き物なのだが、とっさに口に出したのだ。そのとき、鳥はありえないことをした。まるで言葉が通じたかのように、マドレーヌのところまで戻ってくる、羽に挟んでいた薄い紙を床に落としたのだ。そして、鳥の右側の羽がベスのベッドのほうに動いた。「えっ？？」

マドレーヌは驚き、そう聞いた。すると鳥はマドレーヌのベッドの隣にある机に止まり、もう一度同じ動作をした。間違いなくベスのベッドを指している。

「ベスを起こせばいいですか？」

マドレーヌは声をひそめて聞いた。鳥は嘴をカチカチと小さく鳴らした。マドレーヌはそれを「その通り」という意味だと捉え、眠っているベスに近づいてかがみ込み、「ベス、起きて」と呼びかけた。肩を二、三回たたくと、ベスは目覚め、不機嫌に「なに？」と言った。マドレーヌは素直なベスがびっくりして大声を出す可能性があると思いい、「いい？ベス、あなたの左側を見て。そこを見て驚くでしょうけれど、絶対に騒がないでね？隣の部屋で寝ているお母さん達が驚いちゃうから」と釘を刺した。ベスは神妙な顔つきで「うん」とささやき、そつと左側を見た。そして、声を抑えつつ「えーっ!？」と驚きを表現

した。

「ペレグリンだ！私、初めて見た！」とベス。

「なに？」とマドレーヌは聞き返した。

「ペレグリン・ファルコン：ハヤブサだよ！なぜこんなところにハヤブサが!？」

驚くベスを残し、マドレーヌはドレッサーの台の下に落ちた紙を拾いに行った。ほのかな明かりの下にかざして読む。

「今すぐ、前に指定した場所に来ること。親が心配すると考える必要はない」

エマ・ブルームの筆跡に違いない。マドレーヌはぞくつとして、ベスと二人で身を寄せ合った。ベスもその内容を読む。

「これを届けてくださってありがとうございます。今すぐ支度して向かいます」

ベスがハヤブサに言った。ハヤブサはマドレーヌが静かに開いた窓から飛び立ち、完全な闇に紛れてしまった。

「大変なことになった。彼女は、こんなことを言ってるけど、絶対、お母さん達は心配するよね」とベスが言う。

マドレーヌも彼女に同感だ。母たちが起きて、マドレーヌたちがいないと分かったら、警察沙汰になってしまう。それだけは避けたい。

「ハヤブサに『今すぐ支度して向かいます』って言っちゃったから、行かなきゃだめだね」

ベスは自分の言った言葉を悔やんでいる。マドレーヌは「ベスが伝えちゃった相手はハヤブサで、人間じゃないでしょ？言葉が通じるなんて…」と言いかけたが、言葉を呑み込んで考えた。

「あつ、でも、言葉が通じたかのような動きをしていた…」

マドレーヌは言い直す。

「ね、マドレーヌ、あのハヤブサの持ってきた紙に書いてあった内容に従えば、もしかしたら謎を解くきっかけになるかもしれないよ！『心配すると考える必要はない』って書いてあるしね！」

ベスが言った。マドレーヌは考えた。あの謎に包まれたハヤブサの謎を解きたい。

「夜に二人だけって、危くない？」

マドレーヌはそう言った。まだ来たばかりのケインホルムで、何かあったら怖い。

二人は顔を見合わせて押し黙る。しばらくして沈黙を破ったベスは「じゃあ、明日の朝十時に行ってみようか。もうすぐ夜が明けちゃう！眠い！」とあくびをした。マドレーヌはうなずき、それぞれのベッドに戻ろうとする。

そのとき、聞き違いようのないはばたきが聞こえたかと思うと、ハヤブサがマドレーヌの肩に止まった。その重みによろける。

「ど、どこから入ってきたんですか？」

マドレーヌは驚き、つかえながら聞いた。ハヤブサはマドレーヌを羽でつつき、もう片方の羽をドアに向けた。

「ドアから？」とベス。ハヤブサはまたドアのほうを見た。

「あつーごめんなさい！今すぐ行きます、今すぐ！」とベスが焦った。だが、ハヤブサは羽を上下させて「違う」というような動作を見せ、何度もその動作を繰り返す。マドレーヌはぴんときた。

「あなたが古い戦時中の孤児院の近くに連れて行ってくれるんですか？」

マドレーヌの言葉に、尊大な目つきのハヤブサは羽をバタバタやり、急かすようにつついてきた。

「分かりました」

マドレーヌとベスが答える。そして、すぐに支度し始めた。

パジャマの上に厚手のコートを重ね着し、マフラーを首に巻き付ける。安全のため、ポケットに携帯電話を入れておく。靴を履き替え、準備完了だ。

「連れて行ってくれますか？」

マドレーヌが頼むと、ハヤブサは正面の扉ではなく、ドレッサーの台に回った。そして、鋭い嘴を器用に扱い、隠し扉を開いた！外側からは分からないよう、周囲になじませて作ってあるようだ。

「うわー！」とベス。ハヤブサは二人の背中をつついてしやがませ、先導して入っていった。マドレーヌはベスの顔を見た。ベスの顔には

きらきらとした興奮がはつきり出ている。一人ずつ、小さな隠し扉の中に入った。ふたりが中に入ったのを確認し、ハヤブサが扉を閉めた。

中は暗いトンネルのようだ。そこをきつい態勢で通り抜けると、青空があらわれた！

最初は夢だと思った。ついさっきまで夜の暗闇に閉ざされていた世界が、一変して朝を迎えるなんて！

「なんで朝!？」と叫んだベスはハヤブサを見たが、鳥は「そんなことは後で」とでも言いたげに嘴を鳴らし、ゆつくりと飛んでいく。二人は顔を見合わせてついていった。

美しい青空の下で、大勢の人々が活動している。先ほどまでは確かに凍えてしまう寒さだったのに、真夏の蒸し暑さが空をけだるげに覆っている。二人は顔を見合わせ、ひとまずマフラーで汗をぬぐった。

二人とハヤブサは、なるべく目立たないような道を通った。ハヤブサが先導して裏道を教えてくれるのだ。

街を抜けると、急な坂道が立ちはだかった。ハヤブサは空を飛ぶのであつという間だが、二人はこの泥だらけの急斜面をどう切り抜けようかと考えなくてはならない。

「もういいー！気にしないで行くー！」

ベスはそう叫ぶと、走って道を駆け上がった。マドレーヌも笑いながらそのようにした。たちまちスニーカーが泥まみれになり、体が沈んでいく。先に上についたベスが引き上げてくれた。二人とも息を切らしている。

「ハア、ハア、ハア…じゃあ、行こうか」

ベスがそう言うと、ハヤブサはまた先へ進んだ。

と、目の前に大きな建物があらわれた。崩れ落ちた廃墟は怪物のようで、蔓が不気味に巻きついていて、せいで屋根が傾いている。

「ねえ、ハヤブサさん、古い孤児院ってどこですか？案内してくれますか？」

ベスが言うとハヤブサは舞い上がり、建物の割れ目のある柱にと

まった。嘴をカチカチと鳴らす。

「もしかして、ここ!?」

マドレーヌが尋ねる。

ハヤブサは甲高く鳴き、たちまち翼を広げて飛び去ってしまった。

「入る?」とベス。

「入る気がしない…」

「そうだよね…」

二人は目を合わせてうつむく。化け物屋敷のようなこの建物に入るなんてまっぴらだ。

「でも、入ってみようよ!せっかくハヤブサが連れてきてくれたんだもん」

ベスは好奇心旺盛なのだ。

「え!」

マドレーヌは正直言ってみたくない。それに、この不思議な世界から出たくてたまらない。

「ほら、行ってみようよ!謎を解こう!」

ベスはマドレーヌの手を取り、引っ張るようにしてつれていく。マドレーヌは抵抗する気力が失せ、そのままついていった。

ドアが見当たらないので、窓の割れ目から入った。薄暗く、どこから化け物が出てくるかわからないほどだ。二人はぴつたりとお互いに寄り添って歩いた。

「あっ」

ベスが先を指さした。マドレーヌが目をやると、ちらつと明るい光が見えた。ゆらめいている。

「誰がいる…」

ベスが走り出すと、光が動いた。いや、光ではない。火だ。その火のおかげで、マドレーヌたちは隠れていたらしい女の子を見ることができた。

第4話 屋敷とピキユーリア

シンプルな白いワンピース姿の少女は、素手で火の玉を抱えている。彼女は近づいてきた。一步一步、こちらに向かってくる。距離が縮まるにつれて、少女の顔がはつきりと見えた。

かわいい顔立ちだが、不安と怒りの入り交じったような表情を見せている。少女は火の玉を器用に操り、引き伸ばすように手を動かす。炎の縄になった。そして、マドレーヌに近づくと、両手をマドレーヌの腰まわりに回した。なんと、マドレーヌは炎の縄に囲まれてしまったのだ！

女の子は何度もマドレーヌのまわりを回り、手をかざして丸い炎の壁を作った。マドレーヌは包囲され、その場から動けなくなる。金縛りにあったように足がすくみ、恐怖がじわじわとマドレーヌを蝕む。「炎に溶かされたくなければ、その場から動かないで」

女の子が低い声で言った。同じように包囲されたベスの顔も恐怖で青ざめている。

やがて、女の子は二人が完全に動けないことを確認し、身を翻して行ってしまった。

少しして戻ってきた少女は、何人ものこどもたちを従えて歩いてきた。少女たちと少年たちは普通の子たちに見える。その中の一人の少年が前に進み出て、「エマ、彼女たちを自由にしてあげたら？」と炎を出す女の子に言ってくれた。エマと呼ばれた炎を出す少女はしかめっ面で「はいはい。でも彼女たちが逃走したら、ジェイコブ、あなたも責任を負うのよ」と言いつつも、二人を自由にしてくれた。エマという名前がわずかにひっかかるが…。

「ありがとう」

マドレーヌが男の子に言うと、その少年が「僕はジェイコブ・ポトマン。彼女はエマ・ブルーム」と教えた。

「あなたが…!?!」

マドレーヌとベスが叫ぶ。少女はつまらなそうに炎を両手で転がしていたが、「そうよ。私がエマ・ブルーム」と言った。

「私たちに手紙をくれたのもあなたですよね？」

ベスが言う。

「ええ」とエマ。

「あなたは私の祖母と親しかったんですか？あのブレスレットは本物ですか？それに…」

マドレーヌはつつかえた。言いたいことがたくさんありすぎるのだ。

「『鳥』に会わせてからじやなきやダメ」

エマは意味深に言った。

「エマは怒りっぱいんだ。僕が彼女に初めてあった時、彼女に殺されかけたしね」とおどけるジエイコブ。

「ちよつと、やめてよ、ジエイコブ。あの時のことは忘れて！」

エマは恥ずかしそうに言った。そして一変し、「ほら、行くわよ。オリーヴ、この子の手をつかんでおいて。フィオナ、あなたはこの子の手をつかんで」とそれぞれに言った。マドレーヌの手を小さな少女が取り、おとなしそうなお下げ髪の子がベスの手を取る。奇妙な集団とともに、マドレーヌとベスは歩き出した。

一行はエマの厳しい監視のもと、青空の下に飛び出した。マドレーヌの手を取っている少女はすぐに手を離し、「あたし、オリーヴ。あなたは？」と聞いてきた。かわいらしい小さな女の子だ。短い赤毛をもつ、小柄で人懐こい雰囲気少女。

「マドレーヌ・ウェントワース」

マドレーヌはオリーヴを見た。オリーヴはにっこり笑い、「あたしは空中浮揚できるの」と言った。マドレーヌは聞き間違いだと思い、「空中浮揚って聞こえた気がしたけれど、気のせい？」と言った。するとオリーヴはくすくす笑い、「もう、マドレーヌったら！聞き間違いなわけない！」と言った。

「あなたたちは普通の人じゃないの？」

マドレーヌは夢を見ているような不思議な気持ちになった。

「もちろん、普通じゃないよ。ピキューリアだもの！マドレーヌもそうでしょ？」とオリーヴ。ピキューリアというのは何だろう？

「うーん、私は普通の人間だと思う…多分。それよりも、あなたの能力を見せてもらえない？」

マドレーヌはうずうずしていた。

オリーヴはまた笑って「『鳥』に会ってから！」と言った。そのとき、エマがまたやってきて「オリーヴったら何してるのよ！もういいわ、ミラードのところにも行って。私がこの子を見張るから」と言った。オリーヴは「えーっ、分かったよ」とつまらなそうに石を蹴り、前に行ってしまった。

「あなたが私の祖母の親友だったというのは、本当？」

マドレーヌは聞いたが、エマはいらついたように舌打ちすると「後でって言ったでしょ。自分勝手な人」とぶつぶつ言った。マドレーヌは機嫌を損ねてはいけないと思い、「ごめんなさい」とすぐに謝った。エマは答えずにマドレーヌの手をつかみ、「ほら、ぐずぐずしてないで」と引つ張った。マドレーヌはおとなしくついていく。この情緒不安定な怒りっぽい女の子がエマ・ブルームだなんて信じられない。だが、もうどんなことでも受け入れてやるという気持ちで、気付くと前にあつた大きく立派な屋敷を見た。

「さつき君がたどり着いた孤児院だ」

いつの間にか隣にはジェイコブがいて、そう説明してくれた。マドレーヌはこの優しそうな少年なら説明してくれそうな気がして、「あの、後でいいけれど、事情を説明してくれませんか？」と聞いてみた。ジェイコブは笑いながら「うん」と言ってくれた。

ジェイコブに導かれ、マドレーヌは屋敷の扉の前に来た。お下げ髪の少女がドアを開けてくれ、マドレーヌ、お下げ髪の少女、ベス、ジェイコブが最初に中に入る。後ろからは怖い顔をしたエマが来た。後ろから、ぞろぞろとこどもたちも入ってくる。

「靴についた泥を落として」

エマに言われ、マドレーヌとベスは泥をきれいに払い落とした。エマはマドレーヌとベスを残し、こどもたちを連れて行ってしまった。「『鳥』に伝えてくるから、おとなしくして」と言い残して…。

ベスはこどもたちの姿が廊下から消えるのを見計らって「何が起

こっているのか、説明してくれない？」と言った。マドレーヌは首を横に振り「私も分からないわ」と言った。そのとき、空中で声がした。「透明人間にご用心」

おもしろがっているようだ。二人は飛び上がった。

「だれ？」とマドレーヌ。

「俺はミラード・ナリングズ。いわゆる透明人間だ。この特殊極まりない能力を利用して、様々な悪事を働いている」

ミラードが言った。

「よろしく」

二人は挨拶した。手から炎を出す女の子に、空中浮揚少女に、透明人間。ほかにはどんな能力を持つこどもたちがいるのだろうか？

「夢を見ているみたい」

ベスが言った。と、足音がして、エマが戻ってきたことを告げた。彼女は怒ったような顔で「ほら、来て。『鳥』があなたたちに会って」と言い、「ミラード、あなたは私と一緒に来て」と空中をつかむ動作をして、ミラードの肘（だいたいそのあたりだろう）をつかんで連行していった。

「私たちは…一体どうすれば？」と、二人は顔を見合わせる。すると、もうすっかり慣れてしまった甲高い鳴き声がして、マドレーヌの肩にずつしりと重みがきた。ハヤブサだ。

「こんなところにまで来たの!」

ベスが声を上げる。マドレーヌも肩に乗っているハヤブサを見、信じられないような気持ちになっている。

すると、向こう側から小さな少女が駆けてきた。金髪の巻き毛をもつお人形のような少女だ。

「ミス・ペレグリン、私の腕に止まって」

その女の子は腕をつき出し、そこにハヤブサを止まらせた。ハヤブサは威厳を示すように鳴き始める。女の子とハヤブサは物陰に隠れてしまい、見えなくなった。ベスは不可解な表情でマドレーヌを見、マドレーヌも見返す。

少しして戻ってきた少女は、もうハヤブサを連れていなかった。代

わりに背の高い女性が一緒にいる。女性は手袋をはめた右手を差し出し、マドレーヌに握手を求めた。

「アルマ・ペレグリン院長です。初めまして、ミス・ウエントワース」
マドレーヌは女性の手を取った。アルマ・ペレグリン院長は黒いカラスのようなコートを身にまとい、羽のようなシヨールを巻き付けている。深い青緑で統一された衣装は、まるで夜空を飛ぶ鳥のようだ。彫りの深い顔立ちをしている。

「お目にかかれて光栄です。マドレーヌ・ウエントワースです」

マドレーヌはそう言つて軽く腰を曲げた。

「初めまして、ミス・トツカ」

院長はベスの手を取った。ベスは興奮を隠しきれない様子で、院長をじろじろと見回している。無理もない。

「さて、あなたがたは今、私の保護を受けているわけではありませんので…ミス・ペレグリンと呼んで頂けますか？」

院長—ミス・ペレグリンがそう言った。

「分かりました、ミス・ペレグリン」と二人はすぐに答える。

「あなたはハヤブサなんですか？」

ベスの唐突な質問に、ミス・ペレグリンはたじろぐことなく微笑みをたたえ「その通り」と答えた。

「お二人とも、こちらへ」

ミス・ペレグリンが手招きし、二人は空っぽの食堂に足を踏み入れた。金色の豪華な丸テーブルをふかふかの椅子が囲んでいる。どこもかしこも美しい目を奪われる屋敷だ。

隅にあつたイスに座ると、二人の前にミス・ペレグリンが大きな肘掛け椅子を引つ張つてき、そこに腰を下ろした。

「あなたがたからも質問があるとは思いますが、最初に私の話を聞いてくださいね。私はインブリンといって、特殊能力を持ちます。インブリンというのは鳥に変身する人間を指します。そして、インブリンはループを作り、そこに奇妙な能力を持つ人々——ピキューリアを住まわせ、かくまい、保護します」

ミス・ペレグリンは静かにこう語つた。

「インブリンは鳥に変身する能力を持ち、時間を操る能力も持つのです。私の作ったループでは、ある一日を永遠に繰り返して生活します。こどもたちは外見上は歳をとることはありません。ここにいれば安全ですし、悪人たちは一歩も近寄れません。ここは楽園なのです」

するとベスが「どの日を繰り返しているんですか？」と質問した。ミス・ペレグリンは笑って「ミス・トツカ、質問は後でにしてくださいと言ったでしょう！まあ、あなたが気にするのも分からなくはありません。1940年、9月3日を繰り返しています」と答えた。

「なぜ、その日を繰り返しているんですか？」

「ミス・トツカ、その日は何の日だと思いますか？ここ、孤児院に爆弾が落とされ、崩壊した日です。その日を永遠に繰り返し、私達は生きています。死ぬ直前に防ぎ、時間を戻し、また朝になるのです」

ベスの問いに答えたミス・ペレグリンは大真面目だ。マドレーヌは自分が蒼ざめていくのが分かった。そうか、そうなのか。ループに入る前のここは、崩壊した化け物のような建物だった。それは、表向きは爆弾で壊されたからだ！戦争中、敵の手が狂い、誤ってこの孤児院に爆弾が落ちてしまったからだ！恐ろしい秘密が一つ明らかになった。

「ミス・ウエントワース、心配はいりません。私達は生きていますから」

ミス・ペレグリンが言った。マドレーヌは震えながらうなずいた。「これだけは覚えておいてください。あなたがたがこのループに入れたことは、決して偶然ではありません。あなたがたは特殊な能力を持つのです。ここでの生活を楽しみつつ、自分の能力を見つけなさい」

ミス・ペレグリンは笑いかけ、鋭い目を細めた。

「あの、ミス・ペレグリン？」

マドレーヌはもう我慢できず、質問をしようと試みた。

「私たちは——私とベスは、特殊な能力を持つんですか？」

「ええ」と、彼女は大真面目に言った。

「そうでなければ、ループには入れませんかから」

ミス・ペレグリンが答え終わると同時に、ベスがマドレーヌも聞き
たかったことを質問した。

「私たち、お母さん達のいるホテルに戻らなくちゃ！だって、心配しま
すよね？」

ミス・ペレグリンは笑いを隠せない様子で「大丈夫です。お母さま
たちには、私からの手紙を届けておきました。ミス・ウエントワース
は祖母の謎を見つけ、おばあさまの親友も見つけたという内容です。
お母さまは私のことをよくご存知ですから、きっと承知してくださる
ことでしょう」と答えた。

「えっ？お母さん、ミス・ペレグリンのことを知っているんですか？」
ベスが素っ頓狂な声で言った。

「あなたのお母さまは、残念ながら知りません。しかし、ミス・ウエン
トワース、あなたのお母さまはよくご存知ですよ。あなたのおばあさ
まが亡くなってから、何度かお会いしました。きっと今回のことに
も、私が絡んでいると知っていたはず」

ミス・ペレグリンが説明した。そして手を打ち鳴らし「さあ、遊ん
でいらっしやい！ただし、自分の能力探しを忘れずにね」と言った。
二人は顔を見合わせて笑い合い、部屋から飛び出した。

部屋の外には、驚いたことにエマが立っていた。

「来て。話があるの」

エマはマドレーヌの腕を引っ張りながら、ベスに「悪いんだけど、先
に中庭に出ていてくれる？ 私たちもすぐ行くから、遊んでいていい
よ」と言った。申し訳なく感じたマドレーヌが「ベス、ごめんね…す
ぐ行くね」と謝った。まだ未知の世界で、よく知っているのはお互い
だけ。そんな中で知り合って間もない子どもたちと遊んでいて、と自
分が言われたら、さぞかし不安に思うだろう。マドレーヌは他人の気
持ちを考えて行動できるという長所を持っているので、そう思ったの
だ。

マドレーヌの謝罪を聞き、ベスは驚いたように目を見張ると「うう
ん！マドレーヌ、謝るなんて！私、先に遊んでるね！」と明るく言っ
た。

「ごめんね」と気まずそうなエマ。彼女に笑顔を向けてから、ベスは三つ編み少女、フィオナと連れ立って庭に出た。マドレーヌはエマに連れられていかれ、ある部屋の前で立ち止まった。

「私の部屋よ。来て」

エマがドアを開けてくれ、マドレーヌは彼女の部屋にお邪魔するこ
とにした。シンプルな部屋で、きちんと整頓されている。ベッドの隣
にあるデスクの上にはステンドグラスのランプが置かれ、壁には二人
の少女が花畑の真ん中で手を取り合い、にこやかに楽しんでいる様子
の絵画がかかっている。

「座って」

エマはベッドの隣にある椅子をすすめた。マドレーヌが座ると、彼
女はベッドにちよこんと腰掛け、話し出した。

第5話 ミイナの過去

「私はミイナの親友。彼女も特殊能力を持っていて、戦争中にここに来たの。ミイナは快活で陽気な少女だった。私は同じ年の少女、ミイナと打ち解けて、すぐに仲良くなった」

「おばあさんと…同じ年？」

マドレーヌは目の前にいるかわいい女の子を見つめた。

「ええ、そうよ。私は八十七歳」

エマがこともなげに言つてのけた。マドレーヌは驚き、のけぞつた。

「でも、あなたはまだ少女に見えるわ！」

「そうでしょうね。ここ、時間のループにいる限り、私は老けない」

エマが淡々と言う。

「ミイナは外の世界に出ていってしまい、少しずつ老けていった。そして…」

エマの瞳が涙で潤んだ。マドレーヌはエマの肩をぽんぽんと優しくたたたく。

「あなたはミイナに生き写しよ。ミイナは美しく優しさに溢れ、親切な人だった。その孫にあたるあなたも特殊な能力を持つに違いないの」

エマは話を終えて立ち上がったが、ふと思ひ出したように付け加えた。

「初対面でひどい態度を取ってごめんなさい」

二人はエマの部屋から出た。下の階に降りて庭に向かうと、ベスが飛び跳ねてやってきて、「ねえ、マドレーヌ、すごいよ！来て来て!!」と急かした。庭に出ると、フィオナが芝生を見て立っている。

「やってみせてくれる？フィオナ」

ベスが頼むと、フィオナはうなずき、手を芝生の上にかざしてしゃがみこんだ。

信じられないことが起きた。フィオナが空気を引っ搔くような動作をすると、草がものすごいスピードで伸びてきたのだ！

「あらゆる植物を成長させる能力を持つ」

フィオナが言った。

「すごいわね！」

マドレーヌは感心して言った。が、フィオナは首を振り、「こんなの当たり前」と言ったので、マドレーヌはびっくりしてしまった。

こどもたちがこちらに駆け寄ってきた。マドレーヌの腕につかまったオリーヴは「ねえ、マドレーヌ、遊ぼう！」とせがんだ。エマは精一杯、「オリーヴ、あんまり走り回っちゃダメよ」とは言ったが、楽しそうに一緒に歩いてきた。

「能力を見せてくれる？」

マドレーヌが頼むと、オリーヴは一人の男の子に「ロープをお願い」と言った。その男の子はうなずき、オリーヴに手渡されたロープを彼女の腰に巻き付け、ロープの先をしっかりと握った。

「よく見てて」

エマがマドレーヌをつついた。オリーヴは銀色の重たそうな靴を脱いだ。すると、オリーヴは風船のようにふわふわ浮いて漂った！

「ロープをつけていないと、果てしなく浮かんでいっちゃうの。私は空気より軽いんだもの！」

オリーヴがマドレーヌたちを見下ろした。

「だから、普段は鉛の靴を履いてるの。さあ、ヒュー、降ろして」

ヒューと呼ばれたロープを持っている男の子は、ロープを引いてオリーヴを降ろした。

「レディース・アンド・ジェントルメン！」

いつの間にか隣に来ていたミラードが、誇らしげに宣言する。

「さあ、世紀」のショーが始まります！皆さん、お見逃しなく！ミス・トツカ、ミス・ウエントワース、どうぞこちらへ！」

ミラードがもったいぶり、透明の手がマドレーヌの片手を取るのを感じた。なんだか不気味だが、ミラードが存在している証拠だ。ミラードは黒革の高級そうなジャケットを身にまとい（他には何も着ていない）、マドレーヌとベスを観客席（芝生より小高い場所だ）に連れていく。フィオナが切り株を成長させて作った椅子だ、とミラードが

説明する。ミラードはドタドタと奇妙なこどもたちの所に戻っていき、代わりにジェイコブが来てくれた。

「あなたはショーに参加しないの？」

マドレーヌは気になってそう聞く。

「僕の能力はショーでは使えないんだ」

ジェイコブは少し悲しげに、でも誇らしそうに説明した。

「どんな能力？」

ベスが尋ねると、ジェイコブは「僕にはホロウガストが見えるんだ」と教えた。

「ホロウガストって？」

マドレーヌが聞いたが、ジェイコブは「また今度説明するよ」と言っていて、ショーが始まると身振りで示した。

まずは司会者のミラードから。ミラードは服を脱いできて、きれいなりボンを持って駆け回り、リボンが宙に浮いているように見せて喝采を浴びた。続いて出てきたのは小柄な少女で、興味がなさそうに無表情。「ブロンウインだ」とジェイコブ。ブロンウインは大きな岩を持ち上げてぐるぐると回し、放り投げてまた取った。小柄な外見からは想像できないほどの怪力の持ち主だ。ブロンウインは重いものをたくさん担ぎ、軽々と放り投げる芸を見せた。

次に出てきたエマは自分で作った炎の渦に飛び込み、無傷で出てきた。水泳選手のような。マドレーヌは夢中で拍手した。

先ほどオリヴのロープを持っていたヒューという男の子は、なんと口からハチを出した。マドレーヌは目を疑った。ジェイコブが「ヒューは体の中に無数のハチを飼っているんだ」と教えてくれる。フィオナは美しい花を咲かせてあつという間にブーケをつくり、マドレーヌとベスにプレゼントしてくれた。イーノックという最年長の少年は、クレアのクマの人形に命を吹き込み、しゃべらせたり動かしたりした。ただし、クレアは大好きな自分のお人形が低い声でボソボソとしゃべり出したのを見て「イーノック、やめて！ 気持ち悪いわー」と怒ってしまった。

奇妙なこどもたちの芸が一通り終わり、マドレーヌとベスはこども

たちと遊び始めた。まずはオリーヴと手をつないで空中散歩を楽しんだ。オリーヴは「わーい！」と声を上げながら、みんなを空中に連れていってくれる。最初は怖かったが、何度も繰り返すうちにやみつきになった。次はフィオナが成長させた太い蔓に登って遊んだ。「ジャックと豆の木」ならぬ「フィオナとモモの木」だ。したことを全てが魅力的で、二人にとっては夢のような時間だった。ベスとマドレーヌは笑い、しゃべり、こどもたちと仲を深めた。ベスはフィオナと仲良くなり、内気でおとなしいフィオナは明るく優しいベスに心を開いたように、二人で植物の冠を作ったり、動物たちとたわむれたりして楽しんでいた。エマは二人を見て微笑み、オリーヴに何かささやいた。オリーヴはうなずき、エマにロープを結んで繰り出してもらってから、近くにある木のそばに浮かんでいく。木の穴にはたくさんノリスや小鳥たちが住んでいたのだ。オリーヴは優しく手に乗せて降りてき、フィオナに引き渡した。

「ありがとう、オリーヴ！わたし、植物や動物がとても好き。落ち着くから」とフィオナ。エマとマドレーヌとオリーヴは顔を見合わせて笑い合った。

日が陰つてくると、二人はこどもたちと共に食堂に向かった。ミス・ペレグリンは編み物をしながらパイプをふかしていて、マドレーヌたちに気づくと「ミス・トツカ、ミス・ウエントワース。夕食を一緒にしましょう」と誘った。二人は大喜びで席につく。ローストビーフ、鮭のムニエル、七面鳥の丸焼き、熱々のステーキ、何種類ものサラダやスープなど、豪華な食事ばかりだ。目を奪われながらもたらふく食べ、満足するまでおしゃべりした。エマはひっきりなしに話しかけてきて、マドレーヌの祖母のミイナがどれほど素敵な人だったかを熱を込めてまくし立てた。それからエマは、クレアを見た。かわいい彼女はチキンをつかみ、恥じらっているようだ。

「ほら、食べるよ」

ヒューが口笛を吹く。

「もう、やめてあげてよ」

エマがヒューをたしなめた。クレアは顔を赤らめてチキンを後頭

部に近づけ、体をのけぞらせた。マドレーヌは思わず叫んだ。はつきりと肉を噛む音が聞こえてきて気づいたのだが、金髪の巻き毛に覆われたクレアの後頭部には、鋭い歯の並ぶ口が隠れていたのだ！気味が悪いこと極まりない。

「クレアには後ろの口があるんだ」

ミラードが言い、デザートのプディングをクレアの目の前に置くと、彼女はその皿をイーノックに渡して目を閉じてしまった。クレアはずっと発言していない。金髪巻き毛の少女に申し訳なく思ったのか、こどもたちはまた、ガヤガヤとおしゃべりに戻る。

「また明日も来る？」

オリーヴが腰を浮かせて聞いてきた。

「うーん、まだ分からない」

マドレーヌがそう答えると、こどもたちが「えーっ！」と口々に言った。中にはため息をつく子までいる。

「今日起きたことも理解できていないから、明日どうなるかなんて考えられないよ！」とベス。すると、ミス・ペレグリンが厳格にうなずき、「来られる時はいつでもいらしてください。能力探しをしなくてはならないでしょう？」と言った。その途端、三十分間黙っていたクレアが顔を輝かせて、「ベスとマドレーヌもピキュリアなの？」と言った。

「そうに決まってるって、分かってたわ。ミイナが特別なピキュリアだったんですもの。ね、マドレーヌ」

エマが自分のことのように誇らしげに言う。

「うーん、そうなの？」

マドレーヌが曖昧な返事をする、エマは「はあ!? そうもこうもないでしょ!」と怒り出した。ジェイコブがエマをなだめる。

「ごめん。彼女、こういう人なんだ。怒りっぽくて…」とジェイコブは呆れている。

「大丈夫、分かっているからー」

ベスがおどけると、エマは「なによ!」とむきになった。奇妙なこどもたちとミス・ペレグリン、マドレーヌとベスは笑い転げる。

「私の祖母は、どんな能力を持っていたの？」

マドレーヌが聞くと、こどもたちがシーンと黙ってしまった。エマはうつむき、オリーヴとクレアは泣き出す。

「聞いちゃだめだった？ごめんね」

マドレーヌは慌てて謝った。

ミス・ペレグリンが慎重に「ミス・ウエントワースはいずれ知らなければなりません。誰か彼女に教えてくれる人？」とみんなを見回した。ミス・ペレグリンは定まったと言わんばかりに両手を広げ、「ミス・ブルーム！」と指名した。エマはミス・ペレグリンを不服そうに見たが、ミス・ペレグリンは意にも介さずにうなずいた。そのため、エマはしぶしぶうなずき、こう言った。

「好きなどころに姿を消し、また現れるという能力」

マドレーヌとベスは目を見交わした。ベスは尊敬の意を示す明るい笑顔を見せる。

「えーっ！マドレーヌのおばあさま、すごい！」

ベスが言ったが、オリーヴが泣きわめく声でかき消されてしまった。クレアは上品にタオルを目に当てているが、すすり泣く声はつきりと聞こえる。二人が泣いたことでみんな集中できなくなり、エマまで泣き出した。エマは立ち上がり、オリーヴとクレアと共に部屋を出て行ってしまった。

マドレーヌの隣の空いた席にブロンウインが座り、怒ったようにフンと鼻を鳴らした。

「あの、なにかあったの？祖母の…能力のせい？」

「ミイナの持つ能力はとて役立った。ミイナは悪者との戦いの時も、わたしたちを連れて姿をくらましてくれた。そのおかげで、わたしたちの大半は生き延びて、ここにいます」

ブロンウインが言った。

「ある時ミイナは、人間界に戻りたいと言い出した。ホロウガストは滅び、もう安全だと言った。みんなはミイナに、ここにいますよとしました。でも、ミイナは…」

ブロンウインは辛そうに下を向いた。

「…ミイナは特殊能力を利用して、勝手に出て行ってしまった。」

最初は良かったんだと思う。自分の家にたどり着き、全てを知っている両親に冒険からの帰りを告げ、人間界で普通の男性と知り合って愛し合い、結婚した。ミイナは結婚相手をループの近くまで連れてきて、私たちに会わせてくれた。私たちは長時間外の世界にいることはできないから、わざわざすぐ近くまで訪ねてきてくれた。ミイナの夫となった男、リチャードは思いやりがあつて仕事熱心だから、わたしたちもリチャードを受け入れた。すべては順調のようだった。マドレーヌのお母さんが生まれ、その後すぐにアンナさんが産まれた。ミイナは幸せの絶頂だった。アンナさんもマドレーヌのお母さんも結婚し、子供を産んだ。アンナさんは子供が産まれてすぐに引越した。ミイナは孫のマドレーヌをかわいがつた。よく家にも遊びに行つた」

ブロンウインは少しずつ核心に迫る。ちなみに、リチャードというのはマドレーヌの祖父であり、マドレーヌの亡き祖母ミイナの夫だ。「あくる日、ホロウガストがミイナを襲いにきた。ミイナをうらんでいたワイトの命令だった」

「ホロウガストとワイトって？」

その質問をブロンウインは無視した。

「ホロウガストは家の中まで入ってきた。ミイナはパニックに陥つて、夫を連れて姿をくらまし、安全ないとこの家に夫を預けた。そして自分は、家に戻り、ホロウガストと戦う覚悟だった。愛する家族と過ごした家を、怪物にぶち壊されるのを防ぐつもりだった。年老いていたミイナは、勇敢さを失つてはいなかったんだ」

ブロンウインの顔が暗くなる。マドレーヌは、彼女が悲しい結末を言おうとしているのだと悟つた。

「家では、ホロウガストが血眼でミイナを探していた。ミイナに気づいたホロウガストは、舌を彼女の腰に巻き付けた。ミイナは姿をくらました。でも…」

ブロンウインの目には涙が光っている。

「怪物の舌がミイナの腰に巻きついてたんだ。だから、怪物はミイ

ナが現れた広い平野までついてきてしまい、ミイナは死んでしまった」

ブロンウインは話を終え、我慢できずに泣いた。マドレーヌも泣いた。祖母の勇猛果敢な最期に心を打たれ、何も言えなかった。

エマが赤い顔で戻ってきて、ブロンウインとマドレーヌの手を取り、「来て」と部屋から連れ出した。マドレーヌは瞬きして涙を堪えたが、ブロンウインは悲しみに打ちのめされている。マドレーヌは、祖母の話は『禁句』であったのだと思った。

「マドレーヌ」

エマが言った。

「私はミイナを誇りに思うわ」

そう言ったエマの顔は晴れ晴れとしていた。

「勇敢に怪物に立ち向かったミイナは、とても格好よくて素敵よ。あなたは彼女の血を継ぐピキュリア。あなたも勇敢に違うわ」

エマはマドレーヌの背中を優しくたたく。

「私…そんな、おばあさんのように勇氣のある人じゃない。むしろベスのほうが勇敢で優しい」

マドレーヌはそう言った。自分は勇敢さのかけらもなく、臆病で、頼りにならないと思った。反対に、ベスは行動的で優しく勇敢だ。

「そんなことないわ。さあ、みんなのところに戻りましょう。ブロンウイン？」

エマがブロンウインを呼ぶ。彼女は部屋の隅に隠れるようにしてしやがみこみ、涙を流している。

「ブロンウイン？行きましょう」とエマ。

「先に行つて」

ブロンウインがきつぱりと言った。

エマはオリーヴとクレアを連れてきた。四人はブロンウインを残して空き部屋から出て、食堂に戻った。食堂ではベスが心配そうにこちらを見ていて、マドレーヌが戻ると駆け寄ってきた。

「そろそろ帰る？」

ベスが名残惜しそうに言った。優しいベスは、きつとマドレーヌが

悲しみに打ちのめされていると分かっているのだろう。

「また来ます」

マドレーヌは聞き耳を立てているミス・ペレグリンに約束した。ベスも「もちろん、また来ます」と言ったので、ミス・ペレグリンは「そうね。あなたがたのお母さまに、二人の口から事情を説明したらいいわ。そうすれば、きっと許してくださるでしょうから。あなたがた二人の部屋を作っておきましょう」

ミス・ペレグリンがそう言ったので、二人は「やった！」と大喜びした。そして二人は、奇妙なこどもたちとミス・ペレグリンに一時的な別れを告げた。フィオナは花の冠を頭に乘せてくれ、オリーヴはかわいいいリスを一匹ずつ渡してくれた。エマは「必ず戻ってきてね」と約束させ、ジェイコブは握手して「また会おう」と挨拶してくれた。ブロンウインはというと、二人が空き部屋の外の廊下を歩いていくと、後ろから駆けてきて、力強い腕で抱きしめた。

「また来てね!!」

みんなに見送られ、二人は屋敷から出たのだった。

第6話 能力探し

「なんだか信じられないね」

ベスが坂道を下りながら言う。

「あんなにいい子たちと知り合えて良かった」

マドレーヌはエマを思い出していた。エマは怒りっぽいけれど情に厚く、きれいで魅力的な女の子だ。

「フィオナって、とってもいい子！おとなしくて優しいの」

「フィオナも素敵な女の子よね！あと、オリーヴのくれたリスを大切にする！」

二人は友達を思い出し、笑顔になった。街につくと、すぐさま元来た道をたどり、トンネルに着いた。暗いトンネルをくぐり抜けると、自分たちの寝室に着いた。なんだか懐かしく思える。

二人の寝室には先客がいた。自分たちのお母さんだ。

「どうだった？」

母はにっこりにしている。

「ずいぶんと早かったわね。もう少し一緒にいるのかと思ったわ。アルマはお元気？」

「早く帰らないと、お母さんが心配すると思って！ミス・ペレグリンには色々とお世話になったの。また、みんなに会いに行ってもいい？」

「もちろん。皆さんによろしく！楽しかった？」

「うん！とても！」

すると、母が「エマはどうだった？」と聞いてきたのだ！マドレーヌは驚いた。

「エマのこと、知っているの？エマもお母さんに会ったことがあると
言っていたわ！」

マドレーヌが聞いた。

「おばあさまから、エマの話は聞いていたのよ。とても優しい子だったね。数回会ったのが懐かしい」と母。

「エマはとてもいい子！」

マドレーヌはにっこりした。

「何が起きたの？」

ベスのお母さんはさっぱり分からないようだ。「五時間も行方不明だったんですから！」と怒っている。

「まあまあ、楽しんできたんですから！後で説明しますね」と母が取り繕った。

マドレーヌとベスは幸せだった。マドレーヌのお母さんはアンナおばさん夫婦の家に出かけ、ベスのお母さんは仲良くなった同年代の人たちと一緒に、イギリス本土を巡るツアーに出かけた。そこで、マドレーヌとベスはまた、ミス・ペレグリンと奇妙なこどもたちの住む屋敷に駆けつけることになった。

トンネルを抜けたところでは、嬉しいことに、エマとフィオナ、オリーヴ、ジェイコブが待っていてくれた。

「やつと来た！」

オリーヴが駆け寄ってきて飛びつく。

「そろそろだと思った！」

フィオナがぱつと明るい顔になり、歓喜したベスと歩き出す。

「ユーアンは元気？」

ユーアンというのはマドレーヌのお母さんの名だ。マドレーヌはエマに「元気よ！エマのことを知ってたの！」と答えた。一行は街を進み、急な坂ではオリーヴが「私の出番！」と張り切つて鉛の靴を脱ぎ、一人ずつオリーヴにつかまって楽々上った。ミス・ペレグリンの屋敷につくと、フィオナが植物を急成長させてトンネルをつくり、マドレーヌとベスを通らせてくれた。

屋敷ではミス・ペレグリンが出迎えてくれ、「戻ってきてくれてとても嬉しいわ」と言った。

二人はさつそく能力探しを開始した。フィオナの真似をして、植物に手をかざしてみる。だが、もちろんその能力ではない。次に、オリーヴにつかまって浮かび、ほどよい高さで手を離してもらった。二人ともあっけなく落下。フィオナが植物で作ってくれたやわらかいクッションの上に落ちた。エマの炎を出す能力も、イーノックの物に命を吹き込める能力も、ブロンウインの怪力もだめ。ホレーズという

少年紳士の、予知夢をスクリーンに投影できる能力もだめだった。もちろん、クレアのように後頭部に口が隠れているわけもない。試していないのはジエイコブの能力だけだったが、怪物が現れないと試せないで、諦めることにした。

二人は三日間にわたって真剣に能力を探したが、成果は出ない。

ちよつとした事故も起きた。炎を出す能力を持ちたいというベスが、エマの出した炎の渦に飛び込んでしまい、腕に軽いやけどを負った。マドレーヌはホレースの能力を無理やり試そうと、ミス・ペレグリンが提供してくれたエマの寝室の半分で寝転がり、毎晩悪夢を見ようとう奮闘した。ホレースに恐ろしい黒い蜘蛛の映像を見せてもらったのだ。その結果、毛むくじやらの蜘蛛が襲ってくる夢を見て夜中に叫んでしまい、激怒したエマに部屋を追い出される寸前になった。結局、二人とも力尽きてしまった。

第7話 警告

ミス・ペレグリンと奇妙なこともたちは時間の間にループよって、永遠に平和な時を過ごしていた。いや、過ごすはずだった…。しかし、マドレーヌとベスがこどもたちに会って五日目から、初めてその平和な状態が途絶えてしまった。

その日、ベスとマドレーヌはいつものように、朝起きてすぐ屋敷にやってきた。そこでは、ミス・ペレグリンがせわしなく働いていた。二階のエマの部屋に行くと、そこでは何やらいたずらっぽく笑うオリヴとクレアがいた。エマは腕を組み、手から炎を出している。

「どうしたの？」

ベスが言うと、エマは初めて二人が来たことに気づき、歓声を上げて駆け寄った。

「よく来てくれたわね！」とエマ。

「二人が」

エマがオリヴとクレアを指すと、手から出した炎の勢いも激しくなる。

「屋敷を抜け出してループを出ようって言うのよ。二人はしよっちゅうループから抜け出して街へ遊びに行ってるの。街には悪人もうろついていて、二人がどんな目に合うかもわからない。それをミス・ペレグリンも知っていて、厳しく注意してるのに。まったく！」

エマが脅すように二人に炎を向けるが、二人はくすくす笑って作戦会議中だ。

「ピキュリアである限り、ここから出てはいけないのよ！ループが壊れて直す時だけって、『鳥』に言われてるの。私だって、たまには抜け出すこともあるけど…二人はしよっちゅうなの！」

「だって、退屈なもの、エマ。ね、クレア？」

「そうなの！…ここにいるだけじゃ、つまらないわ」

オリヴとクレアが口々に言う。不満げな口調だ。

「じゃあ、行ってきまーす！エマ、告げ口しないでね！」

「なにかお土産を持ち帰るわね」

二人の少女は楽しそうに笑いながら部屋を出ていった。

「ミス・ペレグリンが忙しそうにしている時に、庭に行くふりをして出ていくのよ。私だって告げ口は嫌いだけど、二人は幼いから分別がつかなくて危ないの。だから、『鳥』に言わなきゃダメなのよ」

エマがため息をついた。

「まあ、しょうがないわ。二人とも、庭に来て！」

エマは呪縛を解くように手をたたき、庭に行こうと誘った。そこではこどもたちが待っていて、暇をつぶすようにしてみんなで遊んでいる。

「ブロンウイン、あの二人ったら、また街へ行ったのよ」

エマがブロンウインに近づいた。

「危ないじゃん！」

ブロンウインが腹立ちまぎれに石を投げ飛ばす。その石はトピアリーに突っ込んで穴を開け、フィオナが悲鳴をあげた。

「君が注意しろよ！知ってたんだろ？」

イーノックが命を吹き込んだガイコツの兵隊を動かし、エマのほうに歩かせながら言った。

「仕方ないでしょ。何度注意しても聞かないんだもの。だいたい、その変なガイコツ、どっかにやってよ！」

自分の足を木の棒でつつくガイコツを見て、エマが苛立つ。こどもたちは口々にみんなを責め始めた。ベスとマドレーヌはせっかく遊びに来たのに誰からも相手にされず、二人で芝生にしゃがんで言い合いを見ているしかなかった。

幸い、喧嘩は十五分で終わった。ジェイコブが「二人が帰ってきたらみんな注意しよう。エマひとりで言うよりもその方が効果的だと思う」といい提案をしたので、みんな納得し、二人が帰ってくるまで待とうということになったのだ。そこで、みんなは広間で様々な会話をしていたが、一時間経っても二人は帰ってこない。

「普段は三十分以内に帰ってくるのに。一気に老けちゃうから」とブロンウイン。

さすがにエマが心配し、「ループの入口に行ってくる」と駆け出して

いった。二人がいらないことにミス・ペレグリンも気づき、「何かなければいいのですが…。こういう事になるからこそ、二人には厳しく注意しているのに、まったく!!」と、いらいらして言った。

「ベス、私たちもエマのところに行かない？彼女ひとりだと、何かあったら危ないでしょ？」

マドレーヌは騒然となっている中、小声でベスに言った。ベスがうなずき、「ミス・ペレグリン。私たち、エマと一緒に二人を待ちます」と言った。それから二人は急いでエマのところに向かった。

エマはループの入口の石垣にもたれて立っていた。二人が走り寄るとエマは笑顔になり「来てくれたのね！」と迎えた。三人で石垣の上に乗る。

「二人とも遅いわ。『鳥』は気づいた？」と、エマが声のトーンを落として聞く。

「うん、気づいてた。それよりも二人はどうしたのかな？」

ベスが思案を巡らせる。

「あつ！戻ってきた」

エマが声を上げた。背の低い二人が寄り添ってトンネルを歩いてくる。両手に紙袋をさげ、楽しげに話を交わしている。その時マドレーヌは、クレアとオリーヴの後ろにある影をはつきりと見た。

「ベス、エマ、二人の後ろに誰がいる！」

マドレーヌは不安になり、二人にそう言った。ベスが暗いトンネルに目を凝らし「本当だ！」とささやく。

「オリーヴとクレアを尾行してきたんだわ。きっとワイトよ。『鳥』に伝えなくちゃ！早く！」

エマがいらいらとマドレーヌの服のすそを引っ張る。

「ワイトって？」

ベスがここぞとばかりに聞いたが、「そんなこと気にしてる時間なんかないわよ！」とエマに一蹴されてしまった。

「まずはいまいましいワイトを縛るわ。ベスとマドレーヌは見張って！逃げないように。私は『鳥』に伝えてくるから！」

エマが危険を顧みずにそう言ったのと同時に、オリーヴとクレアが

トンネルから出てきた。少し距離を空けて近づいてくる四人の影が見える。

と、エマがふところからロープを取り出してトンネルの出口に駆け寄り、驚いた四人の侵入者に飛びついた。マドレーヌとベスも駆け寄る。クレアとオリーヴは呆然としている。

「縛って！早く！」

抵抗する四人を押さえつけ、炎で脅しながらエマが言った。二人はロープを受け取った。二人は自分たちが縛る侵入者を見て少し申し訳なく思ったが、ベスは金髪の女性を、マドレーヌは黒髪の女性を縛る。マドレーヌは自分が縛った女性を見た。全く動じていない。エマは力の強い太つちよの男性を苦勞して縛った。

ロープがほどけない状態になっていることを確認したエマが、侵入者を見下ろす。

すると、女性ふたりと男性一人が、手に持っていた棒を振った。なんと、ロープがほどけてしまったのだ！彼ら三人は立ち上がり、正面からマドレーヌたちを見すえた。

「どうして?!」

エマが叫び、残っている男一人を唸りながら持ち上げて「私はこの人を連れてミス・ペレグリンに伝えてくるから、こいつらを見張って！」と言い残して行ってしまった。エマはクレアとオリーヴも引張っていった。

マドレーヌとベスは三人の不法侵入者たちと残されてしまい、どうすれば良いのか分からないまま立っていた。ベスが「逃げないでください」と恐る恐る言うのと、金髪の女性が「逃げるわけがないでしょう？」と意味ありげに言った。沈黙が続く。

ようやくミス・ペレグリンがやってきた。後ろに男性を引きずっているエマを従えている。

ミス・ペレグリンはエマに男性のロープをとくように命じ、エマは太った男性のロープをといてやった。それからミス・ペレグリンは慎重に口を開き、四人に、なぜ来たのか、名前はなんというかと尋ねた。すると、ロープをほどいた男性が「僕たち、あなたたちを助けに来た

んです」と説明した。

エマが怒り出し、前に進み出て「どうせあなたたちはワイトに決まってる！」と炎を放った。女性二人が悲鳴を上げて後退する。

「ミス・ブルーム、おやめなさい！」

ミス・ペレグリンに注意され、エマはしぶしぶ引き下がる。

「僕たちは魔法使いです。近年では、魔法使い以外にも特殊能力を持つ人の存在が明らかになり、問題になっている。あなたたちのようなピキュリアです」と彼は説明を続けた。周囲の空気が重くなり、エマが息を呑んだ。ミス・ペレグリンは静かに話を聞いている。

「米魔法省、マクローザでは、あなたたちを保護する運動が積極的に行われ、反逆者をなだめ、説得しています。しかし、闇の魔法使いたちは：あなたたちの存在を消そうと企んでいる。それを知らせるために来ました」

そう黒髪の女性も言い、四人はそれぞれ名乗った。最初に説明したブルーのコートを着た男性はニユート・スキヤマンダー。彼ははずば抜けて格好いい男性で、手入れしていないような洋服や髪型もさまになる。黒髪の真面目そうな女性はポーペンティナ・ゴルドスタインで、顔立ちが整っていてきれいだ。魅惑的な金髪の美女はクイニー・ゴールドスタイン。彼女は人を惹きつける。そしてただひとりの普通の人間、ジェイコブ・コワルスキーは太っついて人が良さそうだが、彼を怒らせたなら大変なことになりそうだ！

「あなたたちはワイトじゃないの？」

エマは信じられないというふうに尋ねる。

「私たちは魔法使いです。ワイトとも敵対します」

ポーペンティナ・ゴルドスタインが言った。

「魔法使いなんですか？ 本当に？」

マドレーヌは幼い頃から魔法使いが大好きで憧れていた。魔法使いが登場する本も大好きだ。ニユート・スキヤマンダーがうなずいて杖を振り、こう言った。

「インセンディオ！」

すると、彼の杖先から炎が飛び出した。

「何それ！私の能力なんて役に立たないわけ!?」

エマが驚愕し、怒りを抑えようともしていない。

「杖を使えるんですね!」

マドレーヌは夢を見ている気分だった。ケインホルムに来てからは驚くことばかりだ。奇妙なこどもたちに出会い、有り得ない存在のはずだった魔法使いと友達になるチャンスまで近寄ってきたのだ!

「私たちを気遣いここまで来てくださって、本当にありがとうございます。せつかくですから泊まっていつてくださいます。」

ミス・ペレグリンが言った。

「お邪魔になりませんか?」とクイニー・ゴールドスタインが言う。

「ええ、良ければお泊まりください。何日でも。ですが、何かあった時には、こどもたちを守っていただきたいのですが? いいですか?」

ミス・ペレグリンの瞳は鋭く、相手が誠実かどうか見極めているようだ。

「約束します」

ニユート・スキヤマンダーが力強く言い、ミス・ペレグリンが厳格にうなずいた。どうやら彼らはミス・ペレグリンのお眼鏡に叶ったようだ。

「ミス・ウエントワース?」

マドレーヌは突然ミス・ペレグリンに呼ばれて飛び上がった。

「はい!」

「こちらの…ポーペンティナ・ゴールドスタインさまと、クイニー・ゴールドスタインさまを空き部屋のどこかに案内して差し上げてください。ミス・ブランドリーにベッドを運んでもらいますから」

マドレーヌはミス・ペレグリンにうなずいた。見知らぬ侵入者を案内するとなると緊張するが、勇気を振り絞って「こちらに来てくださいますか?」と二人の女性に言った。二人はついてきた。マドレーヌは屋敷の二階に上がり、物珍しげに二人の女性を見るこどもたちの間をかき分けて、空き部屋の一つに着いた。

「こちらへ」

マドレーヌは二人を先に部屋に入れ、興味津々のこどもたちに小さ

く手を振り、扉を閉めた。気まずい沈黙が流れる。

「先ほども紹介したけれど」

クイニー・ゴールドスタインが沈黙を破った。

「私はクイニー・ゴールドスタインよ！こちらは姉のポーペンティナ、通称ティナ」

「よろしく願います」

ティナ・ゴールドスタインが言った。

「私たちはあなたよりも年上だけれど、気を遣わずに接してくれたら嬉しいわ！敬語も使わないでくれたらいいわ！」

クイニー・ゴールドスタインが微笑んだ。彼女は本当に美しい。魅惑的だ。

マドレーヌが返事をする前に、クイニーは「まだ信用していないのね？」と少し悲しそうに言った。マドレーヌは驚いた。

「そんなにびつくりしないで！最初の質問はイエスよ。次の質問は：ノーね」

マドレーヌはまたまた驚いた。

「クイニーは開心術士。人の心が読めるの」

ティナがこともなげに言った。

「だから、私の考えていることが分かったんですね！」

マドレーヌは「ピキュリアのことを知っていたんですか？」「あなたたちもピキュリアの能力を持つのですか？」と聞きたかったのだ。

「あなたのお名前は？…マドレーヌ・ウエントワースさんね。よろしく、マドレーヌ」

クイニーはマドレーヌが答える間もなく挨拶した。マドレーヌはまた呆然として「よろしく願います」と答えた。

「あなたたちのことを教えてもらえませんか？」

マドレーヌはまだ、この展開についていけないのだ。

「私は米魔法省、マクラーザの闇祓いな」とティナ。すかさずクイニーが「闇の魔法使いを探し出して捕まえるの」とマドレーヌの疑問を汲み取ってくれる。

「ある男性によつて、私の人生は狂わされてしまった。その人のせいで、私は魔法界の秩序を脅かす事件に巻き込まれ、危うく死にかけるところだった。それがニユート・スキヤマンダーよ」

ティナは笑いながら言った。

「彼は要注意人物。一目見て、何かあると感じた。私はまだ、闇祓いの勘を失っていなかったのよ。私はその頃、自分の実力が認められずに、闇祓いから降格させられていた。魔法使いと魔女の糾弾および根絶を目的としている団体がある。その団体のリーダーが開いた狂信的な集会でちよつとした騒ぎを起こしちゃつて、クビになった。だから、また闇祓いになるためなら、どんな危険も厭わない。そこで私は、怪しげなニユート・スキヤマンダーを追跡し始めた」

「彼は何の変哲もなさそうなトランクの中に魔法動物を隠し、違法でありながらもニユート・ヨークに持ち込んだ。私は彼をマクローザに連行した。しかし、ピツカリー議長が」

ティナはその時を思い出し、ため息をついた。

「私を追い出した」

「それから間もなく、パーシバル・グレイブス長官が私たちのもとを訪れたの。それから色々あつて……」

全てを話すのは無理だと言わんばかりに肩をすくめる。

「ジェイコブ・コワルスキーが、よく似たニユートのトランクを間違えて持って行ってしまったことから、事件が起こった。私はその途中、危うく死刑になるところだった……」

ティナの表情が暗くなる。

「その時、ニユートは敵対しているにもかかわらず、私を助けてくれた。その時から、私たちは少しずつお互いを尊敬し、信頼していった」

ティナが笑みを浮かべ、話を続ける。

「魔法動物を捕獲した一部始終は飛ばすわね。オブスキュラスの話も」

マドレーヌはどんな話なのか聞きたかったが、黙って続きを促した。

「グレイブス長官の本当の姿は、あのお尋ね者の闇の魔法使い、ゲラー

ド・グリンデルバルドだった。彼は牢屋に収容されたけれど、先日逃亡し、行方をくらましたの。私はニュート、クイニーと協力して、グリンデルバルドを追っているわ」

テイナの話が終わると、今度はクイニーが話し始めた。

「魔法使いは、ノー・マジ―非魔法族と関係を持つてはいけないの。ジェイコブは忘却の雨を浴びて記憶を失った…はずだったわ。でも、違ったの！私たちがグリンデルバルドを追跡している途中、ジェイコブの開いたパン屋の近くを通った。そして、ジェイコブと再会した！彼はなんと、私たちのことを覚えていたの！旅で起きた悪いこと以外、全て覚えていた」

クイニーは満面の笑みで言った。

「先ほども言った通り、私たちはあなたたちピキューリアに警告するために来たの。あなたたちが一人一人死んでしまうのを黙って見ているわけにはいかないでしょう？」

そう言ったテイナの目は輝き、正義に燃えている。

「ありがとうございます！」

マドレーヌは感激した。

「あの、一つ頼みがあるんですが…？」

マドレーヌは魔法使いと出会ったからには、魔法を見ておきたかった。た。

「いいわ」

クイニーが心を読み、杖を軽く振った。すると、ごちやごちやだった空き部屋がひとりでに整頓されていく。マドレーヌは感動して涙が出そうなほどだった。

その時、大きな足音が聞こえてきた。二秒後、戸口にはブロンウィンが立っていた。

「ベッドが入らないよ！…こうしちやえー！」

ブロンウィンが壁を蹴ると、壁が崩れ落ちてしまった。クイニーとテイナが悲鳴を上げる。

ブロンウィンは足でベッドを押し、部屋の中央まで飛ばした。それから、もう一人分のベッドを押し入れる。

「ありがとう」

クイニーが引きつった笑顔でお礼を述べた。ティナは目を見開いている。ブロンウインはうなずき、「マドレーヌ、『鳥』が呼んでる。下に来て」と言った。マドレーヌはティナとクイニーに一礼し、ブロンウインと共に一階に降りる。

階段の下ではミス・ペレグリンを中心に円をつくり、こどもたちが集まっていた。

「ミス・ブラントリー、ありがとう。さて…」

ミス・ペレグリンが咳払いする。

「これから、訪問客の世話係を任命します。世話係は担当のお客様と同室で寝泊まりし、お世話をする事」

「ミス・ペレグリン、あの人たちを信用しているんですか？あの人たちは不法侵入者ですよ！」

エマが怒る。ミス・ペレグリンは人差し指を立ててエマを黙らせ、また口を開いた。

「ニユート・スキヤマンダーさんの世話係は、ミス・ブルーム」

エマが抗議して炎を出したが、ミス・ペレグリンは完璧に無視した。エマが怒るのも無理はない。あんなに格好良い男性と二人きりで寝泊まりしなくてはならないなんて、信じられない！

「クイニー・ゴールドスタインさんの世話係は、ミス・トツカ」

隣でベスが息を呑んだ。

「そして、ポーペンティナ・ゴールドスタインさんの世話係は…ミス・ウエントワース」

マドレーヌは驚いた。みんなが自分を見ている。

「よろしく願います」と、ミス・ペレグリンは素っ気なく言った。そして、マドレーヌとベスに「来たばかりで悪いのですが、あなたたちにはできません。それと、ミス・ブルームにはいい薬だわ」と笑い、パイプをふかしながら歩いていった。

と、マドレーヌたちの前を駆け抜ける人影がいた。マドレーヌの予想通りエマだ。

「ミス・ペレグリン！なんで私が？なんであんな人の世話係？」

エマが興奮していくにつれ、炎の勢いが増す。ミス・ペレグリンは顔色ひとつ変えずに「あなたにはいい薬です、ミス・ブルーム。一生懸命やってみなさい。それと、お客様に対する口の聞き方について、明日たっぷり聞かせてもらいましょう」と言った。エマは不満そうにうなつたが、何も言わずに向きを変え「マドレーヌ、ベス、行こう」と誘った。

「それでいいのですよ、ミス・ブルーム。あなたにやらできます」

ミス・ペレグリンは笑いを隠さずに言った。エマはため息をつき、マドレーヌとベスを急かしながら二階に上がった。

「鳥」ってひどい人だわ、まったく！あんな男の世話係に指名するなんて！」

エマは相変わらず怒っているが、マドレーヌとベスはニヤツと笑い、彼女を残してそれぞれの担当の部屋に入ってしまった。マドレーヌはbronzeワインに壊されて崩れ落ちたドアをまたぐ。

「こんにちは…えーつと…あなたの世話係に…になりました…あの、ミス・ペレグリンに頼まれて…」

ろれつが回らない。顔がほてる。ティナがマドレーヌを見つめている。

「わざわざありがとう。よろしく」

ティナはクールに言い、さつきbronzeワインが崩した壁を見た。面倒くさそうに杖を軽く振るティナ。壁が元通りになり、ドアもきちんとかくつついた。

「それ、すごいですね！」

マドレーヌは心から言った。ティナは厳格そうな顔を緩めて少し微笑み、「そう？ところで、あなたの能力はなに？」と聞いてきた。マドレーヌはまた顔を赤らめた。

「ごめんなさい…私、実はケインホルムに来たばかりなんです。ここに来てからまだあまり経っていないくて…自分の能力が見つかっていません」

マドレーヌがもじもじしながら言うと、ティナは軽くうなずき「そのうちに見つかるわ。さあ、ご飯にしましょうか？」と言った。マド

レーヌは慌てて「えーっと、夕食は大広間で…」と言ったが、ティナは「私とクイニーで作るわ。皆さんを呼んできて」と頼んだ。そこでマドレーヌは、ミス・ペレグリンに怒られそうだと思いつつ（「お客様に料理を作らせるなんて！」と怒るミス・ペレグリンの顔が浮かぶ）、隣の部屋をのぞきにいった。そこには楽しげに話すクイニーとベスがいる。

「マドレーヌ！」

ベスが駆け寄ってきた。

「ベス、あの…ゴールドスタインさんが…」

マドレーヌはまたまた顔を赤らめた。

「ゴールドスタインさんが、夕食を作ってくださいるそうで…みんなを呼んできて、とおっしゃったの」

ベスがうなずいた。

「クイニー？私、マドレーヌと一緒にみんなを呼んでくるね」

ベスが気軽に呼びかけると、クイニーが顔を上げ「分かったわ。私はティナと一緒に皆さんを待っているわね」と笑顔で答える。二人はもう仲良くなっているようだ。マドレーヌは羨ましくてしかたがなかった。

「行こう、マドレーヌ？」

「うん」

二人はこどもたちを全員呼んできた。ジェイコブ・コワルスキーとニュート・スキヤマンダーはよく手入れされた屋敷の庭を眺めていたので、マドレーヌたちは少しそつとしておいた。最後にミス・ペレグリンを呼び出すと、彼女は驚いたが怒りはせず「せっかくなので見物しに…」と物珍しげについてきた。そろそろとみんなでティナとマドレーヌの部屋に入ると、中には退屈そうなティナと、楽しげに鼻歌を歌っているクイニーがいる。

「やっと来たわね」とティナ。クイニーは姉の腕に手をかけながら「さあ、始めましょう！」と笑顔で立ち上がった。二人は並んで立ち、杖を振った。

ティナの杖に呼び寄せられるように、お皿がふわふわと扉から浮か

んで入ってきた。こどもたちとマドレーヌたちは歓声を上げる。

クイニーが楽しげに杖を振ると、たくさんのタオルがドアから入ってきた。いや、それはタオルではない。生地だった。

色とりどりのカラフルなフルーツが、浮かんでいる生地にくるまれていく。全てが鮮やかで、強烈で、美しい別世界を作り出している。色彩がぼやけ、目の前のことしか頭に入らない。空中での調理を目にするなんて、数時間前は思いも寄らなかったことだ。夢のような世界が、ここにある。

材料たちは意思があるかのように動き、クイニーの杖の動きに従い、クレープのようなものを作り上げた。それも、いくつも。

ティナは大きな長テーブルを大広間から呼び寄せた。それがゆつくりと着地すると同時に、皿やフォークやナイフ、紙ナプキンが宙をさまよい、テーブルにたどり着く。たくさんの白い皿の上にはクレープのような食べ物が浮かび、クイニーが杖を下に動かすと同時に皿にのった。いつの間にか浮いていたローソクがとまり、テーブルが穏やかな明かりに満ちる。クイニーの作る料理の品数は増えていき、肉のパイづつみなどの手の込んだ料理もいとも簡単に作っていく。

クイニーは心から楽しそうに微笑みながら、出来上がった料理に優しい視線を向けた。手を伸ばしたくなるほどの匂いに誘惑されながら、こどもたちは歓喜する。オリーヴは動物のように鼻をひくひくさせ、エマは目を閉じて匂いを感じている。マドレーヌはこんなに食べなくなるのは初めてだと思った。

「さあ、座って！」

クイニーがっこりして言うと、みんなは我先にと椅子に駆け寄る。普段は冷静沈着なミス・ペレグリンまでもが、いい席を取ろうと焦っている！

「いただきます！」

みんなが座ると、エマが真つ先に声を上げた。

「エマ、いつも私に注意するくせに！『ミス・ペレグリンがいただきますすって言うてからよ！』って言うくせに！」

オリーヴが笑いながらエマをこづく。すると男の人の笑い声がし

て、ニユート・スキヤマンダーとジェイコブ・コワルスキーが入ってきたことを告げた。

エマは笑ったニユートを睨んだが、マドレーヌはエマが微かに耳元を赤らめたのを見逃さなかった。ニユートはとても格好いい。鼻筋の通った顔立ちで、背も高い。エマの好みに違いないが、そんなことを彼女に言った日には、本気で怒られるだろう！

ニユートとジェイコブも席につき、みんなで挨拶してから食べ始める。

「うわー!!おいしいー!すごいー!」

真つ先に声を上げたオリーヴが言う。エマは真面目な表情だが、口いっぱいに肉のパイづつみを頬張っている。マドレーヌはクレープのようなものに手を伸ばしたが、クイニーが「それはシュトルーデルっていうの。デザートよ」と言ったので後で食べることにした。クイニーの魔法で作った手料理は頬が落ちるほど美味しく、みんなお腹いっぱいになるまで食べ続ける。待望のデザート、シュトルーデルは、一口食べた途端に口の中に甘みが広がった。生地のみとフルーツの甘酸っぱさがほどよく溶け込んでいるのだ。

「美味しいー!」

マドレーヌは思わず言った。クイニーが嬉しそうに微笑む。

「ありがとう!ジェイコブの大好物なのよ!」

「そうなの!私も大好き!」

マドレーヌは敬語を使わずに言ってみる。

「嬉しいわ!」

そう言ったクイニーは明るく笑った。マドレーヌも笑い返す。

「さあ、お片付けしましょう!皆さん!」

ミス・ペレグリンが立ち上がり、パンパンと手をたたく。しかし、クイニーも立ち上がり「ミス・ペレグリン、大丈夫ですよ!私たちが片付けますから!」と言った。

「私たちなら、家事を楽にする呪文を数多く熟知しています。すぐに終わりますから、少し待っていてください!」とティナ。ミス・ペレグリンはしぶしぶうなずき、先に下に降りて行った。マドレーヌたちも

続く。クイニーとティナは自分たちが歩く後ろに、食器を浮かんでついてこさせ、奇妙な軍隊のようだ。

マドレーヌはティナと一緒に寝室に戻り、ひとりで考えごとをした。ティナはクールだ。それに大人だ。子供ではない。冷静で厳格なティナは、明るく快活なクイニーとは違う。マドレーヌはぐったりとうなだれた。だが、ティナにはティナなりの優しさがあるだろう。それは、同室で過ごしてからわかることだ。そして、先ほどの正義に燃えていたティナの瞳が忘れられない。過去の事を話してくれた時に浮かべていた優しい笑顔も…。

マドレーヌはティナについてをあれこれ考えるのはやめにし、今度は戦いが起こるかもしれないということについて考え始める。

ニユートたちがここに来たのは、警告のためだった。ピキューリアが追われているなんて、思ったこともない！もしも自分が祖母のようなピキューリアならば、自分も追われる運命になる。もしもそうになったら？マドレーヌは考える。

そうなったら——。頭の中で声がした。こどもたちと一緒に逃げ延び、戦わなければならない。

しかし、マドレーヌとベスがケインホルムにいてもいいのは、あと一週間だけだ。一週間で全てにかたをつけられるか？色々なことを知った今、マドレーヌはこのままこどもたちと離れるなんて考えられなかった。ここにはエマがいる。きれいで面白い魅力的なエマも、みんなと同じように追われるはずだ…。マドレーヌはこどもたちの顔を一人ずつ思い浮かべ、いつも優しくしてくれたみんなを残して帰ると仮定してみた。そしてすぐに、そのばかげた考えを振り払った。

マドレーヌが悩んでいると、隣に人が座った気配がした。顔を上げるとティナがいる。

「どうしたの？」

ティナは低い声で聞いた。その声には心配と同情がこもっている。マドレーヌは鼻の奥がツーンとして、涙がこぼれ落ちるのを感じ取った。かすれた涙声で話し出す。

「私の祖母はピキューリアでした…私がここに入れたのは、ピキュー

リアだからです。でも、私は能力をまだ見つけていません。それに、あと一週間で帰らなくちゃいけないんです…。学校に行かなくちゃ…。でも、ここにはエマたちがいて、いずれ危険な目にあつてしまう…。それを放っておくなんて…。私にはできない」

マドレーヌは激しく泣いた。迷い、苦しみ、テイナの無言の優しきを感じながら泣いた。テイナはマドレーヌに手を伸ばし、肩に手を置いてくれた。泣き止むと、マドレーヌは慌てて謝った。

「ごめんなさい」

テイナは笑って首を振る。

「いいのよ」

「私、どうすればいいのかわからなくて…」

すると、テイナが真面目な顔つきになった。

「もう少しここに泊まるんでしょう？ミス・ペレグリンやこどもたちにも相談してみたら？私はピキュリアじゃないから、あまり助言できないけれど、何かあればいつでも力になるわ」とテイナが言う。

「とても心強いです！ありがとうございます！」

マドレーヌは気分が少し楽になり、笑顔でそう言うことができた。

テイナはマドレーヌの肩に置いた手を離さなかった。マドレーヌはその重みを心地よく感じ、二人ともしばらく無言だった。やがて、クイニーが部屋に遊びにきた。マドレーヌを見ると、少し悲しそうに口を開いた。

「マドレーヌは、テイナのことでも悩んでいたのね」

テイナが息を呑んだ。マドレーヌはパニックになった。

「ちよつと！」

マドレーヌはクイニーに視線を送るが、届かない。テイナはマドレーヌをまっすぐに見つめている。居心地が悪くてたまらない。

「でも今は、テイナと同室になれたことを嬉しく思っているのね！」

クイニーがテイナに笑いかけると、テイナもその言葉を信用したように晴れ晴れと笑う。マドレーヌは胸をなで下ろした。確かに今は、テイナと同室で良かったと思っている。クイニーはウインクスし、部屋を出ていった。

「ごめんなさい…」

マドレーヌはさすがに気まぎれなくなり、まともにティナの顔を見ずに謝った。ティナは「いいえ」と肩をすくめ、「同室になれてよかったわ」と言った。マドレーヌもうなずく。窓の外を見ると、美しい茜色に染まった空がどこまでも続いていた。

第8話 迫り来る闇

「マドレーヌ、マドレーヌ！ほら、起きてよ、マドレーヌ！」

エマが耳元で叫ぶ。頭がくらくらしながらも、マドレーヌはなんとか起き上がった。

「どうしたの？」

マドレーヌは無理やり起こされていらいらしていた。ぼさぼさの髪を手で整える。

「どうもこうもないわ！」

エマがヒステリックに怒鳴った。

「たった今、魔法使いたちがこのループを探し当てたのよ！外で物音がするからつてミラードが見に行ったら、魔法使いたちが大騒ぎしていたんですって。幸い、入り方が分からないようだけど。緊急事態だわ！」

エマの目は血走り、口調と同じくらいにヒステリックだ。マドレーヌはその言葉の意味を考えて身震いし、もつれながら立ち上がる。

「どういふこと!？」

マドレーヌは目を見開いて聞いた。エマがいらいらして「説明したでしょ、おバカさん！」と声を荒らげたが、ブロンウィンが「マドレーヌは起きたばかりで、なにも知らない。怒っちゃだめ、エマ」と冷静にさとした。

「いきなり起こして悪いけど、緊急事態なんだ」とジエイコブ。マドレーヌのベッドを囲んでいることもたちは口々に声を上げ、マドレーヌを引っ張る。寝巻きの上にガウンをはおり、慌てて下に降りていく。

「大変なことになりました」

そう言ったミス・ペレグリンの目の周りにはくまがあり、疲れている様子だ。足を引きずり、マドレーヌの前にやってくる。

「一刻も早く能力を見つけないさい。今日は遊んではなりません。今は不満でしょうが、戦いになる前に見つけなくてはならないのです。どうか辛抱してください、ミス・ウエントワース」

ミス・ペレグリンがマドレーヌを重々しく見つめたので、マドレーヌは力強くうなずいた。

「分かっています。私に出来ることなら、何でもします」

ミス・ペレグリンは「助かります」と言っただけでかすかに笑顔を見せ、「ミス・トツカとミス・ウエントワースは、今すぐに庭へ出て能力探しを始めなさい。誰か！二人に付き添うこと」と命じた。マドレーヌとベスがうなずくと、フィオナとエマが前に進み出てくれ、四人でうだるような暑さの庭に飛び出した。

「さあ、何から始める？」

エマはせかせかと庭の中央に行き、腰に手を当てた。急がなければならぬ。

「まずはベスから！私がこのボールを投げるから、跳ね返そうと念じて」

ベスは眠たそうに目をこすった。両手を広げ、エマが取り出した小さなソフトボールを眉間にしわを寄せて見る。

「いくわよ！一、二、三…」

エマの投げたボールはあっけなくベスの両手に当たった。

「ストライク」とフィオナ。残念だが、仕方がない。

「ボールを使ったことで、何かほかに出来ることはある、フィオナ？」

エマが尋ねた。

「ベスが『自分の手にはあらゆる武器を跳ね返す能力が備わっている』って思い込んでいるのは？」

フィオナが提案すると、マドレーヌは思わず声を上げて賛同した。ベスの顔も明るくなる。

「了解、やってみるね」と、ベスは目を閉じ、両手を胸の位置までかかげた。厳かな儀式のように、マドレーヌとエマとフィオナはベスを見つめる。彼女が目を開くと、エマはボールを持ち上げて見せた。

「じゃあ、行くわよ。いい？一、二、三！」

ベスは両手を構え、エマはボールを投げた。

その時だ。ベスの手にボールが触れる直前、全ての動きが止まった。音が消え、世界がかたまった。誰も動かない。誰も声を出さな

い。天変地異が起こったかと、マドレーヌは本気で思った。

次の瞬間、全てが動き始めた。マドレーヌは目を見開いてベスを見る。フィオナは目を疑い、後ろを向いてまた向き直る。そしてエマはというと、みんなが嘘をついているとでも言うように、信用できないという顔をしている。

「ベス、すごい！」

マドレーヌはベスに駆け寄った。ベス本人が一番驚いている。

「私、この能力なんだ…」

ベスは驚愕しているが、声にはかすかに誇らしげな口調が交ぎっている。

「次はマドレーヌの番！能力探しよー」とエマが張り切った。マドレーヌは大喜びのベス、エマ、フィオナと共に、自分の能力探しを始めた。

一時間以上ぶっ通しで様々な能力を試そうとしたが、どれも失敗に終わった。マドレーヌは半泣きでしゃがみこみ、もう自分には能力がないのではないかとまで思いつめた。が、エマが「そうだ！あなた、ミイナの能力を試していなかったわね？やってみたら？」と言い、マドレーヌは納得した。祖母の能力を受け継ぐなんて有り得ないが、やってみる価値はある。

「まず、ここから少し離れたアダムのトピアリーに姿を現す、と念じて。それから強く願うの。頑張って！」

フィオナが応援してくれた。

トピアリーというのは木を装飾的に刈り込んだもので、フィオナが作った。それは少し離れた位置にある。

三人の期待のこもった視線を受け、マドレーヌは念じた。アダムのトピアリー、アダムのトピアリーと心の中で唱え、目を閉じる。

なんだかくらくらし、一瞬、空気の詰まったゴム管の中に押し込まれたかと思った。息苦しかったが、それはすぐに終わった。そして、大きな足音が三人分。

「やったわね、マドレーヌ！」

エマが笑顔で飛びついてきた。マドレーヌはエマを受け止める。

彼女がやつと離れると、マドレーヌは景色を見ることができた。マドレーヌはアダムのトピアリーの目の前にいた。つまり、姿をくらまし、目的地に現れたのだ！

「信じられない」

マドレーヌは地面に膝をつき、そう言った。体中から力が抜けていく。祖母の能力を受け継ぐピキュリアだったことに驚愕し、慣れない瞬間移動のせいで頭がズキズキと痛む。

「素晴らしいよ！とても役に立つね」とベス。

「鳥」に伝えよう。二人とも能力が見つかったもの」

フィオナが言い、四人そろって建物の中に入っていった。マドレーヌはぼーっとしていた。エマに支えられるようにして歩きながら、幸福感と驚きの入り交じった複雑な心境を抱えていた。とても嬉しい。しかし、祖母の悲しい事件を聞いた後は、素直に喜べないのだ。

ベスが授かった能力を聞いたミス・ペレグリンは顔を輝かせた。

「ミス・トツカ、あなたの能力は戦いで大いに役立ちます。武器にありとあらゆるものを跳ね返す能力を授け、仲間を守ってくださいね」

ミス・ペレグリンはフィオナにベスの能力がどこまで使えるか試させるよう言いつけ、マドレーヌを呼んだ。エマもついてきたが、驚くことにミス・ペレグリンはエマも空き部屋に招き入れた。

「お座りなさい」

ミス・ペレグリンはマドレーヌにふかふかの肘掛椅子を勧めた。エマはマドレーヌの隣に膝をついたが、ミス・ペレグリンは気にもせず口を開いた。

「ミス・ウエントワース、ミイナの能力を受け継いだのですね」

ミス・ペレグリンには全てお見通しのようだ。

「そうみたいです。でも私…」

マドレーヌは今の複雑な気持ちを説明できないと分かり、言いかけた言葉を呑み込んだ。ミス・ペレグリンは目を細め、「分かります」と言った。

「慎重に能力を扱えば、大惨事は滅多に起こりません。戦いに備え、練習をしておいたほうが良いでしょう」

「私が手伝います」

すかさずエマが申し出てくれた。マドレーヌは感謝の気持ちでいっぱいだった。

「ミス・ブルーム、あなたはミイナの親友でしたね。ミイナの能力をよく知っていることでしょう。ですが、ミス・ウエントワースはミイナではありません。どれだけミイナに生き写しでも、ミイナ本人とは違います。それをよく覚えておいてください。そして、ミス・ウエントワースをサポートするのです」

エマはうつむいた。きつと彼女は、ミイナを想っているのだろう。エマは誰よりも祖母を知っていたのだ、とマドレーヌは唐突に感じた。

「知っています。ミイナは戻ってこない人だから」

エマは取つてつけたような笑みを浮かべたが、その表情はすぐに崩れた。顔をゆがめ、声を上げて泣き崩れる。

「ミス・ブルーム、あなたの気持ちはよくわかります」

ミス・ペレグリンは、エマを冷静にじつと見下ろした。エマは涙を拭いながら、「私に出来ることは、マドレーヌをミイナのような悲しい目に合わせないようにすることです」と宣言した。ミス・ペレグリンは温厚に微笑み、マドレーヌたちを部屋から出るように促した。エマがドアのほうを向いた時、一瞬、マドレーヌはミス・ペレグリンと目が合った。彼女は不安げにマドレーヌを見ていた。

マドレーヌはエマに付き合ってもらい、色々なところに姿を現した。例えば、ベスとフィオナが一緒にいる大広間にいきなり現れて驚かしたり、ブロンウィンと話している途中で姿をくらましたり（ブロンウィンはマドレーヌが『ワイト』にさらわれたのではないかと心配した）した。こどもたちは姿をくらまし、また現す能力を『瞬間移動能力』と呼び、とても役に立つと褒めてくれた。だが、みんなはマドレーヌの祖母ミイナの事件を忘れてはいない。マドレーヌに忠告してくる子も少なくはなかった。

ベスはというと、こどもたちが彼女に投げつける色々なものを跳ね返して遊んでいた。陽が沈んでも、情熱は冷めない。ベスとマドレー

又は自分たちの能力を来る戦いに生かそうと意気込み、練習を続けていた。

その日、マドレーヌたちはエマとジェイコブに付き添われ、三日ぶりにお母さんたちのいるホテルに戻ることにした。ループの外に出ると、マント姿の男たちが眠っている。四人は顔を見合わせた。

「闇の魔法使いたちだ」

ジェイコブが耳打ちする。

「どうする？見つかれば殺されるわ」

エマが切羽詰まってささやく。マドレーヌはしばらく考え、素晴らしい考えを思いついた。

「私がみんなを連れて瞬間移動するわ！戦いのための練習になるしね」

すると、エマがうなずき「分かったわ、よろしく。じゃあ、マドレーヌは私とバスと手をつないで。それで、ジェイコブは私と手をつなぐの。いい？」と指示した。

「うん」

バスとジェイコブが言う。マドレーヌは目をつむった。ホテルの一室を思い浮かべ、強く念じる。

おなじみの息苦しさ。慣れていないバスとジェイコブが喘ぐが、エマは慣れっこのようだ。きつと、祖母とこうして瞬間移動していたに違いない。

一秒もしない間に、足が地についたのを感じた。お母さんたちの悲鳴が聞こえる。

「着いたようだね」とバス。

「お母さん。私、能力を見つけたの！祖母と同じ能力で、瞬間移動できるの」

マドレーヌからそう聞くと、お母さんは崩れるようにしやがみこんだ。

「あなたが…特別な能力を持つ？」

信じられないというふうに聞く。

「そうよ。バスもなの」

「私はあらゆる武器を跳ね返し、あらゆるものにその能力を授けられる力を持つのだ！」

ベスが自慢げに言った。が、ベスのお母さんもマドレーヌの母もろくに聞いていない。

「この人たちは誰？」

母が訝しげに尋ねた。明らかにエマとジェイコブを見ている。エマが進み出た。

「覚えていませんか？エマ・ブルームです。一度、お会いしましたよね。『鳥』もいた時に」

エマが言うと、お母さんは「ああ！あの時の！」と言ってエマの手を取り「マドレーヌをよろしく頼みます」と言った。

「彼女はミイナにそっくりです。外見も、性格も。彼女を必ず守るとお約束します」

そう言ったエマがマドレーヌにウィンクした。

「僕はジェイコブ・ポートマンといいます。先日、特殊能力を持つピキュリアであるとわかり、戦いに参加しました。マドレーヌは僕たちの仲間であるピキュリアです。簡単に見放すわけがありません！」

ジェイコブの言葉に、お母さんは信用したようにうなずいた。

「ベス？あなたが特殊能力を…」とベスのお母さん。

「もちろん。ベスの能力はとても役立ちますよ」とマドレーヌ。ベスのお母さんは不安そうだ。だがマドレーヌは、自分のお母さんはこの話を信用していると確信していた。それに間違いはなさそうだ。母はマドレーヌの両手を取り、「これから何が起こるの？」と聞いた。

「私たちピキュリアは、ワイトという異能者たちに追われていると同時に、闇の魔法使いたちにも追われている身です。もうじき戦いが始まるのです」

エマが真剣な眼差しを見せて説明する。

「マドレーヌとベスも…戦いに？」

「ええ」

エマとお母さんの目が合う。二人は通じ合うものを感じている。

「エマ、二人は行かなければならないの？」

「それがピキューリアの使命」

「マドレーヌは…戻ってこないの？」

お母さんの問いに、エマの顔が暗くなる。答えに迷い、下を向くエマ。部屋中のみんながエマに注目する中、彼女は決意したように母を見た。

「ユース、信じて」

エマの声は重々しく静かだった。

「マドレーヌは戦いが終わればあなたの元に戻るわ」

「学校はどうなるの？」

「マドレーヌはピキューリア。私たちと生きる運命にある。ピキューリアであることは、普通の生活を捨てるということでもあるのよ、ユース」

エマはそう言い、考え込む母の横顔を見つめた。

「マドレーヌとベスに…任せましょう。二人が決めることよ」と母が言う。ベスのお母さんがマドレーヌたち二人を正面から見た。

「特殊能力を持つ人たちと生きるか、普通の生活に戻るか、どちらを選ぶの？」

ベスとマドレーヌは顔を見合わせて苦笑した。あまりにも重い意味を持つ決断だ。

「ちよっと、相談してくる」

ベスが言った。

「どこに？」とジエイコブ。

「散歩」

マドレーヌが答え、二人は人目を避けるように部屋を出た。静まり返った廊下は心地よい。誰もいないことを確認し、二人は立ち止まった。

「どうする？」

「うーん…ベスは、どうしたい？」

「マドレーヌは？」

「ベスは？」

二人は譲り合う。折れたベスが「私は…普通に過ごしたい。できるだけね。でもそれって、みんなを見捨てることになっちゃう…」と言った。

「私も、普通に過ごしたい。でも、みんなを見捨てるわけにはいかないと思う。あんなに良くしてくれたのに…」

二人はお互いをさぐり合うように視線を合わせた。

「自分がピキューリアだって知ったんだもの、その運命を受け入れたほうがいい気がしない？だって…普通に過ごすことはできない…でしょ？」

ベスが言いにくそうに口ごもった。マドレーヌは彼女の言わんとしていることを完璧に理解していた。

「私たちが普通の世界に戻れば…長くは生きられない…」

「ピキューリアを付け狙う悪者に殺されるのを待つか、みんなと戦うか…選択肢は二つ」

気まずい沈黙が流れる。マドレーヌは決意した。みんなと共に戦おうと思った。それが自分の使命であり、祖母から受け継いだことだ。果たして、ベスはどう思うのだろうか？

「えーっと…私は、みんなと戦う」

ベスがきつぱりと決断した。マドレーヌはほっとして「私もそう思っていた」と言った。

「後悔しない？」とベス。

「きつとね」

二人は歩み寄り、手を握り合った。こんなにも友情を感じたことはない。今までに、一度も。

マドレーヌとベスが部屋に戻ると、すぐに「どっちにした？」と聞かれた。空気がこわばり、緊張と不安が漂う中、二人は「みんなと一緒に戦う！」と宣言した。

「本当に？」

エマがマドレーヌの両手を握り、まっすぐ見つめてそう聞いた。

「みんなのためなら、命はいとわない」

マドレーヌは力強く言った。エマはマドレーヌを抱きしめ、「そう

いうと思った。あなたはミイナのように勇敢ですもの」と声を震わせた。それから、エマはベスを抱きしめて「嬉しいし心強いわ。よろしくね」と伝えた。

「お母さん」

マドレーヌは母を見た。もう二度と会えない可能性もある。しかし、寂しくはなかった。

「私、みんなと戦って、勝ってお母さんのもとに戻ってくるね」

お母さんは涙目になった。

「あなたのおばあさまと同じ決断ね。応援しているわ」

マドレーヌはうなずいた。すると、お母さんがマドレーヌの手に一冊の本をのせた。

「これは、挫けそうなときに見て。今は開けちゃだめよ。ベスと一緒に見ることを約束してくれる？」

「もちろん」

マドレーヌとベスは長々と別れを惜しまずに、大慌てでリュックに必要なものだけを詰め、島に一つしかない古いホテルを後にした。

ジェイコブとエマはマドレーヌたちに寄り添ってくれる。ベスは平気そうに振舞っていたが、ジェイコブに支えられないと歩けないほど泣いている。マドレーヌはなんとか涙をこらえ、エマと並んでループの入口へ向かった。

石塚を抜けてトンネルを通ると、こどもたちが待っていた。フィオナが猛スピードで駆け寄ってきて、泣いているベスをのぞき込む。

「ベス？大丈夫？」

フィオナはベスの肩を抱き、先に中へ連れていった。屋敷の中ではミス・ペレグリンがそわそわと歩き回っていて、マドレーヌを見ると厳格な表情を緩めた。

「ミス・ウエントワース、どうしたのですか？ミス・トツカが大声で泣きながら、ミス・フラウエンフェルトに連れられていきましたが」

「ミス・ペレグリン、私たち、戦うことに決めました。精一杯頑張ります。ピキュリアとして」

ミス・ペレグリンはパイプをふかしながら微笑んだ。

「そうだと思っていましたよ、マドレーヌ」

意味深に言うと、ミス・ペレグリンは行ってしまった。

マドレーヌはミス・ペレグリンの後ろ姿を見つめていたが、みんなのいる大広間に入っていった。エマが微笑み、手を取って連れていてくれる。

「マドレーヌ、残ることになったんでしょ？エマから聞いたわ！」

オリーヴが無邪気に飛びついてきた。

「戦いで活躍してね！」

クレアはお人形のような顔をほころばせる。

「よろしく頼むよ」

少年紳士のホレースは少しもつたいぶった。

「皆さん！お静かに！」

鶴の一声ならぬハヤブサの一声で、騒々しい大広間は完璧に静まった。ミス・ペレグリンは満足げにうなづく。

「もう知っている通り、ミス・ウエントワースとミス・トツカは私たちと共に戦うと決心してくれました」

大広間が歓声に包まれる。マドレーヌは泣き止んだベスと視線を交わし、にっこりと笑い合う。

「魔法使いの皆さまと協力し、戦いに備えなさい」

こどもたちみんなが「はい！」と大声で答える。それからみんなは散り、それぞれのするべきことをしに行った。

マドレーヌは部屋に行き、ティナに残ることを告げた。

「一緒に頑張りましょう」

ティナの目には燃えるような情熱が輝いている。マドレーヌは頼もしく感じた。

第9話 忌まわしい怪物

その日から二日間、こどもたちとマドレーヌたち、そしてニュート、ティナ、クイニー、ジェイコブ・コワルスキーは、戦いに備えて計画を練った。ある日、ミラードがループの外を偵察しに行くと、信じたくないニュースが飛び込んできた。

「闇の魔法使いが、ワイトやホローガストを味方につけたらしい！」

みんなが大広間で紙を広げ、計画を書き込んでいる時だ。ミラードが駆け込んできて、切羽詰まった声で叫んだ。

「まさかー」とクイニー。

「そんなことが…本当にあるのか!？」

イーノックが目を丸くする。

「残念だ、本当に。でも、嘘じゃない。俺は確かにこの目で見た。ニュート、ブロンドの髪で邪悪な目つき魔法使いを知ってるか？そいつがワイトたちと一緒にいたんだ。名前は…グラード？いや、ゲラルドかな？」とミラード。ティナが息を呑んだ。

「ゲラート・グリンデルバルドが…ワイトと組んだ？」

ニュートが信じられないというふうに関首を振りながら言う。マドレーヌとベスはもう我慢できない。

「ワイトって？」

二人は叫ぶように聞いた。

「もう先延ばしにできませんね。ワイトは昔、私たちの仲間でした。しかし、ループでの暮らしに満足できなくなった反逆者たちは、インブリンを使った大規模な実験を行いました。彼らは愚かにも、神になろうとしたのです。不老不死の力を持つ神になろうと…」

ミス・ペレグリンの声は低く険しい。

「彼らは愚かな実験の報いを受けました。そして、彼らのなりの果ては…恐ろしい怪物です。何本もの強靱な舌と触手を持つ怪物。彼らはそんな化け物になってしまいました。しかし彼らは、その怪物ホローガストから抜け出す方法を見つけ出しました。かつての仲間であるピキュリアを餌にすることで、人間の姿に戻るのです。ホロー

ガストの進化系が、ワイトという生き物です」

この話をすでに知っていることもたちは平然としているが、ベスとマドレーヌは両手で顔をおおった。

「だから、怪物はピキューリアを狙っているんですね！」とベス。

「その通りです、ミス・トゥッカ！そして、その怪物はあろうことか、誰の目にも触れません。影は見えますが、全く分からないのです。ホローガストを見ることができるのは、この中でジェイコブだけです」すると、ジェイコブ・コワルスキーが「なんで俺なんだ？」と素っ頓狂な声を上げた。みんなはくすくす笑う。ミス・ペレグリンも笑いながら「ごめんなさい、紛らわしいですね！ミスター・ポートマンのことです」と説明した。

「ジェイコブが二人つて紛らわしいから、何か呼び分ける方法はないかしら？」

クレアが言った。

「ジェイコブのことをあだ名でジェイクって呼ぶのは？」とオリーヴ。すかさずホレーヌが「どっちのジェイコブだ？」と聞いた。

「あたしたちのジェイコブはジェイク。それで、人間さんのジェイコブは普通に呼ぶの」

オリーヴが言う。

「分かりやすいですね、ミス・エレファンタ」とミス・ペレグリンが言ったので、そう呼び分けることになった。

「どこまで話したか…ああ、ジェイクの能力のことでした。ジェイクの亡き祖父、エイブラハム・ポートマンも、かつてホローガストを見る能力を持っていました。それを受け継いだジェイクは、私たちにとって大切な存在です。戦いでは、彼がホローガストを見る役目になります」

ミス・ペレグリンが言った。

「そして、ワイトと普通の人間たちとを見分けるポイントがあります。それは目。不思議なことに、ワイトには瞳孔がありません。白い目をしているのです」

ミス・ペレグリンの表情はかたい。

「闇の魔法使いたちが彼らを味方につけたとなると、格段に恐ろしさが増します」

ティナが言う。こどもたちは恐怖に怯えて騒ぎ出す。

「ミスター・ナリングズ、もう一度、ループの外を偵察してきてもらえますか？」

「了解です」

ミラードの足音が遠ざかり、彼が部屋から出て行ったことを告げた。

少しして戻ってきたミラードは、息を切らしていた。

「ミス・ペレグリン、大変です！ワイトが石塚を見つけてしまいました！ここに入ってくるかも」とミラードが言う。大広間は騒然となった。ミス・ペレグリンはスプーンで陶器をコツコツとたたき、こどもたちを静めた。

「皆さん、今すぐ支度をしなさい。ここは安全ではありません。最低限、必要な荷物をバッグに詰め、持ってくることに。十分後に集合です」

みんな慌てて立ち上がり、それぞれの寝室へと走っていく。マドレーヌはティナと顔を見合わせ、二人の部屋に行く。

ティナは杖を振り、素早く荷物をリュックに詰めた。マドレーヌはリュックを背負い、魔法の力ですぐにゴタゴタを整理したティナと共に下の階へ降りていった。

「ああ、これでミス・ブルームとミスター・スキヤマンダー以外はそろいましたね」とミス・ペレグリンが言った。エマとニュートは十分後になっても来ない。マドレーヌは心配になり、エマの部屋をのぞきにいった。

部屋の中では、エマとニュートが並んで座っていた。エマは手からまばゆい炎の玉を出し、転がして遊んでいる。ただならぬ空気を感じ、マドレーヌはドアの陰に隠れて中の会話を耳をそばだてた。マドレーヌは盗み聞きが嫌いだったが、あれだけ嫌悪感を募らせていた二人が親密そうにしているのを見て、目を離せなくなってしまったのだ。罪悪感はあるが、今回ばかりは自分の意思に従った。

「ニュート」

エマが言った。

「あんなに無愛想で、ごめんなさい」

その謝罪に、ニュートは驚いて「いや、僕こそ」と言った。

「本当は、あなたと仲良くしたかったの」

「うん、僕も」

二人は目を合わせた。

「あなたはワイトじゃないって、一目見て分かった。あなたほど誠実さが溢れている人はいないわ」

エマは言いながら顔を赤らめた。

「君だって。美しいし、優しいって分かっていた！つつけんどんなのは、好意の裏返し。そう、ティナが言っていたから」

ニュートが笑いながらエマを見る。エマは何かを思い出すような表情を浮かべた。

「あなたを疑っていてごめんなさい」

エマがささやき、ニュートに近づいた。ニュートは戸惑ったようにエマから離れる。彼女は傷ついたように顔をそむけた。

「別に、嫌だってわけじゃないんだけど…」

ニュートがエマの気を察して言った。

「でも、君は僕より年下だから、あんまり馴れ馴れしくするのはちよつと…」

ニュートは正論だと思われることを言ったが、実は違うのだ。

「私は八十七歳。あなたよりも年上であるのは確かよ」

エマの言葉に、ニュートは目を見張って驚愕した。

「君たちは…少年少女じゃないの？」

「前に言ったでしょ。ループにいる限りは老けないの」

エマがやさしく言い、ニュートの肩にもたれた。ニュートは振り払わなかった。二人の顔が近づくにつれ、マドレーヌの体がかつと熱くなる。その時、オリーヴが後ろから足をしのばせてきて、二人に駆け寄った。足音を立て、大げさなほど声を張り上げる。

「エマー・ニュート！ミス・ペレグリンが呼んでいるよ！」

オリーヴの声にはっとし、二人は弾かれたようにぱつと離れた。

「ふうん、いちやいちやしてたのね」

オリーヴがいたずらっぽく笑う。エマは顔を赤らめ「うるさい！」と言った。ニュートは苦笑しているが、エマが自然に振る舞い一つもニュートの右手を握ると、かすかに顔を赤らめた。

「来て！ミス・ペレグリンもみんなも待つてるんだから！」

オリーヴが大股でドアに歩み寄り、隠れていたマドレーヌを引つ張り出す。オリーヴは乱暴にニュートをぎゅっと抱きしめ、彼がリュックを背負っていることを確認してから、下に引つ張っていく。マドレーヌは真つ赤になっているエマと並んで降りた。

ミス・ペレグリンは急かすように両手を打ち鳴らし「そろいましたね。では、作戦会議に移ります」と早口で言った。

「まずは、戦いに必要な武器を探しに行かなければなりません！そこで、遠征チームを結成します。そうですね：四、五人程度で組みましよう。誰か、行く人？」

ミス・ペレグリンが呼びかける。

マドレーヌは手を挙げた。エマ、ニュート、ベス、ジエイク、テナ、クイニー、そしてイーノックも手を挙げている。

「ジエイク、君はここにいたほうがいいと思う。ホローガストが見えるのは君だけだ。このループにホローガストたちが侵入してきた場合、頼りは君しかない」とヒュー。

「私は行く！私が行かないと、武器を防弾にできないでしょ？」

ベスは行く気満々だ。しかし、フィオナが首を振る。

「ベスはここにいたほうがいいよ！ループの外でいちいち能力を授けていると、その時間がもつたいないと思わない？」

確かにそうだ。ベスは納得し「そうだね、じゃあ、ここで待ってるね」と言った。

「魔法使いの方々が二人、ピキュリアが二人でどう？」

マドレーヌは提案してみた。嬉しいことに、みんな賛成してくれる。

「私が行けば役に立てるわ。機会さえあれば、グリーンデルバルトを倒したい」

ティナが言った。

「僕も行く。魔法生物たちを利用できる」とニュート。みんなは一斉に「魔法生物!？」と叫んでいた。

「言っただけでなかったかな？僕はイギリス人の魔法生物学者だ。かわいらしいものから危険なものまで、ありとあらゆる魔法生物ービーストを育てている。この変哲もなさそうなトランクの中で、絶滅寸前のビーストを保護しているんだ。ビーストたちの特性を活かせば、戦いに有利な方向に導ける。ピンチに陥った時も、ビーストに一肌脱いでもらえる」

ニュートがトランクを持ち上げて見せ、自分の計画を説明する。マドレーヌは前にティナがマドレーヌに話していたことを思い出していた。ちらつとティナを見る。彼女はショートボブの髪とすらつとした背が印象的で、とても美しい。それにクールだ。意外と情熱的でもある。視線を感じたのか、ティナがこちらを見、マドレーヌに微笑みかけてくれた。

「私も行きたい！いざとなれば、私がみんなを連れて逃げられる！姿を消し、また現す能力を持つもの！」

マドレーヌは冒険に加わりたいあまり、思わず立ち上がってそう言った。少しでもみんなの役に立ちたい。祖母のように勇敢なピキュリアになりたい！

「私は必ず参加する！炎を出して敵をやっつけられるよ」

エマがアピールする。

「決まりですね。ミス・ブルーム、ミス・ウエントワース、ミスター・スキャマンダー、ミス・ゴルドスタインの四人です。あなたたちには、戦いで必要な武器を探しに行ってもらいます。銃、槍、その他もろもろ：戦いで使えるものならなんでも、持って帰ってくることに。分かりましたか？」

ミス・ペレグリンがてきぱきと指図する。みんなが集まってきて、遠征チームの健闘を祈ってくれた。一刻を争う緊急事態だ。さっそうく出発することになった。

「待って」

マドレーヌは、外に出ようとする三人を引き止めた。

「外にはワイトたちやホローガスト、闇の魔法使いたちがいる。私がいみんなを連れて、どこかに現れるのはどう？」

「私たち魔法使いも、あなたと同じように姿現し・姿くらましできるわ」

ティナが腕を組む。

「二人ずつに分かれよう」

エマが言う。

「会えなくなったらどうするの？もし、どちらかが捕まったら？」とティナ。結局、マドレーヌがみんなを連れて、街の薬屋の近くに現れることになった。

外は蒸し暑く静かだった。マドレーヌたちは大急ぎで武器を探す。ティナが路地で「アクシオ！」と唱えると、立派な黒光りする銃がいくつも飛んできた。ティナがキャッチして微笑む。

「アクシオ！」

ニュートも唱える。と、平たい鉄の板が風を切って飛んできた。ニュートはその重みによるめきながら「盾も必要だと思ったから」と言った。二人は呪文を唱えて武器を集めてくれ、数分後にはたくさんの武器が集まった。

「これでいいわね！さあ、ループに戻りま…」

エマは言いかけたが、不意に黙った。マドレーヌがわけを聞こうとすると、「静かに！」と小声で注意される。マドレーヌは、はっとして口をつぐんだ。四人は路地の中心でしゃがみこみ、物音一つ立てない。

ヒュー、ヒューと風の音が異常なほどはつきりと聞こえてきた。マドレーヌは息を呑み、空を見上げる。黒雲が空を覆いつくし、雨が降り出した。四人はびしょ濡れになりながらも、まだ注意深くしゃがんだままだった。マドレーヌは、エマたちが何を監視しているのかさっぱり分からなかった。だが、エマの普通ではない不安げな表情を見ると、文句なんて言えなかった。

「あつ」

マドレーヌは思わず声を上げ、エマに睨まれた。

「だから言ったでしょ。何があっても叫ばないで。あいつの気を引くだけよ」

エマが小さな声で言い、マドレーヌの服の裾をつかんだ。

マドレーヌが見たのは、大きな影だった。太いロープのようなものが何本も垂れているように見える。

「ホローガストだ」

ニュートが目を見張り、影をじつと見つめて言った。そのホローガストという生き物はロープのような舌をちらちらと動かしていたが、臭いを嗅ぎつけたようだ。一目散にこちらに動いてくる影が見える！

「逃げろー」

ニュートが声を張り上げる。マドレーヌたちは素早く立ち上がり、恐怖に苛まれながらも走って逃げた。祖母のような無残な最期を迎えたくない、という一心で疾走した。エマも同じ思いらしく、マドレーヌの手をしつかりと握って走った。

周りの音は聞こえない。ただ、ホローガストの獲物を捕らえる前の喜びの唸りが、耳元で響いている。それから逃れようと、四人は必死で逃げて走る。

マドレーヌは恐怖で涙を流しているエマに引つ張られるようにして走った。雷鳴がとどろき、空が光る。

「死ぬ気で走って逃げてー！ロープに駆け込むのよー」

エマが喘ぎながら言った。それと同時に、ティナとニュートが突然立ち止まった。杖を構えている。

「何してるのよー」

エマが二人を突き飛ばそうとしたが、二人はここで動かない。じつと前方を見ている。

ホローガストのちらつく舌の影が見え、忌々しい怪物が動きを止めた。その時、ニュートとティナが杖を振った。

二人の杖先からは、ネットネットした赤い液体が飛び出した。それは地面につくる影の上にのびる。その液体がからまり、もつれ、怪物の姿

形が見えてきた。

「天才！」

エマが顔を輝かせて叫ぶ。そう、二人は怪物がこちらを狙い、動きを止める瞬間を待っていたのだ。怪物の姿は見えないが、粘つく液体が怪物を覆ってしまえば、姿が見えるようになる。その液体は接着剤のようで、怪物の姿を見えるようにするだけでなく、ホーガストの動きを遅くさせるのだ！マドレーヌはニユートとティナの賢さに感動した。

「行くわよー！」

ティナが興奮した笑顔を浮かべ、マドレーヌを引っ張った。四人とも走り出す。だんだん調子を取り戻してきたお腹の空いた怪物から逃げようと、今度こそ死ぬ気で走る。

「あー！」

怪物が今どこかと振り返り、マドレーヌは声を上げた。怪物は影しか見えない。しかも空が暗いので、影もうつすらとしか見えないのだ。

「あなたたちつたら、バカだったわ！雨の降りしきる中であんなことをしたって、無駄のはずでしょ！」

エマが絶望の叫びを上げ、二人を責めた。

「エマ、そんなことはない。インパービラス！防水・防火せよ！」

杖を構えたニユートが叫んだ。またしてもベタベタの液体がホーガストを襲い、その液が防水・防火される。それと同時に、エマが怪物に向かって銃を連射した。だが、怪物に当たるはずの弾が弾かれた。エマは残念そうにうなる。

「ニユート、なにしてるの？あなたのばかげた呪文のせいで、弾が当たらなくなったのよ！防水・防火したせいで！」

怒りを抑えられなくなったティナが怒鳴る。

「あーそうだーごめん、本当に！」

ニユートが自分の過ちに気づき、目を伏せた。

「とにかく逃げないと！言い争っている時間はない！」

マドレーヌも声を張り上げた。三人は勢いづけ、うなずきながら走

り出す。四人はループを指し、急な坂をかけたのぼった。ニュートの呪文は確かにばかけてはいるが、そのおかげで怪物の姿がくつきりに見える。と、思わずドロドロの急斜面に足を滑らし、マドレーヌは怪物の足元まで滑り落ちてしまった。怪物の触手がすぐそこまで迫る。マドレーヌは全身の震えを感じながらも、覚悟して目を閉じた。怪物の鼻息がマドレーヌにかかる。熱い鼻息が髪の毛を巻き上げ、マドレーヌは思わず「助けてー！」と叫んだ。その大声で怪物が逆上する…。「マドレーヌー！」

エマの叫び声が聞こえ、彼女がマドレーヌを引っ張り立たせた。エマの片手には炎。それが怪物を恐れさせたのだ！マドレーヌは心からエマに感謝した。

目の前を閃光が横切り、ニュートが自分自身のかけた呪文を解除した。間髪入れずに、ティナがホローガストを攻撃！怪物の雄叫びが聞こえる。

「早くー！」

エマはマドレーヌの腕を強く引っ張り、素早く坂をのぼっていく。マドレーヌは彼女の踏んだところを必死で覚え、ぬかるんだ地面をかきのぼる。今度は滑らないように気を付けながら。

また稲妻が光り、マドレーヌは怪物が迫っていることを悟った。振り返るのにも勇気がいるほどの近さ。四人は大木の下に集まった。振

「あの怪物を倒すのは無理だわ」とティナ。

「みんなを呼んでこようよ」とエマが言う。だが、怪物の息が吹きかかり、四人はまた逃げ始めた。マドレーヌの心を恐ろしさが蝕み、息がつまる。ニュートがまた呪文をかけ直し、怪物の影が見えた。坂を勢いづけてのぼってくるホローガスト。舌で地面をかき分け、猛スピードで迫る。マドレーヌはここから逃げる方法を考えた。簡単なことだ！マドレーヌの能力を使い、ここで姿を消し、ループに現れればいいのだ！

「私につかまって。私がみんなを連れてループに姿を現す！」

マドレーヌは恐怖から今すぐ逃げたかったあまり、深く考えずにそう提案した。しかし、エマは否定的な声をもらした。

「それじゃあ、怪物が外をうろつきっぱなしになるわよ！怪物はワイトたちや闇の魔法使いたちのところに戻って、私たちの居場所を吐くかも。ループに簡単に入る方法を探しているはずだから、怪物に命令して追跡させるかもしれないよ」

エマの意見には一理ある。

「じゃあ：今、僕たちがホローガストを倒さないといけない」とニュート。

「みんなを呼んできましょう！そのほうがずっと強くなるわ」

ティナはいらいらし、足踏みしながら言う。

「怪物はここにいるんだ、ティナ！倒さないと！」

「あら、失敗したらどうするの？ニュート・スキヤマンダー、あなたは私たちを皆殺しにするつもり!?!」

ニュートとティナが言い争いを始めてしまった。

「二手に分ればいいでしょ！」と、エマが大声で仲介に入った。ティナとニュートは顔を見合わせ、「確かに：」とつぶやく。

「私が残るわ！私なら、炎で怪物を倒せる！戦えるもの！みんなは先に逃げて！」

エマが手から炎を出した。脈打つ炎は武器になる。

「君に死んでほしくないんだ！僕が残る！魔法を使えばすぐに倒せる」

ニュートは怪物に炎を飛ばそうとするエマを抑えた。

「言い争っている時間が無駄よ！」とティナ。

「僕たちはできる限り早くホローガストを倒し、ループに戻るようにする！君たちは先にループに戻り、ベスと協力して武器を防弾にするんだ！」

ニュートが言い、自分の持っている武器をマドレーヌに手渡すと、エマと二人で怪物に向かっていった。マドレーヌとティナは顔を見合わせた。

「そうする他ないわ！行きましょう。私が姿くらましするわね」

ティナが言った。マドレーヌはティナにつかまる。その途端、物音が消え去った。怪物の唸り声も、荒れ狂う嵐の音も、エマとニュート

の声も聞こえない。代わりに聞こえてきたのは、こどもたちの声だった。

「戻ってきた！マドレーヌとティナが戻ってきた！」

クレアの声があった。マドレーヌとティナは大広間の真ん中に姿を現し、床に足をついた。ふらふらするマドレーヌをクレアとオリーヴが支えてくれ、倒れ込んだティナをクイニーとジェイコブが助け起す。まもなくミス・ペレグリンの靴音が近づいてきた。

「何が起こったのですか？ミス・ウエントワース、大丈夫ですか？大丈夫ではなさそうですが」

ミス・ペレグリンがマドレーヌの両肩を支えた。マドレーヌは気持ち悪くなり、胸を抑えながら「ホローガストに追われていたんです」と言った。こどもたちが一斉に息を呑む。

「ミス・ブルームとミスター・スキヤマンダーは？どうしたのです？」
「まさか、怪物の餌食になった？」

そう言ったイーノックを、ミス・ペレグリンが鋭い目で睨んだ。
「ミスター・オコナー！何を言うのですか？縁起でもないことを言わないように！」

「二人は残って戦っています」

クイニーがマドレーヌとティナの心を読んで言った。開心術は時に非常に役に立つ。マドレーヌは気分が悪く、今は話したくなかったので嬉しかった。

「こうするしかなかったんです。ティナとマドレーヌは二人に『ベスと協力して武器を防弾にして』と頼まれて戻ってきたのです」とクイニー。

「分かりました。ありがとう、ミス・クイニー・ゴールドスタイン。さあ、始めなくては！ミス・トツカはどこ？」

ミス・ペレグリンの言葉に、ベスが急いで駆けてくる。ベスはマドレーヌを見つけ「おかえり！お疲れ様」と声をかけてくれた。

「ミス・トツカ！ミス・ウエントワースとミス・ポーペンティナ・ゴールドスタインから武器を受け取ってください！」

「私とクイニーも手伝います」

ティナが申し出た。

「ありがとう。三人は武器に能力を授けましょう。その間、私たちは計画を練っていますから」とミス・ペレグリン。ティナとクイニーは武器を宙に浮かせて運んでいく。背後でドアが閉まった。

「ミスター・ナリングズ、いつもあなたにこの役目を任せて申し訳ないのですが、今すぐにループの外を見てきてもらえますか？」

ミス・ペレグリンに頼まれ、ミラードは「俺の出番です！」と自慢げな口調で引き受け、大広間から出ていった。

第10話 束の間の平穏

二分後、ミラードは大広間に駆け込むと「敵軍が侵入しようとしています、ミス・ペレグリン！やつらは入り口を見つけました！準備を整え、夜明けに侵入する予定です！」と重要な情報を教えた。

「今は午後四時過ぎです。あと七時間と少ししかありません！」

ミス・ペレグリンが言うと、誰もが「急がなきゃー！」と騒ぎ出した。その時、ニユートとエマがたくたくで大広間に入ってきた。疲れ果てた二人にわつと駆け寄ったこともたちが、口々にミラードの教えてくれたことを伝えた。二人は蒼ざめる。

「このループは安全じゃない！」とホレース。

「ここから抜け出さなきゃいけない！」とジエイコブ。

「旅に出るの？」

期待を込めてオリーヴが言う。

「ここに残って戦うの？そして、ループを守るの？」とクレアが尋ねる。

「協力すれば敵を倒せる！」とニユートが言った。

「まずは、このループを協力して守りましょう。それが私たちの務めです。最悪の場合…このループが破壊された場合は…旅に出る他ありません」

ミス・ペレグリンが厳格にうなずきながら決断した。

「どうやって戦うんです？勝ち目はありませんよ？」

イーノックが嫌悪感を顕にして叫んだ。

「多勢に無勢かも」

マドレーヌは敵軍の人数を想像して言った。

「ダンブルドア先生がいる！」

突然、ニユートが大声を出した。マドレーヌはニユートの目に勝ち誇った光を見た。

「アルバスを呼ぶのですか？」

ミス・ペレグリンがニユートに尋ねた。

「ダンブルドアって誰？」とフィオナとヒューが聞く。

「アルバス・ダンブルドアは、イギリスにあるホグワーツ魔法魔術学校の変身術の教師です。彼は魔法に長けていて、とても頼りになる存在です」とミス・ペレグリン。彼女の顔には安堵の表情が浮かんでいる。「ダンブルドア先生のお知り合いですか？」

「ニュートは信じられないという顔だ。」

「それで、ホグワーツって？」

エマの問いに、ニュートは笑いながら「ホグワーツは魔法使いの学校だ。世界一のね」と説明した。

「魔法使いの学校があるんですか？」

マドレーヌは興奮して飛び跳ねた。ミス・ペレグリンが厳格な表情を緩めて笑ったので、慌ててうつむく。もう幼い子供ではないのにもかかわらず、幼稚な行動をとってしまった自分がたまらなく恥ずかしい。

「もちろん。ティナとクイニーはイルヴァーモーニーという魔法学校に通っていた。僕はホグワーツ出身だ。色々とあつて退学になったけれど、ダンブルドア先生は僕に良くしてくれた」とニュート。

「ニュート、退学になったの!？」

エマが目を丸くして大声で言った。

「その通りだ、エマ」

「なぜ!？あなたが何か悪さをしたの?」

「それには訳がある」

「なに?」

エマは異常なほど興味を示している。ミス・ペレグリンが「ミス・ブルーム、今は戦いの話をしているのです。個人的な質問はあとにしてください」ときっぱり中断した。

「話を戻します。ええ、ニュート。私はアルバスの親友です。過去にも何度か、彼に助けを求めたことがあります。彼ほど高潔な人はいません」

ミス・ペレグリンの言葉には懐かしさがこもっていた。

「ちょうど今頃、ダンブルドア先生はマクラーザにいるはずですよ!ピキュウリアに対する偏見をなくしようと、わざわざイギリスからアメリカ

カまで足を運んだのです。急いで彼に伝えてきます」

ニユートが言うと、ミス・ペレグリンが微笑み「ニユート、あなたはとても頼りになりますね。宜しくお願いします」と頼んだ。彼はうなずき、姿を消した。エマの目が心配そうに動く。

「ミス・ブルーム、心配しなくてよろしい。ミスター・スキヤマンダーはすぐに戻ってきますよ」

ミス・ペレグリンにはお見通しのようだ。エマは耳元を赤らめ、「心配なんかじゃありませんよ！あんな人のこと、好きでもなんでもない」と意地を張った。しかし、オリーヴが「エマはニユートのこと好きなのよ、とても！エマったら、ニユートに抱きつこうとしてたの！気持ちわるーい！」とぼらしてしまった。ヒュー、ミラード、ジェイクがはやす。エマはオリーヴを睨み「オリーヴのおしやべり！」と言った。彼女の顔は真っ赤に染まっていた。

「ミス・ブルームがミスター・スキヤマンダーに好意を抱いていることは、前から感づいていました」
ミス・ペレグリンはお茶目に言ったので、エマの顔がますます赤くなった。

「本当に違うんです！あれはたまたまで…」とエマは言いかけたが、「たまたまなわけない！エマったら、恍惚の表情だったもの！」と、またしてもオリーヴがぼらした。エマは手から炎を出し、オリーヴに攻撃しようとしたが、仲介に入ったブロンウィンに止められた。

「さあ、作戦会議を始めま…」

エマが話題を変えようとしたが、その声は大きな音でかき消されてしまった。小さな子たちが悲鳴を上げ、エマは手から炎を出して戦おうとしている。だが、姿を現したのはニユートと見知らぬ男性だった。その男性は背が高く、少し顎髭を生やしている。まだそこまでの歳ではなさそうだが、知的で賢明な雰囲気だ。

「わしはアルバス・パーシバル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドア教授じゃ。初めまして」

男性がやさしく笑いかけた。

「なんとまあ、アルマ！またお会いできるとは、光栄じゃ」

「私もです、アルバス！」

ミス・ペレグリンが信頼している親友の肩をとんとんとたたく。「さて、ミスター・スキヤマンダーから聞いたところによれば、アルマがわしの助けを求めていると？」

ダンブルドア教授が落ち着いた声で本題に入る。

「ええ、その通りなのです、アルバス！私たちピキュリアは脅かされています。このループに敵軍が入り込むのは時間の問題です。あなたに味方に加わっていただければ、安全を強化できるのですが」

ミス・ペレグリンはダンブルドア教授をじっと見つめている。

「もちろんじゃ。親愛なるアルマの頼みならば、喜んで受け入れよう。はて、何をすればよいのじゃ？」

「アルバス、あなたは魔法がお得意ですね！戦いに加わっていただけますか？」

「わしの力の及ぶ限り」

ダンブルドア教授が重々しくうなずいた。

「わしだけでは大した頼りにならないじゃろう？よろしければ、わしの信頼しておる闇祓いを一人連れてこようかと思うのじゃが、どうじゃね？」

「アルバス、悪いわね。よろしく頼みます」

「もちろんじゃ。さっそく行って来よう。しかし、イギリスまで行き、その闇祓いと闇祓い局を説得せねばならんのじゃから、少し遅くなるかもしれない。そうじゃな…一時間後に、またここに戻ってくるとう」

ダンブルドア教授は素早くターンし、風煙と共に消えた。

「皆さん！戦いまで、残り五時間です！一時間だけ自由時間を与えます！好きなことをしてゆつくりと過ごしてください！」

ミス・ペレグリンは物わりのいい人だ。みんなは大声で喜んだ。そして、思い思いに散らばっていった。

エマがさり気なくニユートに近づいていった。二人は階段を上がり、自分たちの寝室に入っていく。みんなはいたずらっぽく笑い合っていたが、二人の幸福を邪魔しようと思う人はいなかった。

ベスはヒューに誘われ、彼の寝室に行った。階段を上る途中で振り返ったベスは、マドレーヌに意味ありげに笑いかけた。マドレーヌも笑顔を返す。

あまり仲のいい印象のなかったティナとイーノックは庭に出ていき、オリーヴとクレア、ホレースとミラードはそれぞれくつろいでいる。フィオナはクイニーの魔法を見て感動し、早口のアイルランド訛りで話していた。

ジェイコブはブロンウィンと二人、真面目な顔をつき合わせて何やら真剣に話している。聞こえてきた言葉は「単純な攻撃って、意外とバれないものだよ」「確かに！それじゃブロンウィン、俺たちはその手で行こう」だった。もう戦法を決めているだなんて二人らしい。さすがだ。

マドレーヌは一人になってしまったので、こちらに歩いてきたジェイクを見た時は、心底ほっとした。

「マドレーヌ？良ければ僕の部屋に来ない？」

ジェイクが誘ってくれた。

「いいの？ありがとう！」

マドレーヌはジェイクについて階段を上り、彼の寝室にお邪魔した。ジェイクの部屋はシンプルできれいに整頓されている。

「座って」と、ジェイクが椅子をすすめてくれた。マドレーヌが座ると、ジェイクも向かい側に腰を下ろす。

「戦いのあと、君はどうするの？」

ジェイクがうつむきがちに質問した。マドレーヌは質問の真意が分からずに「えっ？」と聞き返す。

「戦いが終わったら、君は帰るの？」

ジェイクが顔を上げ、マドレーヌをまっすぐに見つめた。

「私が生きていなかったら？」

マドレーヌは冗談交じりに言ったが、ジェイクはまた下を向いてしまった。

「君が生きていないわけない！」とジェイクが否定する。

「でも、私はみんなが死ぬのを見ていられない。誰かが死んでしまう

のを黙って見ているなら、自分が囮になるほうがましよ」

マドレーヌは真剣に考え、そう答えた。仲間達を見殺しにするなら死んだ方がまし、と本気で思う。

ジェイクが立ち上がり、マドレーヌを自分のベッドに誘った。マドレーヌは驚いたが、ジェイクの隣に腰を下ろした。

ジェイクがマドレーヌに近づいた。マドレーヌはジェイクと二人きりになるのに慣れていない。体中が熱くなり、急いで立ち上がる。「戦いで戦死したらどうなるかなんて…」

マドレーヌの口から言葉が飛び出した。

「考えたこともない」

すると、ジェイクが大慌てで「君に戦死してほしくない！」と言いながら立ち上がった。

「私だって、ジェイクに死んでほしいわけじゃないでしょ?!」

マドレーヌは大声で言った。ジェイクの気遣いが嬉しいのに、素直な態度を取れない。なぜだろう？

「もしも僕たちが戦いに勝ったら…」

ジェイクが静かに言った。

「ここで住み続けたら？」

マドレーヌはなぜだか無性に腹が立ち、声を張り上げて「そんなこと、あなたに決める権限なんてない！私が決めることよ！」と言った。ジェイクが「ごめん」と言ってきたので、マドレーヌはさすがに良心の呵責を感じた。ジェイクは何も悪くない。

「ごめんなさい。もう戻るね」

マドレーヌはそう言い残し、早足でジェイクの部屋をあとにした。彼の顔を見もせず、ドアを閉めて出ていく。頭の中では恥ずかしさと嬉しさが複雑に絡み合っているが、それが余計に腹立たしかった。

「ミス・ウエントワース？何があったのですか？」

下に下りると、ミス・ペレグリンが聞いてきた。

「何も」

マドレーヌは動揺し、短く答える。

「そんなはずはありませんよ、マドレーヌ。何を怒っているのです？」

ミス・ペレグリンはクイニーのような開心術士なのだろうか？

「もしも戦いに勝ったら、私たちはどうすればいいのですか？私とベスは？」

マドレーヌはミス・ペレグリンに尋ねた。

「あなたの好きに」

ミス・ペレグリンの意見はどうやら頼りにならないようだ。

「まずは戦いに備えなくてはなりません、マドレーヌ！勝てばミイナの仇を取ることにも繋がりますから」

ミス・ペレグリンは奇妙な笑みを浮かべ、パイプをふかした。そして立ち上がって歩き去り、大広間にはマドレーヌだけが残された。

少ししてジェイクが入ってきた。マドレーヌが暖炉の前に座っているのを見つけると、彼は驚いたように足を止めた。マドレーヌは気まずかったが、「さつきはごめんね」と声をかけた。ジェイクは暖炉の火を見つめながら「僕こそごめん」と言った。マドレーヌは安心し、隣にきたジェイクを迎えた。

「戦いのことなんだけど」

ジェイクは声をひそめ、暖炉側にかがみこんだ。ミス・ペレグリンに聞こえないよう、彼女を背にしている。

「なに？」とジェイクを促した。とても気になる。

「ミラードが、ミス・ペレグリンに内緒で敵軍の数を数えてきたんだ。何人いたと思う？」

マドレーヌは考えた。

「見たことはないから分からないけれど…私たちよりも多いんでしよう？うーんと…百人？」

ジェイクは重々しく首を振り、少し間を置いて口を開いた。

「軽く千人は超えていた」

マドレーヌは仰天し、思わず大声を上げそうになった。が、ジェイクに「しーっ！」と合図され、慌てて声を抑える。

「…千人以上!？」

「そう。僕たちに勝ち目があると思う？」

マドレーヌはどうてい勝てないと確信した。それを見越したよう

に、ジエイクは「いくら偉大なるアルバス・ダンプルドア教授が加わったって、僕たちは多勢に無勢だ、イーノックの言う通り。そこで、僕たちも真剣に計画を練らなきゃならないと思う」と重々しく言った。マドレーヌは事の重大さを思い知った。ジエイクにうなずく。

「遊んでいる場合じゃない」とジエイク。

「みんなを呼びましょう」

二人は立ち上がった。こどもたちと魔法使いたちを順番に呼び集める。だいたいは納得して素直に降りてきたが、何人か渋った人もいた。それは、ニユートとエマ、ベスとヒューだ。

「ほら！行くよ！」

ブロンウィンが力づくで引つ張ろうとすると、ようやく四人は降りてきた。怪力少女ブロンウィンに腕を引っこ抜かれてはたまらない！

「ミラード？どこかにいる？」

ジエイクが呼んだ。

「ここにいる」

小洒落たシルクハットが空中をヒョコヒョコと浮いて近づいてくる。

「さっきのことなんだけど…」

ジエイクがシルクハットに向かって語りかける。

「ああ、軽く千人は超えていた敵軍のことか？」

ミラードが言うと、こどもたちが顔を見合わせて騒ぎ出した。

「そんなに大人数の敵に攻められちゃ、私たちあつという間に皆殺しにされるわ！」

オリーヴが顔を覆い、しゃがみこんでしまった。

「もうおしまいだ！僕たちの勝ち目なんてない！」

ヒューも大声を上げている。

「そんなことない！みんなで計画を綿密に練ればいいだけだよ」と力強く口にするエマ。マドレーヌは救われた気持ちになり、すぎるようにエマに近づく。

「どうすれば勝てると思う、エマ？」

エマは腕を組み、マドレーヌをじっと見た。燃えるような意思が伝わってくる。

「鳥」に言わなきゃいけないと思う。敵軍の人数のことを」

エマが言う。

「そうしないと、ミス・ペレグリンの立てる計画にも差し支える」とブロンウイン。

「今すぐ伝えたほうがいい」

フィオナが切羽詰まったように早口で言った。

「行こう」

そう言ったベスはオリヴを優しく立たせ、みんなのところに連れてきてくれた。こどもたちとマドレーヌ、ベスは連れ立ってそろそろと大広間に入っていく。

「まあ！皆さん勢揃いでどうしたのですか？まだ自由時間ですよ」

パイプをふかしているミス・ペレグリンは慌てて立ち上がった。みんながミラードを見る。彼は「なんで俺なんだよ？」と小声で訴えたが、「おまえが偵察してきたんだろ？」とイーノックに言われ、しぶしぶ進み出た。

「俺、ループの外をこっそり見に行ってきたんです。敵は何人いたと思いますか？千人以上です、ミス・ペレグリン！」

ミラードが興奮気味に伝えると、ミス・ペレグリンは目を見開いた。「ミスター・ナリングズ！ループの外に出たのですか？よりによって危ない時期に！」

ミス・ペレグリンは顔をひきつらせた。

「ごめんなさい」と言ったミラードに代わり、ベスが前に出て口を開く。

「私たち、勝てっこありませんよね？何しろ私たちは…二十人もいないんですよ！」

それを聞いたミス・ペレグリンはこめかみを押さえた。

「心配ありません、ミス・トツカ！私たちも順調に味方を増やしているのですから」

「老いばれじいさんとその部下だろ？そんなの信頼してるのか？」

イーノックが半ば叫ぶように言った。すると、ミス・ペレグリンの顔から血の気が引いた。その瞬間、全ての音が消え、聞こえるのはイーノックの荒い息づかいだけだ。

「度が過ぎます、ミスター・オコナー！アルバスを侮辱することは、私を侮辱するのと同じです。今すぐこの部屋から出ていきなさい！」

ミス・ペレグリンが静かに言った。イーノックはさすがに蒼ざめ、よろよろと後ずさった。

「さて、この部屋から出ていく気がないようですね？それならば、二度とあのような口は聞かないように！そうでなければ、ミスター・オコナー、あなたを追放します」

「すみません」

つい先程まではふてぶてしい口調だったイーノックが、素直に下を向いて謝った。

「さて、話を戻しましょう！もうすぐ一時間が経ちます。間もなくアルバスが戻ってくるでしょう。それから皆で会議を始めましょう」

ミス・ペレグリンの指示に逆らう者は誰ひとりとしていない。みんなは大広間の椅子に腰掛け、アルバス・ダンブルドアと彼の信頼する闇祓いの到着を待った。

それから十五分後。屋敷の入り口に行ったエマとフィオナの悲鳴が聞こえてきて、マドレーヌたちは驚愕した。

「行こう！」

ベスが立ち上がり、マドレーヌの手を引いた。大慌てで腰を浮かせたマドレーヌは、ベスと共に玄関へ向かった。

そこにはアルバス・ダンブルドア教授が悠々と立ち、顔には微笑みをたたえていた。彼の隣には見知らぬ男性がいる。彼をじろりと見るエマと、不安そうにあたりを見回しているフィオナ。

「マドレーヌ」

エマが慎重に後ずさり、マドレーヌに小声で言った。

「さつき、なぜ叫んだの？不法侵入者かと思った！」とマドレーヌ。

「いきなり爆音がして、彼らが登場したのよ。驚くに決まってる！それで、マドレーヌ、彼、頼りになりそうだと思う？」

エマがささやき、男性を指した。マドレーヌはその闇被いだと思われ人物を見る。

「申し訳ないけれど…うーん、あんまり…」

マドレーヌは正直に答えた。なにしろ、その男性は全くと言っていいほど頼りにならないさそうだ。茶褐色の瞳と髪。人懐こそうな顔立ちは、どことなく『あらいぐまラスカル』を思わせる。口元はカモノハシのようだ。足が短く背も低いその男性を見て、マドレーヌは笑い出しそうになるのをこらえた。

「なんだか、おもしろそうな人だね？」

ベスがニヤニヤ笑いながら言った。フィオナは肩をすくめてみせる。

「ほら」

エマがマドレーヌとベス、フィオナの背中をポンポンと軽くたたいた。顔を上げると同時に、ダンブルドアと男性が歩み寄ってくる。

「通してくれるかね？」

ダンブルドアが言った。マドレーヌたちはうなずき、通路の端に避けて道を譲る。ダンブルドアは悠々と大股で通り過ぎていき、男性はその後ろをヒョコヒョコとついていく。まるでアヒルの父子だ。マドレーヌはまた笑いそうになった。

「行こう」

フィオナが控え目に笑いかけた。四人はダンブルドアと男性の通っていった廊下を進み、明るい電気のともし大広間に入った。

「さて、ご紹介させていただきます。わしの信頼する闇被い、レオナルド・ササツキファーじゃ」

ダンブルドアが朗らかに紹介した。

「何ともおかしな名前だね！」と小声でジエイクが言う。

「彼の名前は覚えづらい。彼のあだ名はササツキじゃ。そう呼んで差し上げてくれるかね？」

ダンブルドアが話を続けた。

「ササツキー、自己紹介をどうぞ」

ダンブルドアはゆったりと後ろに下がり、代わりに色白の男性が前

に出てきた。

「皆さんどうも、初めまして。ササツキーです。どうぞ、よろしくマ
！」

オリーヴとクレアがこらえ切れずに笑い出した。

「ところで皆さん、学校は楽しいですかー？」

ササツキーの質問に、しかめっ面のエマが「私たちはピキュリア
よ、学校に行くはずがないでしょ！」と答える。ササツキーは目を輝
かせ「オー、皆さんはピキュリア！素晴らしい！ワンダフル！」と
言った。そして、突然歌い出した。マドレーヌ達はその曲を知らない
が、テイナとクイニーのはっとした表情から察するに、どうやら魔法
界で有名な曲のようだ。しかし最初は聞き入っていた2人の魔女も、
だんだん呆れ顔になった。それもそのはず、突然歌い出したかと思え
ば物凄く調子外れな音程なのだから。

ササツキーは声を張り上げ、抑揚をたっぷりつけてサビを歌った。
おそろしく音痴だ。

「よっ！ササツキー！」

オリーヴが囁す。ササツキーは紳士風のお辞儀をして「というわけ
で、自己紹介を終わります」と間延びした声を出した。

「ササツキー、ご苦労」

ダンブルドアが思わず笑いながら言った。

「さあ、会議を始めよう。アルマ！」

ダンブルドアがミス・ペレグリンを見た。みんなは向きを変えて座
り直す。

「さて、ミスター・ナリングス…」

「言わなくても分かりますよ、ミス・ペレグリン。偵察してきます」

ミラードがみんなの前で洋服を脱ぎ、姿が見えないことを確認させ
た。

「行つてきます」

そうミラードが言うと、駆け出していく足音が遠ざかっていった。

「さて、あと二時間で敵軍が侵入してくるでしょう。そのためにはど
うしたら良いか、意見がある人は手を挙げて教えてください」

「はい！」

エマが勢いよく挙手した。

「ミス・ブルーム！」とミス・ペレグリンが指す。

「私たちの中で二つの軍に分かれ、ループの中を守る軍と、ループの外で敵を食い止める軍をつくるのはどうですか？」

エマがてきぱきと意見を言った。

「はい！」

「ミス・ポープンティナ・ゴールドスタイン！」

ティナがエマを見、「エマの意見は的確でとてもいいと思います」と同意を示す。

「はい！」

「ミスター・コワルスキー！」

「よっころしよ」と声を上げ、ジエイコブが立ち上がった。

「ループの外で戦う軍は、最初どこに行くんだ？」

「そうだそうだとイーノックが言う。エマとティナは小声で会話を交わしている。」

「それは…」とエマ。

「私たちはループを守ることが最大の目的です。ですから、ループの外でわざと敵軍に見つかり、逃げて姿をくらましてもらいます。そうすれば敵軍は騙され、外の軍を追って行くでしょう」

ティナがはつきりとした声で説明した。

「はい！」

「ミスター・スキヤマンダー！」

立ち上がったニュートは眠たそうだが、その視線はきつぱりとした強い意思を感じさせる。

「ティナの言った作戦が成功したとしましょう。その場合、外の軍は延々と敵軍に追われることになりませんか？外の軍が危険な目にあつてしまいませんか？」

「ニュートの意見には一理あるわ」

エマが言う。

「はい！」

ベスが大声で意見を言おうとした。みんなはそちらに注目する。

「どうぞ、ミス・トツカ！」

「外の軍だけが不利な立場にならないよう、何かうまく作戦を立てたほうがいいと思います！内軍も外軍も命を粗末にせず、堂々と戦う必要があるのではないかと思っています」

この意見にはクイニーをはじめ、フィオナ、イーノック、ジエイコブ、ニュートなど大勢が賛成した。マドレーヌは親友の立派な意見を聞き、涙が出そうになるほど感激した。

「そうね」

ティナとエマも言う。

「味方を危険な目に合わせるのはだめだと思う。そうなった場合、みんなで外軍の加勢に行くべき」

ブロンウィンが仲間思いの誠心を発揮した。

「状況を整理しましょう。外軍と内軍に分けるという意見が出ました。これについて、賛成の人は拳手をお願いします」とミス・ペレグリン。マドレーヌは手を挙げた。エマ、ティナ、ベス、クイニー、ニュートと拳手の数は増え、ついには部屋中のみんなが手を挙げた。

「結構。では、新しい問題提起に移ります。外軍を囚にするという意見が出ましたが…」とミス・ペレグリン。

ティナが拳手するのも忘れて立ち上がると「私は外軍を囚にするつもりはありません、ミス・ペレグリン！ただ、それ以外にループへの襲撃を防ぐ方法はないと思ったのです」と発言した。大広間中がざわめく。

「方法ならある！」

ジエイクが大声を上げた。ざわめきがやみ、ジエイクに視線が集まる。彼は咳払いをした。明らかに発言モードに切り替わっている。

「外軍と内軍に分けるというのは変えない。このループの中で戦えばいい。外軍はなるべく手前で敵軍を引き止めるようにして、内軍はループの中で戦う」

マドレーヌはいい案だと思ったが、否定的な声も少なくはない。まず、クレアが巻き毛を振りながら立ち上がり「それじゃあループが破

壊されちやう！」と最もなことを言った。しかし、クレアの隣で立ち上がったオリーヴは「このをループを守りたいけど、一部の人たちだけを危険にさらすのはだめよ！あたしたちはみんな一緒だもん！」と声を震わせた。幼いオリーヴがまともな意見を言ったことで活気づき、次々と意見が飛び出す。

「外軍がいくら敵軍を引き留めたって、狙いは外軍だけじゃない。やつらはループと内軍をも狙っている。だからこそ、外軍はできる限りの力を尽くして戦い、引き留めが効かなくなった時には内軍がループを守るために戦うのがいいと思う！」

ジェイクが叫ぶ。

「ループを守ることが俺たちの使命じゃないのか？」とジェイクに反対するイーノック。

「おい、俺たちは狙われている者達が集まり、互いを守るために戦うんじゃないのか？このループを守ることが優先なのは分かる。でも一番の目的は、俺たちの命を守ることじゃないのか？」とジェイコブ。それに合わせて部屋中みんなが『ループを守るのが最優先派』と『自分たちの命を守るのが最優先派』に分かれ、言い争いを始めてしまった。

「静かに！」

ミス・ペレグリンが声を張り上げ、みんなを黙らせた。

「意見が二分してしまうのならば、ループを守るのを優先したい人は内軍、皆を守ることを使命としたい人は外軍に分かれるのはどうですか？もう言い争っている時間はありません！一刻も争う緊急事態です！」

ミス・ペレグリンの意見に逆らう者は誰一人としていない。

「では、内軍志望の人？」

イーノック、ジェイク、ホレース、ヒュー、クレアが手を挙げた。残りのニュート、ティナ、クイニー、ジェイコブ、エマ、オリーヴ、ブロンウイン、フィオナ、マドレーヌ、ベスは外軍志望である。これでは内軍が五人、外軍が十人と人数にばらつきが出てしまう。

その時、「誰か服を投げてくれるか？」というミラードの声がした。

背後でドアが閉まる。やれやれと笑いながら、ミス・ペレグリンがミラードに服を渡した。服を着たミラードは空いている席に座り、「午前十時きっかりに敵軍は襲ってきます」と知らせた。ミス・ペレグリンはうなずきながらミラードに今の話を伝え、内軍か外軍どちらにするかと聞いた。

「俺は内軍志望。いざと言うときに敵を倒せる」とミラード。これで内軍は一人増えた。

「魔法使いが皆外軍というのは、何とも不安じゃのう。はて、魔法使いが誰かひとりでも内軍に移動してはくれんかね？」

今まで成り行きを見守っていたダブルドアが言った。

「確かに、内軍にも魔法使いがいたほうがいい」とヒュー。

「私が移動します。内軍に加わり、精一杯戦わせてもらおうわ」

ティナが目を輝かせて申し出た。彼女は完璧な戦士だ。

「ジェイコブ、君は何か役に立てる？」

ニュートが言いにくそうに質問すると、ジェイコブは「あ、ああ：俺はみんなのように特別じゃない。内軍になるよ。悪者を突き飛ばしてやる！」と拳をかためた。そういうわけで、内軍が八人、外軍が八人と等しくなった。

「ここからは座席を各軍ごとに移動して作戦会議に致しましょう。ところで、私は内軍に加わりますが：アルバス、ササツキー、あなた方はどうなさるの？」とミス・ペレグリンが言った。

「私は内軍で」とササツキー。

「わしも内軍でいいかね？ 問題が発生した時は、いつでも外軍に加勢しよう」とダブルドアが力強く言う。少し心細いが、外軍も力ぞろい。頑張ろうと心に誓う！

内軍は座席を詰め、外軍は暖炉の前に円になって座り、作戦を練ることにした。

マドレーヌはベス、ニュート、エマ、クイニー、ブロンウィン、フィオナ、オリーヴと共に暖炉の前に集まった。

「敵軍に追われ始めてしまったら、このメンバーでそろって逃げるわけにはいかないわ」とエマが言う。

「追われ始めたら二手に分かれ、後に敵の目から逃れるために四手に分かれるのはどうかしら」とクイニー。

「いいと思うー!」

マドレーヌとベスが言った。

「どういう組み合わせにするか決めなくちゃ」とファイオナ。

「まずはそれぞれの能力を考え、それに合ったパートナーやグループメイトを探し出したらいと思う。誰かさんみたいに好き嫌いで判断せずにね!」

ブロンウィンが言うと、エマは顔を赤らめた。

「エマは手から炎を出して戦える。僕とクイニーは魔法が武器だ。ブロンウィンは怪力で頼りになるし、ファイオナは植物を育てることで助けに加われる。オリーヴは空中浮揚でき、ベスはありとあらゆる武器を跳ね返し、何の変哲もない物にその能力を授けることもできる。そして、マドレーヌは…窮地に陥ったとき、一番活躍を見せられる。瞬間移動で仲間を救える。また、戦いの最中に瞬間移動することで敵の裏をかくことができる」

ニュートが一人ひとりの特性を説明した。

「まず、ニュートと私はそれぞれ別で戦うべきだと思わない?魔法使いがかたまっていると助けにならないでしょう?」とクイニー。

「ベス!君は呪文も跳ね返せるの?」

ベスはいきなりニュートに名前を呼ばれ、戸惑ったように首を傾げた。

「うーん、やったことがないから分からない」

「やってみましょう!」とクイニー。

ベスは立ち上がり、まっすぐにニュートとクイニーと向かい合った。

「いくよ…一、二の三で呪詛をかける。君は跳ね返して!」

ニュートが指示し、ベスがうなずく。

「一、二の三…」

「タレントアレグラ!」

クイニーが放った閃光はベスに向かって一直線に伸びた。ベスは

手をかざし、閃光に向ける。すると、閃光は屈折してベスからそれた！ニユートが横から杖を振り、閃光を消した。

「よくやったわ、ベス！素晴らしい！」とクイニーが褒める。ベスは満面の笑みだ。

「ベスは攻撃できないけど、武器も呪詛も跳ね返せる。彼女には魔法使いのペアは必要ないんじゃない？」

ブロンウィンが腕を組み、身を乗り出して言った。

「防御できるベスには、攻撃できる仲間が必要なんじゃない？」とオリーヴが飛び跳ねながら意見を言う。

「例えば：ブロンウィンや、フィオナや、エマ？」とマドレーヌが手を挙げて言う。

「ベスのペアについては、後でよく考えましょう！それよりも、他にもペアを決めなくては」

クイニーが微笑んだ。

「オリーヴはどうやって能力を生かすの？」

フィオナが尋ねた。

「空高くまで浮かんでいって、上空で気付かれないように待機しているわ！それで、上から攻撃するの！物を落としたりね。それと、私は空気を操れる。口から吐く息は人を壁に押しさえつけられるほどだし、強風を起こして敵を困らせられる」とオリーヴ。自分の能力を生かしたいと願っているようだ。

「オリーヴは最年少。彼女には頼りになる人がついたほうがいい。例えば：魔法使い？」

ブロンウィンは幼い仲間を気遣う優しさを発揮した。

「私かニユートがオリーヴとペアを組みましょう」

クイニーが素早く言う。

「次にフィオナ。植物を操り、敵を蔓で縛ったり、通路を塞いだりできるよね？」

ベスがやる気満々でフィオナに話しかける。

「うん！ただ、攻撃も防御もあまりできないの」と言うフィオナは少し悲しげだ。

「フィオナにも頼りになる人をつけたらいいと思う」

マドレーヌはフィオナに笑いかけながら提案した。

「その通り！それで、マドレーヌ」とオリーヴ。厳格なリーダーぶる様子はかわいらしくお茶目だ。

「私は攻撃できないけれど、攻撃を避けられる。つまり、防御できるの」とマドレーヌは言った。

「じゃあ、マドレーヌには攻撃できる人がついたらいいね」とベスが言う。

「一旦、すでに候補が出ている人から決めない？オリーヴとフィオナは僕たち魔法使いと組むのがいいんだね？僕はオリーヴと組んで戦おうかと思ってるんだ」

ニユートが順序立てて状況を整理してくれた。

「私はフィオナと組んで戦うわ」とクイニー。これで二つのペアが確定した。

「本当はマドレーヌと組みたいところだけど、もしそうしたら二人とも攻撃できないから、すぐに負けちゃうよね？それなら…」

ベスはブロンウィンに視線を送っている。

「私も同じことを考えてた。わたしたちで敵軍を木っ端微塵に吹き飛ばそう！」

ブロンウィンが物を投げ飛ばすポーズをとってみせる。

「マドレーヌ」

エマに名前を呼ばれた。

「私がかつてミイナとタツグを組んで戦った。今度はマドレーヌと組める！せっかくだから、お互いに助け合いながらベストを尽くそうね！」

エマは晴れ晴れと笑いかけてくれた。

「私こそ！よろしくね、エマ！」

マドレーヌは見惚れるほどの美しい少女に微笑みかけた。

次に決めるのは、敵に追われ始めてすぐに分かれる四人組のメンバーだ。先ほどつくった二人組を二つくっつけ、四人組にする。簡単そうだと思うだったが、それが意外と大変なのだ。

「魔女・魔法使いは各組に一人ずつ」ということに決まった。そのため、マドレーヌとエマはニユートたちかクイニーたちと組むことになった。つまり、ベスたちとは一緒になれない。

「魔法と浮遊を有する二人組か、魔法と植物を思いのままに操る二人組。どちらを取る?」

ベスがおどけて聞いた。マドレーヌはエマと顔を見合わせ、無言で相談する。マドレーヌはベスたちに決断を委ねたかった。

「ブロンウィンたちが先に決めて。あなたたちと相性のいい組を選んで」

エマが言った。

「私たちは……」

ベスはブロンウィンと小声で相談している。相性のいい組を選ぶことは、ループの安全にも、そして自分たちの命や勝利にもつながるのだ。

「私はオリーヴが心配。幼くて世界を分かってないオリーヴが、他人の安全を慮れるか分からないニユートと二人で敵に立ち向かえるのか不安。最高のチームワークの四人組になれるなら、私は命を惜しまないで戦う」

最年少であるオリーヴを擁護してあげたいというブロンウィンの親切な心。仲間のためなら命を厭わない彼女の並外れた勇氣に、七人は感服して拍手を送った。ただしニユートは複雑そうな表情だ。無理もない。ブロンウィンはそんなニユートの背中を力強くたたき（怪力少女のパワフルな力に、ニユートは少し顔をしかめた）、「私は本当のことを言ったに過ぎないよ、ニユート。でも、あんたが信用できる仲間だっことは分かっているからね!」と笑いかけた。

「じゃあ、ブロンウィンとベス、オリーヴ、ニユートの四人組でいい?」とエマ。

「うん!」

四人の明るい声が重なる。

「よし!じゃあ、私たちはこの四人で頑張ろうね!」

フィオナが太陽のように明るい笑顔で言った。

「もちろん！」とマドレーヌ。

「敵を倒すぞー！」と意気込むエマ。

「頑張りましょう！」とクイニーも言う。そういうわけで、四人ずつの組も決まった。あとは作戦を立てるだけだ。だんだん戦いまでの道のりが開けてきた。

「目的は僕たちの命とループを守る。まずはループを守るために戦おう！」とニュートが力強く宣言する。

「敵軍はループ目がけてやってくるはず。石垣の外には大勢が待ち構えている。午前0時になったのと同時に敵はループに侵入してくる。そうになったら、ループが危険にさらされちゃう！だから、私たちは午前0時になる前に外に出て、敵軍を一人でも多く倒すようにすればいいんじゃない？」

ブロンウインが提案する。

「よし、じゃあ午前0時の五分前に、私たちはループの外に出て戦わない？」

エマの目はららんと輝いている。

「いいわね！」とクイニー。オリーヴは近くにあった紙とペンを引き寄せ、『外軍 午前0時五分前より戦いスタート』と書いた。

「戦いの練習をしようよ！私とマドレーヌは初めての戦いだから、一瞬で負けちゃう！」と不安そうにベスが言う。

「そうね！じゃあ、練習しましょうか？せっかく八人いるのだから、先ほど決めた四人ずつの組で対戦したらいいんじゃないかしら」

さすがクイニーは大人だ。和ませるように穏やかに微笑みつつも、しっかりとみんなをまとめてくれる。

外軍メンバーはミス・ペレグリンに「庭で戦いの練習をしてきます」と伝え、ぞろぞろと庭に出た。マドレーヌはエマ、フィオナ、クイニーと共に、ニュート、ベス、オリーヴ、ブロンウインと向かい合う。

「練習だからって、手加減はなし！」とオリーヴ。ニュートの号令に合わせ、みんなは構えた。なんだかどきどきする。

「スタート！」

ニュートが言うと同時に彼の杖から爆竹が飛び出し、始まりを告げ

てくれた。マドレーヌは何をすればいいのか分からなかったが、エマに引つ張られ「何をぼやぼやしてるのよ！」と怒られた。

フィオナはポケットから植物の種を出し、それを持ってどこに投げようか見定めている。ニュートがマドレーヌに向かって杖を振り、閃光が飛び出した。マドレーヌは思わずしゃがみこむ。その時、フィオナが種をマドレーヌの前に投げた。種は一瞬で蔓の壁になり、マドレーヌの前に立ちはだかる。閃光は蔓に当たり、跳ね返った！ニュートが目を見張る。

「ありがとう！」とマドレーヌはフィオナにお礼を言った。

「危なかったね」とフィオナ。

間髪入れずに、エマが手から炎を放った。ニュートの前髪が巻き上げられ、熱い炎が彼を覆う。

「行くわよー！」

マドレーヌはまた、エマに引つ張られた。

ニュートがエマへのお返しで放った炎の壁が、マドレーヌ、エマ、フィオナ、クイニーに向かって飛んでくる。広い面積なので逃れられない…。

マドレーヌは慌ててエマとフィオナの手を握った。フィオナがクイニーを引き寄せる。マドレーヌは「大きなトピアリーの後ろ、大きなトピアリーの後ろ」と祈った。次の瞬間、地面が揺れ動いたような不思議な心地がしたかと思うと、マドレーヌたちは大きなアダムのトピアリーの後ろにうずくまっていた。

「ありがとう！」

クイニーがささやき、後ろからニュートに呪詛を放った。ニュートとクイニーの一騎打ちが始まる。フィオナはまた、植物の種をニュートに向けて放った。

オリーヴがかがんで閃光が当たらないように歩いてきた。ニュートの足元に落ちた種を拾い、ふわふわと浮かんでいく。小さなオリーヴはその体を生かせるのだ。

「もうー」とフィオナがいらついていたが、その仇を取るかのように、エマはマドレーヌに「ニュートの真後ろに連れて行って」と小声で言った。

「なぜ？」

「お願い！それと、あなたは一步も動かないで黙っていてね」とエマ。マドレーヌは何が何だか分からないが、エマの言う通りに瞬間移動した。ニュートはクイニーと呪文を放って戦っているため、後ろには気を取られていない。オリーヴは空高く浮かび上がり、少し離れた位置ではベスが、オリーヴの腰に巻きついているロープの端を握っている。

エマは足をしのばせてニュートに近寄った。クイニーは状況を把握しているようだが、ニュートに感づかれないように戦い続けている。

「ニュート」

エマがささやき、ニュートの肩に手を回した。どうやら、無邪気でお茶目なオリーヴの真似をしているようだ。

ニュートが振り向かず、「オリーヴ？なに？」と言った。

「ニュート、あのね…」

エマがオリーヴの声音を真似て言い、いきなりニュートに飛びついた。ニュートは驚き、そのまま芝生に倒れ込む。

「エマ!?!」

ニュートはエマが敵であることを忘れ、素っ頓狂な声を出した。ニュートがクイニーから目を離すのと同時に、クイニーが放った閃光がニュートにまっすぐ飛んでいく。マドレーヌはエマの手を取り、急いで庭の反対側に連れていく。

「ありがとう！」

エマが息を切らしながら言った。

「圧巻の演技だったよ！」とマドレーヌ。エマは勝ち誇ったように微笑みながら、「どうにかしてニュートの気をそらそうとしたのよ！この技、戦いでも使えるかしらね？」と言った。

背後で鈍い音が聞こえて振り返ると、ニュートが力なく芝生の上に倒れ込んでいた。

「ニュート!!」

エマが目を見開いて叫び、ニュートに駆け寄った。マドレーヌも後ろから駆けつける。フィオナも、ベスも、ブロンウィンも、宙に浮いていたオリーヴも鉛の靴を履いて走ってくる。戦いの練習は中断された。

「彼に何をしたのよ!？」

エマがに怒鳴った。クイニーは少したじろいだが、気を取り直して微笑む。

「私の呪文が命中したの。ニュートは失神しただけで、数分後には意識を取り戻すわ」とクイニー。しかし、エマは落ち着くどころか目をつり上げ「本当なの？ニュートが意識を取り戻さなかったら、一生あなたを責め続けるからね!」とクイニーを指した。

「そんなことにはならないわ」とクイニー。エマはクイニーを睨み、「証明して!できなかつたら、あなたをここから追い出してやる!」と石垣を指した。

「あんたは追い出せる立場じゃない」とブロンウィンが冷静にエマに言う。だが、エマはその言葉を無視し、クイニーをじつと観察している。

「そうね」

クイニーはやれやれと杖をニュートに向けて振った。すると、ニュートの目が開いた。

「ニュート!」

「エマ?」

エマはニュートを見て大喜びしているが、ニュートにはこの展開が呑み込めていないようだ。

エマは一転、クイニーに「良かった!」と笑顔を見せた。クイニーは肩をすくめたが、エマの変わりやすい気分には慣れてきたらしく、魅力的な美しい微笑みを返した。

ニュートは何事もなかったように立ち上がり、エマに「君の声真似はすばらしかった!」ときこちなく褒めた。エマは顔を赤らめたが、「さあ、怪我がないみたいだから、練習を再開しようよ」と仕切った。ニュートはそんなエマから目を離せずにいたが、ふと『失神の呪文』

なんて慣れっこだから心配要らないのにね」と独り言を言った。マドレーヌはニユートを見つめる。彼の後ろには、美しい星空が広がっていた。

第11話 意味

外軍も庭に出てきて、内軍対外軍で戦う練習をすることになった。ミス・ペレグリン、ダンブルドア、謎の男ササッキーがアドバイスしてくれるそう。マドレーヌたち八人は外軍と向かい合って立っていた。

「始めー」

ダンブルドアの杖先から爆竹が飛び出し、練習が始まった。

まずはテイナがニュートに呪詛をかける。ニュートはやり返した。二人の閃光が衝突し、火花が舞い散る。強力な呪文をかけ合っているにもかかわらず、テイナは余裕の表情だ。それに、ニュートもにっこりしている。どうやら、いつも味方どうしであるお互いと戦うのが新鮮でおもしろいようだ。

テイナが自分自身に杖を向けたかと思うと、ふわりと空に浮き上がった。ニュートもテイナに並ぶ。オリーヴが2人から少し離れたところを漂い、面白そうに見物し始める。

テイナが更に高く舞い上がり、有利な位置からニュートに呪文を放つ。ニュートがすれすれで姿くらましし、テイナの背後から呪詛を投げつける。テイナは全身に盾の呪文を纏ってやり返す。と、オリーヴがテイナの視界を遮るべく猛突進してきて、2人の空中戦は打ち切りとなった。テイナとニュートはほっとした顔をしている。空中浮遊は単純なようで大変に違いない。難なく移動しているオリーヴを羨ましそうな目で見ている。

地上に降り立った瞬間、ニュートが片手を振りかざした。エメラルドグリーン閃光がひらめき、テイナに襲いかかる。

「杖なしで呪文を行使したのね？腕が上がったじゃない、ニュート・スキャマンダー！」

「君も杖なし呪文を使ったのか」

ニュートが、テイナが跳ね返してきた呪詛を避けながら言った。

「ええそうよ。でも杖を使うと安心感が段違いね」とテイナ。杖なし呪文はやめ、また杖を使っている。ニュートが笑って同意し、俊敏に

姿をくらます。

ニユートの視界を遮ろうと、姿現した彼の前に飛び出したのはヒューだ。負けじとオリーヴがニユートを守ろうとする。ヒューが吐き出す大量の蜂をオリーヴが吹き飛ばしている。

マドレーヌはこの時とばかりベスと組んだ。もしも戦いの時に組むことになっても対応できるようにという理由付けだが、実は単に一緒に組みたかったというだけだ。

イーノックは不気味な臍物をボールでも投げるかのよう放つてくる。それをベスが防御してくれた。顔を歪めて必死のベスを守ろうと、マドレーヌは辺りを見回していた。

フィオナが作る植物の壁をクレアが後ろの口で噛みちぎる。フィオナの目は充血し、全力で壁を作っている。それを破壊するクレアもまた、必死の表情だ。

イーノックはベスに臍物を全て跳ね返されて諦め、今度はオリーヴを標的にした。しかし、オリーヴはふわりふわりと浮いてイーノックの攻撃を交わし、挙げ句の果てには息を吐き出してイーノックを庭の反対側まで吹き飛ばしてしまった。

イーノックの仇討ちをしようとやってきたのはティナだ。いくらオリーヴでも、ティナが浴びせる強力な呪詛の数々にはかなわない。最初こそ耐えていたオリーヴだが、やがて疲れてくると、たくさんの閃光を受けて庭に倒れ込んでしまった。

「オリーヴをかわいそうな目に合わせるなんて、私が許さない！」

クイニーがオリーヴの世話をしている間、ブロンウィンがかんかん怒って進み出た。手にはたくさんの盾。重い金属製だが、ブロンウィンにはへっちゃらなのだ。体を覆うようにして盾を構え、ティナに突進していく。ティナはさすがに怖がり、いくつも防御の呪文を自分の周りに張り巡らす。それを突破できなくなったブロンウィンは、ベスに「槍を貸して！」と頼んだ。

「ちよっと待ってー！」

ベスはマドレーヌのそばを離れ、建物の中にある槍を取りに行った。マドレーヌはブロンウィンが防御の壁を壊そうと叩きのめすの

を見ていたが、不意に彼女の大声が降りかかってきて驚いた。

「マドレーヌ、後ろ！」

マドレーヌは何が起きるのか悟る前に、素早く姿をくらましていた。アダムのトピアリーの目の前に姿を現して現場を見ると、ジェイコブが勢いよく拳を突き出し、「悪いなダンナああ！」と怒声を上げてマドレーヌがいた場所を殴っていた。空振りした彼は「あ？」と素っ頓狂な声を上げる。

ベスが戻ってきて、離れているBronwynnに向かって槍を投げた。見事な槍投げだが、ベスとBronwynnの間には距離がある。すかさずオリヴが空中を飛んできて息を吹きかけ、Bronwynnの手元までまっすぐ飛ばした。マドレーヌが振り向くと、ニユートが片手で紐を握っている。オリヴは体重が軽いので、腰に紐を巻きつけておかないと浮いていってしまうのだ。そのため、普段は鉛の靴を履いている。

「オリヴ、調子は良くなったの？」と心配そうなベスが聞く。

「もう大丈夫！」とオリヴはにっこりし、みんなの援助に向かった。

Bronwynnが鋭い槍で見えないバリアを突くと、ついに結界が壊れた。奇声を上げるBronwynnは「悪いなダンナああ！」とジェイコブの真似をして突進する。

「あつ、意外とかわいい」とBronwynnの小さな声が聞こえた。

ティナとBronwynnが激突している間に、マドレーヌの下の地面が突如光った。稲妻だろうか？

いや、ホレースだ。予知夢を見るという能力を持つホレースは、それをスクリーンに投影できるのだ。特に予知夢がない時でも、眩い光は武器になる。

マドレーヌは顔を覆いながら退散した。と、Bronwynnがよそ見している。ヒューがオリヴにハチで攻撃しているのだ。オリヴはハチを吹き飛ばしているが、今にも刺されそうな状況。素晴らしい闇祓いであるティナはその一瞬を捉え、Bronwynnに向かって杖を振りかざした！

マドレーヌは一秒もかけずに瞬間移動し、気がつけばBronwynn

の目の前にいた。彼女の手から盾を取り、ブラウンウィンが「え？」と言うのも聞かずに、ティナの前にかぎす。間一髪で閃光を受け止めた。

「ありがとう！」とブラウンウィンが言い、慌ててオリーヴの助けに向かっていた。

「ほら、逃げて！」

エマに突き飛ばされたマドレーヌは驚愕し、すぐさま大木の後ろに瞬間移動した。ジェイクとジェイコブがマドレーヌの後ろで拳を振りかざしていた。

「悪いなダンナあああ！byダブルジェイコブ！」

二人は決めポーズを取ったが、エマに「何やってるのよ、あなたたち」と一蹴され、炎を突きつけられた。マドレーヌは声を上げて笑いながら、自分の持つ能力を存分に生かし、仲間の援助をするために飛び回った。奇妙なこどもたちと魔法使いたちが戦っている様子を、ミス・ペレグリンは微笑んで見つめていた。

「はい、そろそろ終わり！」

ダンブルドアの声が響き渡り、みんなは動きを止めた。

「皆さんの戦いっぷりは素晴らしかったですよ。この調子で本番でも力を尽くしてくださいね」とミス・ペレグリン。みんなは「はい！」と答え、心地よい疲れに浸った。ダンブルドアが冷たいクランベリージュース入りのグラスを人数分出現させて配っている間に、ササッキーがアドバイスする。

「ニユートとティナの二騎打ちは素晴らしいものでした。2人とも互角だからこそその戦いでしたね。しかし、視界を遮られただけで中止するとは何とも情けない！」

「味方のオリーヴを巻き込みたくなかったんです」

ニユートが弁解する。

「その気持ちは分かります、ニユート。ですが本番はその一瞬の躊躇が隙を生みます。君ほどの魔法使いなら、オリーヴと協力して戦う事も出来たはずです」

「そうですね。気をつけます」とササッキーが微笑み、今度はブロン

ウインの元へ歩み寄る。彼は全員に直接話しかけ、戦いで役立つアドバイスをして回っていた。そのどれもが役立つものだ。

しばらくしてササツキーが話し終わると、ミス・ペレグリンが口を開いた。

「0時まであと一時間を切りました。そこで、皆さんは屋敷に戻り、万全の準備をしてください。内軍はループを守るために防御を施すこと。えー、アルバス？あなたは強力な呪文を無数知っているわね？内軍メンバーと共にバリアを張っていたら助かるわ」

「もちろんじゃ、アルマ。ササツキー、君も一緒に？」

「ええ」

そういうわけで、内軍メンバーは早々に引き上げ、ループの入り口に結界を張り巡らしに行った。ミラードは役目を仰せつかり、敵軍の企みを盗み聞きしに行った。マドレーヌたち外軍も時間があれば手伝うように頼まれたため、自分たちの準備を早めに終わらせようと屋敷に戻った。

マドレーヌは自分とティナの寝室に入った。すでにティナの荷物は片付けられ、彼女が生活していた証拠は何もなくなっている。よそよそしく寂しい部屋。マドレーヌはへたりこんだ。

もうすぐ始まる戦いで、自分は戦えるのだろうか？最善を尽くし、仲間とループを守るのだろうか？最年少のオリーヴも頑張っている中で、自分は活躍が少ないように思えてならない。みんなが自分を必要としていないようにも思えてしまう…。

もうだめだった。今まで必死に我慢してきたものが涙となり、押し留められなくなった。声を上げて泣きながら、自分の荷物をリュックサックに詰める。中身を確認していると、硬い本が手に触れた。

信じられない…これを忘れていたなんて！マドレーヌの心はたちまち安心で満たされた。母がくれた本。挫けそうな時に見るように言われていた。

表紙をめくろうとしたが、母がベスと一緒に見るように、と言っていたことを思い出した。真っ黒の分厚い本を手にしたマドレーヌはリュックサックを肩にかけ、寝室を引き払った。もう二度とここに入

れないかもしれない。このループが壊され、この寝室を目にすることは
ないかもしれない。だが、そうならないように最善を尽くそう！前
向きな気持ちになり、階段を下りて行った。

大広間にはベスがいて、ヒューと二人で話している。マドレーヌは
幸せをぶち壊さないように、二人から少し離れたところに腰を下ろし
た。会話は嫌でも耳に入ってくる。

「君は外軍で、僕は内軍。もう会えないかもしれない」とヒューがベス
に語りかける。

「確かに…。今まではそんなこと考えなかったけど、お別れの可能性
だってあるね…」

ベスはうつむつつ、ちらりとヒューの顔を見た。ヒューがベスを引
き寄せ、ベスが笑顔になる。次の瞬間――。

「マドレーヌ！」

ベスが声を上げてヒューの腕から飛び出し、駆けてきた。マドレー
ヌは苦笑し「ヒューという良かったのに！」と言った。

「あのね、ベス。これ、覚えている？ 私たちがお母さん達と別れた時
に、私のお母さんにわたされたんだけどね…」

ベスはしきりに考えていたが、晴れ晴れとうなずき「うん！」と言っ
た。

「これなんだけど… 私たちで一緒に見るように、お母さんから言われ
たの。挫けそうな時に見るように、ってね。今、見ない？」

マドレーヌが提案すると、ベスは嬉しげに笑い「そうだね！」と言っ
た。二人は名残惜しそうなヒューに断り、近くの空き部屋に入った。

「実はね」

ベスが真面目な顔つきで切り出した。

「私、ここにいていこうかって考えていたの」

マドレーヌは驚いた。

「えっ？」

ベスは真剣にうなずいた。

「私は何の役にも立てないし、かえってみんなを困らせているんじゃないか、
って思ってたの…」

「そんなことない！私のほうが役立たずだと思うよ」

ベスは微笑んで首を振った。

「私は臆病で気が弱い。だから、実は戦いが嫌で嫌でたまらなかつたの！それで、こっそり逃げようとした。ループの入り口には内軍のみんなががいるから、戦いが始まるまでは出ていけない。でも、戦いが始まれば…」

「逃げられる」

マドレーヌは言葉を引き取った。

「敵を倒すふりをして、敵軍の間をぬって逃げていく。街のはずれまで行き、お母さん達がいるホテルに逃げ込む。そう本気で考えていたの。でも、そんな時、クイニーが来た」

「クイニー？」

マドレーヌは有り得ない展開に驚き通したが、ふと思い当たった。

「あつ、クイニーは…開心術士！」

「その通りなの。クイニーは私の顔を見るなり『そんなことはやめて。みんな、あなたを必要としているのよ』と言った。『挫けそうな時に自分を見つめ直せるのは、あなただけなのだから』と、心のこもった助言をしてくれた。そのおかげで私は戦う決心がついたの！」

ベスは吹っ切れたように笑顔を見せた。

「私は挫けそうだった。だから、この本を見てもいいの！さっ、見よう」

マドレーヌはうなずき、本の表紙をめくった。一ページ目を開いた途端、歌声が聞こえてきた。はつとしてページを凝視すると、少しずつ写真が見えてきた。動いている！中心にいるのは母だ。その隣にはエマ。見覚えのあるこどもたちも、ミス・ペレグリンもいる。そして、ミス・ペレグリンの左側ではダンブルドアが穏やかに微笑んでいるのだ。

母は祖母が亡くなってからエマたちと会ったらしいので、その時に撮ったのだろう。ダンブルドアの魔法の力でこのような一冊の本にしたと思うと、今さらながら感服してしまう。

次のページをめくると、母からのメッセージだった。

「マドレーヌ、あなたには隠していたことがいくつかあります。それを皆さんから聞くことになるけれど、決して怒らないでね。あなたのためを思っただけのことです」

母の意外な言葉に、マドレーヌとベスは顔を見合わせた。動く写真の中の母が微笑んでうなずき、また口を開く。

「挫折そうになることもあるはずよ。ピキュリアとして生きるのは困難であり、苦しくて辛いこともきつとあるわ。でも、仲間と協力して強く生きてくださいね。お母さんは祈っています。最後に……」

お母さんはエマたちと視線を交わし、いたずらっぽく微笑んだ。

「マドレーヌ、ベス、あなた達には素敵な仲間がいる。それは本当に幸せなこと。仲間と助け合って成長した2人を見られる日を、心から楽しみにしています。そして、強い意志を持つてね。強大な闇の力に屈すことなく、自分の道を自分で切り拓いて……」

マドレーヌの視界がゆらいだ。母が、エマが、ダンブルドアが、ミス・ペレグリンが、大好きな仲間達が、写真の中のみんなが笑顔で手を振っている。やさしい言葉が頭の中で響き、そつと背中を押してくれる気がした。挫折そうな自分へのメッセージだ。

「感動する……」

ベスも泣いていた。

その次からは動かない写真が連なっていて、全て母のものだった。花の冠を頭にのせた美しい母が、こどもたちに囲まれて笑顔で立っている写真。ハヤブサ姿のミス・ペレグリンを肩にのせて微笑むお母さん。エマと手をつないでいる母。いくつもの写真がお母さんの楽しい思い出を語る。このループに入れるということは、もしかしてお母さんもピキュリアなのだろうか？それとも、祖母からのつながりを入れるのか？動く写真の中の言った言葉が気にかかる。隠していたことというのは、一体……？

とにかく、零時まであと一時間を切っているのだ。今この瞬間にも、敵軍はピキュリア（ニユートたち魔法使いも含め）を滅亡させる計画を練り、味方の内軍はループを守ろうと懸命に策をめぐらせているのだ。マドレーヌとベスは視線を合わせてうなずき、どちらから

ともなく「行こうか」と声をかけ合って下の階に降りた。不思議なことに、マドレーヌにはもう普通の世界への未練はなく、ベスも逃げ出そうという思いがきれいさっぱり消えたように、吹っ切れた笑顔を見せている。

リュックサックを背負っている二人は屋敷の出口に着いた。ティナとニュートが赤い火花を散らせて出入口にバリアを張っている。ということは、マドレーヌとベス、ティナとニュート以外は屋敷から出たのだろう。

「二人とも、急かすわけではないんだけど、早く外に出てくれない？」
そう言いつつも、ティナは急かすように早口だ。

「ごめんね」とベス。ニュートが一時的に結界を解いてくれ、二人は急いで屋敷の外に出た。外軍の二人は二度とこの屋敷を目にできない可能性が高い。もしくは戻ってきた時には、大好きで居心地のよいここが壊されているかもしれない。だが、それも自分次第だと、二人は知らず知らず悟っていた。それも母からのメッセージが気づかせてくれたのだ。

ニュートに結界を解いてもらわなくても、マドレーヌの能力なら簡単に屋敷の外へ飛び出せる。しかし、最後はやはり自分たちの足で屋敷を出たい、と思っていたのだった。

屋敷の庭も様変わりしていた。フィオナが作り出した大きなトピアリーが立ちはだかっている。闇の魔法使いたちならば魔法で簡単に壊せるのだろうが、少しでも時間稼ぎできれば、という願いがこもっているのだ。それに、トピアリーは動いている！ダンブルドアとササツキーの魔法の賜物だ。トピアリー軍団に襲われないうちにと、マドレーヌはベスの手を取り、素早く瞬間移動した。

かたい地面に足がついた。ループの出入口では、内軍メンバーと外軍メンバーがそろって防御を施している。ミス・ペレグリンは汗をぬぐいながらあれこれ指示し、ダンブルドアとササツキーはループの入口で素晴らしく強力な結界を張り巡らしている。フィオナは蔓をトンネル出口に巻き付け、クイニーがそれに魔法をかけて敵に襲いかかる仕組みにしている。二人はブロンウィンが運んできた大きな岩を

避けて移動した。

「エマー！何か手伝えることはない？」

マドレーヌはエマを見つけて駆け寄った。

「マドレーヌー！ちようどいいわ。その袋に入っている瓶を取ってくる？」

エマに言われた通り、くたびれた袋に手を伸ばして瓶をいくつか取った。

「ありがとう！」

エマは受け取ると、片手で瓶を支え、もう片方の手で瓶の蓋を開けると、中にあかあかと燃える炎を入れた。

「なにに使うの？」とベスが聞くと、いつの間にか隣に来ていたティナが「この瓶に入れたエマの炎に魔法をかけ、私たちが敵を感知するのと同時に炎の罫が発動する仕組みよ」と誇らしげに説明してくれた。

「ワアー、すごーい！」

「ティナもエマも、さすが！」

ベスとマドレーヌは感服して褒めたたえた。

「誰か、庭の端にある植木鉢を運んできてくれる？」

ニュートが向こうから大声で呼ぶと、エマは頬を赤らめ、嬉しそうに「ニュート、私が行く！」と持ち場を小走りに後にした。マドレーヌたちはティナと顔を見合わせて笑い合う。

その後、マドレーヌとベスは敵軍を妨げる手伝いをした。ベスはブロンワイン、フィオナ、クイニー、ミス・ペレグリン、ジェイコブと協力して岩や植木鉢などを持ってき、トンネルの出口や庭、屋敷の前にたくさんの障害物を置いた。マドレーヌはというと、ティナとニュートが作った紐状の網を持って空中を移動し、屋敷やトンネルの上に設置するオリーヴの手伝いを積極的にした。また、外軍メンバーに属しているため、瞬間移動でバリアが張つてある入り口を楽々通過し、屋敷の中から食料を持ってきて、ジェイクとホレース、クレアたちと共に袋詰めしていた。

午前零時三十分前。マドレーヌとクイニーたちはそれぞれ仲間を連れて瞬間移動し、結局、また屋敷の中に戻った。そして食堂で、ク

イニーとティナが作ってくれた料理の数々を堪能しながら、迫り来る戦いに備えて最終確認をした。

「まず、外軍から計画を説明しなさい！」

ミス・ペレグリンがテーブルの反対側から指す。マドレーヌ、フィオナ、クイニー、エマの四人組とベス、ニュート、ブロンウィン、オリヴのチームはそれぞれうなずき合った。先ほど完璧に作戦を練り終えたところだ。

「私たち外軍は、午前零時の五分前にループの外に出ます。そして、一人でも多く敵を倒します。また、敵軍に追われ始めたら二手に分かれ、後に敵の目から逃れるために四手に分かれることになりました」

エマがきちんと順序立てて説明した。続いてベスが立ち上がる。

「まず、チームですが：四人組は、私、ブロンウィン、オリヴ、ニュートと、フィオナ、クイニー、エマ、マドレーヌです。二人組は、私とブロンウィン、フィオナとクイニー、エマとマドレーヌ、オリヴとニュートです。それぞれの特性を生かせるチームを作りました」

二人が座り、内軍の皆が拍手をくれた。続いて立ち上がったのは、内軍代表のティナとホレーヌだ。

「僕たちの役目は二つあります。一つは、このループを守り抜くことです。ペレグリン院長が作り上げたこのループは、僕たちにとつてなくてはならない場所であり、ピキュリアという世間から外れた存在の僕たちの最後のシェルターでもあります。このループを敵に壊されてはなりません。内軍は死力を尽くしてここを守ります」とホレーヌ。少年紳士はいつにも増して真剣だ。

「もう一つの役目は言うまでもありませんね。外軍、内軍。皆を守ることです。命より大切なものはありませんから、内軍はループを守る軍と言っても、何か危険がさし迫ればすぐに外軍の援助に向かいます。そこで、外軍メンバーにこれを渡します」

ティナは説明しながら外軍のみんなにブレスレットのようものを渡してくれた。中心には石がはまっている。

「これはリングです。私がつけているマクーザの闇祓い用のネットワークを見てください。これは緊急事態に赤く光ります。それからピン

トを得て作ったこれは、緊急事態にこの石を握りしめると、内軍メンバーが一、二人駆けつけます。居場所やなぜ危険なのかも、内軍メンバーのブレスレットに通知されます」

「ティナ、すごいわー」とオリーヴ。

「ありがとう！」とマドレーヌやベス。みんなは内軍に拍手を送った。「さて、ミスター・ポートマンたち！先ほど詰めた食料を皆に配ってくださいか？…ミス・クイニー・ゴールドスタインは着替え用の洋服を配ってください！あと二十分で外軍が出発ですから」

いけない、そうだった！マドレーヌはジェイク、ホレーズ、クレアと共に袋詰めした食料を配った。腐らさずいつでも食べられる魔法の食料で、シュトルーデル五つ、ビスケット十枚、小さなトースト三枚、クロワッサン二つの詰め合わせだ。飲むたびに水がきれいになる魔法の水筒もあり、永遠にたつぷりの水を飲める。

クイニーが配ってくれたのは、彼女が作ってくれた着替え用の洋服で、女性用は動きやすいシャツとパンツ、男性用は戦いに適している素晴らしいスーツ。それらをリュックサックに詰め込み終えると、外軍出発まであと十五分になった。今まではその感情を無視していたが、深夜ともなると眠気が増す。しかし、緊張でそれどころではなかった。マドレーヌは死への恐怖を感じていた。ホローガストに追われた時に続き、これは二回目を感じる気持ちだ。亡き祖母のように勇敢に戦うと決意していたが、やはり無理だろう。こんなに臆病で気の弱い自分は、仲間を守るのは愚か、自分をすら守れないかもしれない。相手は熟練の魔法使いやワイトたち、それにホローガストだ。自分が太刀打ちできるわけがない…。そう思っていた矢先、エマが声を弾ませたのだ。

「マドレーヌと一緒に戦うなんて、夢のよう！かつてミイナと戦ったのと同じね。だって、マドレーヌはミイナの若い頃に生き写しですのもの！ミイナとよく似た話し方だし、やさしさも勇敢さもミイナそっくり。そんなマドレーヌと戦えるなんて幸運だわ！まるでミイナと一緒にいるみたい！」

マドレーヌが崇拜していた祖母と自分が似ているという、祖母ミイ

ナノ親友だったエマの言葉。嬉しいはずだったが、マドレーヌは苛立ちを抑えられなかった。もちろん、エマが親友を亡くして悲しいのは分かる。それに、その孫であるマドレーヌが仲間なのだから、嬉しく思うのも分かっているはずだった。しかし、マドレーヌは激しい怒りを感じている。自分はいくら孫だと言っても、ミイナ本人ではない。自分と祖母を同じに思われても困る。マドレーヌは、自分は自分だと強く感じている…。気がつく、マドレーヌはこう口に出していた。

「ごめんなさい…私、やっぱり、戦いになんて参加できない」
自分でも驚くほどきつぱりとした口調だった。にぎやかだったみんなが一瞬で静かになり、痛いほどの沈黙がマドレーヌを包む。
「え?」

オリーヴがきよとんとして聞き返す。

「マドレーヌ?」

ベスが理解できないというように首を傾げた。

「今更か?」と怒り心頭のイーノック。続いてホレースが「今まではそんな態度、微塵も出さなかつたじゃないか!」と声を詰まらせた。

「マドレーヌ、そう思うのも無理はないわ。でも、参加してみない?」
クイニーの優しい言葉。

「仲間とループを守りましょうよ!」とティナ。

「君ならできる!」

「大丈夫だよ」

ジェイコブとニュートにも励まされたが、マドレーヌは首を振った。

「本当にごめんなさい! 私には無理なの。私は…」

持て余すほどの感情に困り果てた。

「私は…祖母じゃない」

そう言い、素早く食堂を出ると、一目散に自分とティナの部屋だった場所に向かった。

馴染みのあるそこで膝を抱えて座っていると、大きな足音が聞こえてきた。ちらりと目をやると、今、一番会いたくない女の子、エマが足音高く歩いてきた。マドレーヌは慌てて目をそらす。

「私はマドレーヌとミイナを混同したわけじゃない！」

エマは唐突に叫んだ。

「でも、嬉しいじゃない！かつての大親友の孫と一緒に戦えるなんて、信じられないほどの喜びじゃない！」

マドレーヌは「だから、私は祖母じゃないんだから、彼女の孫とばかり言わないでほしいの！」と言い返そうとしたが、エマの顔を見た瞬間、言いかけた言葉をのみ込んだ。気の強い彼女は目に涙をためていたのだ――。

エマはついに、地団駄を踏み、泣きながら怒鳴った。

「マドレーヌは私のかけがえのない親友なんだから！」

その言葉を聞いた瞬間、怒りがスーッとおさまっていくのを感じた。頭が冴え、自分はなぜ怒っていたのだろうかと思議に思えてくる。気がつけば、マドレーヌは口を開いていた。

「エマは私にとって、無二の親友よ」

エマはちよつと涙ぐみ、「そんなのとづくに知ってるわよ、おバカさん」とマドレーヌをぶつ真似をした。そして、不意にマドレーヌの隣に座り、そつと肩をもたせかけてきた。

マドレーヌは動揺したが、エマの背中をやさしくたたいた。エマは気恥ずかしげに微笑み、「マドレーヌが一番好きな友達だよ」と言った。マドレーヌはからかいたくなり、「ほんと？」と聞いてみる。

きよとんとしているエマに、マドレーヌは笑いながら「一番好きなのは私じゃなくて、ニユートじゃないの？」と言った。マドレーヌには妙な確信があったのだ。凶星だったようで、エマは顔を真っ赤に染めて「そ、そんなわけないわよ！ニユートなんか…」とつぶやいた。

マドレーヌは笑いながら、エマと連れ立って下の階に降りた。心配そうな子どもたちと魔法使いたちに「ご迷惑をおかけしてごめんなさい」と謝る。隣にはまだ顔を赤らめているエマがいるので、余計に注目を浴びる。

「ミス・ブルーム、先日、私が言ったことを覚えていますか？マドレーヌはミイナではありませんから」とミス・ペレグリンが注意すると、エマは「ごめんなさい、ペレグリン院長」と素直に頭を下げている。

ニユートがエマに歩み寄り、「あれ、エマ？顔が赤いね」と言い、手を伸ばしてエマの額に触れようとした。マドレーヌだけでなく皆が見ているので、エマはさらに顔を赤らめ「私は平気だからー」とニユートの手を振り払った。ニユートは不思議そうだ。みんなは事情は分かっていると言いたげに笑った。

場の空気が和やかになったとき、ササツキーが「外軍出発まであと十分を切りましたよ！」と皆に教えた。大変だ！マドレーヌたち外軍は集まり、内軍メンバーにも手伝ってもらい、どこに瞬間移動するか決めた。最初はみんなで敵の前に現れ、敵をできる限り倒してすぐに二手に分かれる。ベス、ブロンウィン、オリーヴ、ニユートは沼地の方向に逃げ、ファイオナ、クイニー、エマ、マドレーヌは海の方角に逃げる。それでも敵から追われてしまったら、各グループともループの前まで戻り、そこで敵を打ち倒そうと決めた。

外の様子を見てきたミラードが「闇の魔法使いとワイトたちは、僕たちのことをすぐには殺さないらしい！後でまとめて殺すそうだから、戦い中はこちら側の死者が出ない！」と報告した。皆は安堵のため息をついた。マドレーヌも内心、「戦いで仲間や自分が死んでしまうのは絶対に嫌だ！」と思っていたので安心した。簡単な呪詛ならば、クイニー達がすぐに対応してくれるだろう。

「戦いで弱らせて、後でまとめて餌食にするパターンだな」とジェイク。

「そうなれば敵軍は、体力を奪う呪文を頻繁に使うだろうね。だからこそ僕たちは呪文を避け、敵をできる限り倒すんだ」

ニユートが真剣な面持ちで言うと、エマがうつとりと微笑んだ。マドレーヌは微笑ましく思いながら、すば抜けてかわいい親友を見つめていた。マドレーヌはエマに対し、他の友達とは違う友情を感じている。彼女が怒りっぽくてもイライラしないのはそのためだ。エマは誰よりもやさしくて、誰よりも正義感が強い。大切な大切な大親友だ。

そうこうするうちに、外軍出発まであと五分を切った。零時五分前のマドレーヌたちの道しるべは月だけだ。そこで、すばらしく簡易的

なライトを装着して戦うことにした。そうでないとこの暗闇の中では何も見えないだろう。

必死に深呼吸する事で緊張を和らげようとしているマドレーヌの手を誰かが握り、誰かが背中を撫でた。目をやると、ティナとクイニーがにっこり微笑んでいる。クイニーの金髪が風でなびき、ティナの瞳は爛々と輝いている。普段通りに振る舞っている2人を見、マドレーヌは実感した。2人が立派な大人であるという事を。

「マドレーヌ、心配する必要なんてない。友達をみすみす死なせるはずがないでしょう？ 私達が必ずあなたを守るわ」

ティナが力強く言った。それは、マドレーヌだけでなく周囲にしていることにもたちにも勇気を与える言葉だった。

普段は見せない好戦的な笑みを浮かべるティナは、不思議と皆を安心させた。マドレーヌは「ありがとう」とささやいた。感謝の言葉を述べる事で、溢れるほどの気持ちを全て伝えたかった。

「マドレーヌ。意味を考えるの」

クイニーが優しく諭すように言う。

「意味？何の意味？」

「あなたが今ここにいる意味を。あなたがピキュリアである意味を。そして、あなたがこの世に生を享けた意味を。それはね、マドレーヌ・ウエントワースという存在が世界を構成する一部である事を示しているの。世界は闇の魔法使いやワイトのような悪人で占められている訳ではない。一人一人が集まって、初めて世界というもの確立する。そして、このループも立派な世界なの」

「クイニーの言う通りよ。世界は広い。でも、ピキュリア達にとってはこのループが世界そのものよ。この小さな世界を守り切りましょう」

クイニーとティナの言葉に励まされ、気づくとマドレーヌはうなずいていた。

零時二分前。外軍と内軍は石垣に集まり、円になって手を重ねた。この時マドレーヌは、ここにいるみんなは年齢や性別、能力など関係なしに自分の仲間なのだ改めて感じ取った。ここにこうして集ま

れた、共通の性質を持つ自分たち。かけがえのない仲間だ。

「私達は一心同体です。全員で精一杯戦いましょう。何が起こっても、私はすぐに皆さんのもとへ駆けつけると約束します」とミス・ペレグリン。

「このようにして一致団結している君たちは実に立派じゃ。わしが君たちをややすくと失わせるような真似をしようか？ 答えはノーじゃ」とダンブルドア。

そして、最後にサツキーが「私たちならば絶対に負けない。私たちは人数こそ少ないけれど、団結力と友情はどんな悪人にも負けませんから！ 安心して戦いましょう。ここにいる一人ひとりの健闘を祈ります」と心のこもったメッセージを送ってくれた。サツキーとは知り合ってまだ少しだが、彼の溢れるほどのやさしさと勇気を知ることができた。

「外軍出発まで、あと三十秒……」

時計を手に行っているミス・ペレグリンが宣言し、外軍は石垣の前で構えた。内軍のみんながカウントダウンする中で、マドレーヌたち外軍メンバーは手をつないだ。最初の大仕事はマドレーヌが任されている。ループの外、つまりは敵軍が待ち構えている場所に姿を現し、みんなでいっせいに戦いを開始するのだ。自分の能力の見せ場の一つでもある。マドレーヌの胸板が激しく波打つ。ああ、あと十秒だ！ マドレーヌは思わず隣のエマとベスの手をぎゅっと握った。二人はやさしく握り返してくれる。

「五、四、三、二、一……」

マドレーヌは心の中で「ループの外、ループの外」と念じた。信頼のおける仲間たちが一緒だと思うと、自然に恐怖が薄れたのだ。瞬間移動しているマドレーヌの耳に、「ゼロー！」という声が遠く聞こえた。

第12話 戦いの幕開け

風が強く吹きつけた時、マドレーヌの足がかたい地についた。

「なんだ?」「誰だ?」「どうしたんだ?」と敵軍がざわめく声が響いている。マドレーヌは目を開き、目の前にいる大勢の敵に対峙した。マドレーヌの想像以上に大人数で、ループの前の坂までを覆い尽くすほどの人数だ。もつとも、坂はずいぶんと長い。

間髪入れずに、ニユートとクイニーが呆気に取られている敵軍に呪詛を浴びせた。マドレーヌは恐怖を再び感じる前に何かしなくてはと思い、辺りを見回した。今や完全な戦士と化したエマが手から炎を放ち、ベスは魔法使いが浴びせてくる強力な呪文を必死に防いでいる。空中に浮かんだオリーフは上から赤いからしを振りまき、敵軍が顔を覆ってしゃがみこむのを満足げに見ている。敵軍は主に二つのグループに分かれているようだった。一つ目のグループは、骸骨のような仮面で顔を隠し、闇に紛れる黒いローブを身につけている魔法使いたち。彼らが振る杖からは恐ろしい呪文が飛び出している。もう一つは：マドレーヌは身震いした。瞳孔がない敵のグループだった。それがワイトだ。そのグループには女性もちらほら混じり、主に男性はナイフを、女性は槍や盾を構えている。

「行くわよー!」

エマの大声で我に返り、マドレーヌは彼女を見た。その声が合図になり、ブロンウイン、エマ、フィオナが飛び出す。

「悪いなダンナああああ!!!!」と奇声を上げるブロンウインは、重たい岩をいくつも抱え、敵軍に突進していく。しかし闇の魔法使いたちが一斉に杖を振り、ブロンウインの手からは岩が吹き飛んでしまった。

「インカーセラス!縛れ!」

一人の魔法使いが低い声で呪文を唱えた。閃光がブロンウインに向かって飛んでいくが、彼女は気づいていない…。

「そうはさせない!」

マドレーヌの隣にいたベスが疾風のごとく走り出たかと思うと、ブ

ロンウインの前に割り込んで手をかざした。閃光が屈折し、呪文を唱えた張本人である魔法使いが自らの魔法にやられ、頑丈なロープに縛られた。

「かたじけない」

ブロンウインがかしこまって言うと、ベスは「ブロンウインだったら、何時代の人なの？」と言いつつも嬉しそうに笑った。そして、また無数の呪詛を跳ね返す作業に没頭した。

ニユートは三人の魔法使いを相手に接戦を繰り広げ、クイニーは華麗に敵の足元をすくって倒している。マドレーヌはぼーつとしていたが、「マドレーヌ！」という誰かの声で自分の目の前の状況に意識を戻した。勝ち誇った顔の魔法使いが放った閃光が飛んでくる。マドレーヌは慌てて瞬間移動し、その魔法使いの背後に姿を現した。魔法使いが呆気にとられている隙に、その魔法使いの背中を勢いよく押す。彼は倒れ込み、彼の前にいるワイトにもぶつかると、将棋倒しになった。

「やるじゃない！」

エマが笑い声を上げると、倒れ込んだ魔法使いやワイトたちに火を近づけて怯えさせた。

ループに侵入しようとしている敵軍を防ごうと、ニユートとクイニー、ファイオナ、オリーヴが必死に戦っている。ベスはループに浴びせられている破壊の呪文を防ごうと四苦八苦し、ブロンウインは相変わらず重たい岩を投げている。エマは灼熱の炎をワイトに突きつけ、火傷させていた。マドレーヌは自分の仲間の活躍を目の当たりにし、誇らしく思っていた。

「あああああああああゝっ！」

マドレーヌが一人でにっこりしていると、誰かの叫び声が空気を切り裂いた。ハッと我に返り、慌てて声のする方に目を向ける。と、さっきまで岩を投げていた勇敢なブロンウインが目を見張り、気が触れたかのように大声を上げていた。

「ブロンウイン！」

マドレーヌはしやがみ込んでいるブロンウインに駆け寄った。

「どうしたの？」と聞くと、ブロンウインは「オリーヴが…」ときさやいた。

マドレーヌはオリーヴの姿を探したが、見当たらない。代わりに氷のように冷たい笑い声が聞こえてきて、そちらに目をやった。

オリーヴが血を流して倒れていた。彼女の腕や足からは赤い血が流れ出、血溜まりを作っている。ダンブルドアが魔法をかけた、オリーヴの意思通りに動き、彼女を空中につなぎ止めているはずの金色のロープは、ずたずたに切り裂かれ投げ捨てられていた。オリーヴは今や無能に等しい。能力が弱まり、浮遊という特性を失ってしまったのだ！

そんなオリーヴを囲んでいるのは、二、三人の魔法使いたちだ。そのうち一人は冷たく光るブロンドの髪で、鋭い瞳は冷酷な光を放っている。マドレーヌはこの男性が闇の魔法使いの長、ゲラード・グリンデルバルドだと悟った。彼は不敵な笑みを浮かべ、青白い光を放った。

「キヤアアアアアアアアア！」

オリーヴの悲痛な泣き声が夜闇を切り裂く。グリンデルバルドの呪文が鞭のようにオリーヴの細い体に巻きついていく。オリーヴは身悶えして苦しがつた。マドレーヌは我慢できず、思わず姿を消していた。

オリーヴの隣に姿を現すと、隣にはニュートがいた。同時に瞬間移動していたのだ。

「マドレーヌ、僕がグリンデルバルドと戦う。君はオリーヴを連れてループに戻れ！」

ニュートが彼らしくない大声を出して怒鳴った。その間にも、オリーヴの体がグリンデルバルドの呪文というナイフで刻まれているのだ。そうする他ない。

「マドレーヌ、急げ！」

ニュートはそう言い、グリンデルバルドと一騎打ちし始めた。マドレーヌはオリーヴを抱き抱え、虫の息になりかけている彼女とともに移動した。

マドレーヌたちが姿を現したループは大混乱で、入り込んだ敵と待ち構えていた味方で衝突していた。マドレーヌはその中でも平和な物置付近にいた。オリーヴの怪我はひどい。意識を失っているほどだ。誰か魔法使いを探さなくては。

「マドレーヌ？」

その声に振り向くとティナがいた。

マドレーヌはティナに飛びついた。苦しむ仲間を目の当たりにし、勇気が挫けた。ティナはやさしく受け止めてくれたが、すぐに「オリーヴね？」と杖を上げた。

オリーヴは見る見るうちに回復していった。薄桃色の閃光が彼女の血を拭い、エメラルドグリーンの閃光はオリーヴの傷をふさぐ。ティナは「オリーヴ、大丈夫よ」と母親のような口調で励まし、オリーヴは意識を取り戻した。

「…ティナ？マドレーヌ！」

オリーヴがマドレーヌの腕の中で、きよんとした瞳で言った。

「…あつ！」

オリーヴが小さく悲鳴を上げた。今どこにいるのか、そして何故ここにいるのかに気づいたのだろう。彼女の痩せこけた頬が恐怖で青ざめる。マドレーヌはオリーヴの頬を自分の手で包んだ。ティナは何錠か薬を出し、オリーヴに飲ませている。

「うえーっ、気持ち悪い！」

オリーヴが吐きそうな声を出した。ティナはオリーヴの背中をぼんぼんと軽くたたき、オリーヴが六つの錠剤を一気に飲み干してしまめっ面するのを見守っている。

「オリーヴ、リュックサックは？」

マドレーヌがはたと気づいて聞いた。マドレーヌたちは皆、食料や衣服などがぎっしり詰まったリュックサックを背負っているはずなのに、オリーヴはそれを持っていない。

「分からない…置いてきちゃったかも」

オリーヴがけろりとして言った。ティナは慌てて「水を飲まなきゃ！さあ…」と自分のリュックをかき回していたが、物置の中に敵が何

人が潜入してきてしまった。

「ゴールドスタインだな？」

激しい嫌悪のこもった視線をティナに向けているのは、他ならぬグリーンデルバルドだ！

「逃げてー！マドレーヌー！」

ティナが叫ぶより早く、マドレーヌは姿を消した。遠ざかっていくループの中、ティナのオリーヴを抱いて瞬間移動する姿がおぼろげに見えた。ティナの背中にグリーンデルバルドの強烈な閃光が打ち付けられるのを、マドレーヌは見た。

心の中で、エマのところ、と願った。マドレーヌはエマに会いたかった。やさしいけれど怒りっぽいエマを見たかった。

はたしてエマはそこにいた。耳をつんざく騒音の真っ只中で、エマはマドレーヌの手を握った。エマのブルーの瞳がきらめいている。その目には涙が光っていた。

「マドレーヌ、どこに行っていたの？心配したんだからね！」

エマが言った。マドレーヌはエマの耳に顔を寄せて「オリーヴよ。ティナの応急処置で最悪の事態は免れたわ」とささやいた。エマはうなずき、マドレーヌの手を引いて走り出した。

「ループはどう？」とエマ。敵軍がどれだけループに入り込んだのか知りたいのだ。

「ごめんなさい、私は物置にいたから。でも、グリーンデルバルドがいたわ」

そう言うと、エマがさつと青ざめた。

「グリーンデルバルド…？」

「…そう」

「これ以上侵入させてはダメよ！一人でも多く倒すの！」

エマが決意を固め、マドレーヌの手を離れた。エマの温もりが離れていく。マドレーヌはふと寂しさを感じたが、気を取り直した。自分でできることをしなくてはならない。

「…マドレーヌ、フィオナ、クイニー！誰か！」

エマの声が戦場と化したループ前に響き渡り、マドレーヌは飛び上

がった。数十秒前に別れたばかりのエマの姿を必死で探し、息を呑んだ。

ループ内から戻ってきたグリンデルバルドが、エマに呪いを浴びせていた。エマは右に左にと交わしているが、随分辛そうだ…。

エマのかけ声に、フィオナとクイニーが彼女のもとへ駆け寄った。マドレーヌも迷わず参戦する。四対一の戦いが始まった。

エマがグリンデルバルドの隙について炎を放つが、呆気なくかわされた。マドレーヌは姿をくらしめて彼の後ろに移動し、背後から突き飛ばそうとしたが、だめだった。クイニーの閃光とグリンデルバルドの閃光が衝突し、楕円型の光を反射している。恐ろしくも神々しい。

グリンデルバルドはクイニーの閃光を地面に投げ捨て、新たな閃光で襲った。強烈な藍色の閃光がクイニーの髪を激しくなびかせる。クイニーは歯を食いしばり、必死に持ちこたえている。

フィオナが前に進み出ると、手に持っていた蔓の種を投げた。グリンデルバルドの足元に落ちるが、彼はこんなものは屁だという顔で笑っている。一瞬後、グリンデルバルドが甲高い悲鳴を上げた。

蔓がグリンデルバルドの体に巻きつき始めたのである。フィオナは顔を歪ませ、必死の思いで蔓を仕掛けている。グリンデルバルドが身動きを取れなくなった時、フィオナが「逃げるよ！」と大声を出した。

四人は全力疾走した。闇の魔法使いから浴びせられる閃光を何とかかわし、不意に前に立ちふさがるワイトの刃物の切っ先をかわし、とにかく走った。クイニーは途中途中で振り向き、「プロテゴ！守れ！」と呪文を唱えて閃光を屈折させてくれた。時には「リクタスセンプラ！笑い続けよ！」や「アグアメンティ！水よ！」と言って時間を稼いだ。四人は走り、走り、走った。

それから何分が経つただろうか。

マドレーヌは走る足を止めずに後ろを振り返った。敵軍はついてきていない。次に前を向き直り、エマを見た。そして、彼女の向かおうとしている場所が分かると蒼ざめた。

自分たちの目の前には海岸が待ち受けていたのだ。もしも今、敵軍

に攻められれば……。前方からも、左右からも挟まれてしまう。つまり、逃げ道はない！それに……。

「海で何するの!？」

後ろでテイナが叫んだ。オリーヴを誰かにあずけて戻ってきたのだ。テイナは本来内軍だが、もうそんな区別をつける暇もなかった。はたしてマドレーヌは最もな意見だと思った。敵に追われたら海岸のほうに逃げるという案を出したのはクイニーで、エマとbronウィン二人で作戦を立てたらしい。

bronウィンが近づいてきてマドレーヌとテイナを引き寄せると「エマとわたしの言う通りにして。そうしてくれなきゃ困るから」ときさやいた。そこで、二人はおとなしくついていった。後ろにいるクイニーは意識を集中させているように見える。

浜辺についた。

エマとbronウィンがうなずき合い、クイニーが「私たちが立てた作戦は……」と説明を始めたその時、「マドレーヌ！クイニー！bronウィン！エマ！誰か助けて〜！」という大声がクイニーの説明をさえぎった。四人が大慌てで振り向くと、全力疾走してくるベスの姿があった。必死な面持ちで、今にも泣き出しそうな顔をしている。